CSEAS Bibliographical Series No.4

オーギュスト・パヴィー著
『カンボジアおよびシヤム王国踏査行』

Auguste Pavie

Excursion dans le Cambodge et le royaume de Siam.

Saigon. Imprimerie du Gouvernement. 1884

北川香子訳

(付) 松浦史明訳・解題「バンテアイ・ネアン碑文」

The Center for Southeast Asian Studies (CSEAS)

Kyoto University

2008

「オーギュスト・パヴィー著『カンボジアおよびシャム王国踏査行』」北川香子訳／松浦史明訳・解題「バンテアイ・ネアン碑文」.京都：京都大学東南アジア研究所. 2008.

CSEAS Bibliographical Series No.4
ISBN 978-4-901668-41-5

Published by the fund obliged from the Public Relations Committee, G-COE program “In Search of the Sustainable Humanosphere in Asia and Africa”

The Center for Southeast Asian studies, Library, Kyoto University,
46 Shimoadachi-cho, Yoshida
Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan
Copyright ©2008 Kitagawa Takako and CSEAS

目次

訳者まえがき	2
1. プノム・ペンからコムポートへ	4
2. コムポート	13
3. コムポートからコムボン・サオムへ	25
4. コムボン・サオムからウドンへ	45
5. ウドンからポーサットへ	65
6. ポーサットからバット・ドムボーンへ	78
7. バット・ドムボーン	87
8. バット・ドムボーンからトゥック・チャーへ	95
9. リエチコルの物語（海水の後退）	103
10. バンティエイ・ニエンの碑文（碑文 松浦史明訳）	112
11. トゥック・チャーからシエム・リエプへ	114
12. シエム・リエプからコムボン・レーンへ	124
13. ロッティ・サエンの物語（大湖の形成）	128
14. コムボン・レーンから大河まで	132
（付1）「バンテアイ・ネアン碑文解題」松浦史明	143
（付2）ローマ字対照表	148
あとがき	168

*本文中の () は原本の表記、〈 〉 は訳注である。

訳者まえがき

この冊子は、オーギュスト・パヴィー（1847～1925年）による、『カンボジアおよびシヤム王国踏査行』⁽¹⁾の日本語訳である。ただし第10章に含まれているバンティエイ・ニエン（バンテアイ・ネアン）碑文に関しては、原本中のフランス語訳文にかなりの問題があるので、アンコール史研究を専門とする、上智大学院生の松浦史明さんに改めて翻訳および解題をお願いした。

原本としたのは、サイゴンで1884年に出版された刊本であるが、この『カンボジアおよびシヤム王国踏査行』は最初、雑誌『エクスキュルシオン・エ・ルコネッサンス』⁽²⁾第3～7巻（1881～84年）に分割連載された。1884年の刊本は、題名・内容ともに、『エクスキュルシオン・エ・ルコネッサンス』に掲載されたものと全く同一である。パヴィーによるインドシナ半島各地の踏査結果は、『インドシナにおけるパヴィー踏査隊 1879～1895年』11冊本として、1898～1919年にかけて刊行された。そのうちの1冊、1901年に出版された『地理と旅行記Ⅰ』⁽³⁾中、「第1期、カンボジアおよびシヤムの旅、1880～1885年」と題した部分に、『カンボジアおよびシヤム王国踏査行』も採録されているが、そこではかなりの文章が省略されて、短縮されている。

従って、1880年代初頭のカンボジアータイ湾岸およびトンレ・サープ周辺地域一の景観を詳細に知るためには、1901年の『地理と旅行記Ⅰ』よりも、『エクスキュルシオン・エ・ルコネッサンス』版か、1884年の『カンボジアおよびシヤム王国踏査行』を見た方が良い。ただし1901年版には、1884年までの版に含まれていない、メコン東岸からコーチシナ国境までの地域、ター・カエウ（タケオ）周辺地域（第4、5章）に関する記述がある。さらに『カンボジアおよびシヤム王国踏査行』中には、踏査旅行が行われた年月日に関する記載がないが、『地理と旅行記Ⅰ』（81頁）から、踏査期間は1880年12月18日～1881年3月16日であったことが判明する。やはり『インドシナにおけるパヴィー踏査隊 1879～1895年』の1冊として、1906年に出版された『地理と旅行記Ⅱ』⁽⁴⁾には、「第3期、シヤム、トンキン、東ラオス、雲南、アンナム、カンボジア、インドシナ東部および南東部の蛮族の諸地域〈原語 régions sauvages〉」と題した部分の第10章「カンボジア」に、メコン上流部、ラオスとの国境付近のストウン・トラエン地域での滞在記が収録されている。

フランスは1863年の協定でカンボジアを保護国とし、1884年の協定によって、カンボジア王国の行政、司法、財政、商業に大幅な改革を加え、特に各地方の中心地にフランス人理事官を配置して、より積極的な地方統治に乗り出した。『カンボジアおよびシヤム王国

踏査行』でパヴィーが旅した 1880 年末～1881 年初頭という時期は、カンボジアがフランスの保護国となって 20 年弱、フランス人理事官が地方に配置される直前である。すなわちパヴィーがここに描き出しているのは、フランスの影響が強く感じられるようになる以前の、カンボジアの地方の風景である。

最後に、仏領インドシナ史の中でのパヴィーという人物は、実は、カンボジア踏査を終えた後の、ラオスでの活躍で有名であることを付け加えておく。パヴィーは 1887 年に、初代副領事としてルアンパバーンに着任した。同年 6 月にホー族（中国人匪賊）がルアンパバーンを襲撃した時、炎上する王宮からウンカム王を救出し、王の信任を勝ち得た。1892 年からはバンコクに総領事として駐在し、1893 年にフランス・シヤム条約をまとめ、メコン河を境界に、「フランスが支配するラーオ地域、すなわち『ラオス』」を創出した。1895 年のフランス・中国協定で、ラーオ地域と中国との間の境界が確定し、1896 年の英仏協定で、ビルマとの境界が定まった。その後 1904、07、26 年のシヤムとの条約により、「ラオス」の西側境界が確定した。東側については原則としてメコン河の分水嶺が、ベトナム地域との境界となった⁽⁵⁾。カンボジア史におけるパヴィーは、ムオヤド・ラグレと並ぶ探検家であるが、仏領インドシナ政治史におけるパヴィーは、「ラオス」という領域の創出において大きな役割を果たした。

(1) *Excursion dans le Cambodge et le royaume de Siam*. Saigon. Imprimerie du Gouvernement.

(2) *Excursions et Reconnaissances*.

(3) *Mission Pavie Indo-Chine 1879-1895. Géographie et voyages I. Exposés des travaux de la mission (Introduction, 1ère et 2ème périodes = 1879 à 1889)*. Paris. Ernest Leroux.

(4) *Mission Pavie Indo-Chine 1879-1895. Géographie et voyages II. Exposés des travaux de la mission (3ème et 4ème périodes = 1889 à 1895)*. Paris. Ernest Leroux.

(5) 飯島明子 2004 年 「植民地下の『ラオス』」『東南アジア史① 大陸部』 山川出版社。

1. プノム・ペンからコムポートへ

かつて、プノム・ペンからコムポートに行くには、まずウドンまで行かねばならなかった。コムポートに向かう唯一の道はウドンから出ており、交通手段もウドンで手に入れたのである。

ウドンの町を発ってコムポートの小さな港に向かう隊商は、頻繁かつ多数であった。カンボジアの産物の大部分が、この港で船に積み込まれていた。

街道は巨大な並木道のように、手入れが行き届き、広くかつ平坦で、巨大な木々に覆われた森を貫いて切り開かれていた。

カンボジア政府の業務のために車や徒歩で旅する者たちが使えるよう、8つの宿駅がほぼ等間隔に配置されていた。それらは以下の通りである。

ウドン、アントン・クラヴィエン（巻きついたウナギ）、ブン・スラン（水浴の湖）、トラム・トラ、トラペアン・クロプウ（ワニの池）、ルバット、アレンヒエム、コムポン・バーイ（御飯の岸）。

カンボジア人は宿駅をドムナックと呼ぶが、アンナム人たちが占領中にトラムと呼んだ、その呼称がまだ残っていて、今でも使われている。

それぞれの宿駅には、旅人のための休息の家が1軒あった。それは広々としていて、部屋に区切られており、比較的快適で、しばしば村から遠く隔たっていたにもかかわらず、奉仕する人々のお陰で、必要な食糧を手に入れることができた。

フランスの征服によって、サイゴンへの道が確実な商業路となると、ウドンからコムポートへの道は少しずつ見捨てられていった。さらに後、1865年に、カンボジアの宮廷が最終的にプノム・ペンに落ち着くと、湾岸に行く用事のある官人や商人たちはウドンまで行かなくてもよくなり、コムポン・トゥオルを通過してトヴィエ・ダムレイ（ゾウの門）の通路で街道に合流するようになった。当時、この地域にはほとんど人が住んでおらず、森に覆われていたので、困難ではあったのだが、このようにすると、何日も旅程を短縮することができた。

1872年にこの方面に電信線が敷設されたために、枝下ろしとやぶ払いがなされ、基地と宿駅が設置された。新しい道が造られたのである。

カンボジア人は河〈原語 fleuve〉の大半と、川〈原語 rivière〉のいくつかを、プレークと呼んでいる。通常の川はストウンである。小川〈原語 ruisseau〉をオー、急流〈原語 torrent〉をチュルオツという。大河、湖の支流、後江およびチマー湖のみが、トンレーと

呼ばれている。

ブレーク・トナオト、ストウン・スラー・コー、ストウン・アンロン・マック・プラン
および、一年の最初の数か月間は干上がってしまうような小規模な小川がいくつか、街道
を横切っている。プノム・スルオチ（尖った）、プノム・バック・ヌム（壊れたくびき）の
小山脈が街道沿いに延び、コムポン・バーイに着く 15 キロ手前で、トヴィエ・ダムレイの
隘路を通る。プノム・ペンからコムポートの知事の居所であるコムポン・バーイの村まで
の総距離は、約 150 キロである。

この道程上にある地は、カンダール・ストウン（ストウンの真ん中）地方、バティ地方、
トリアン（ラピスヤシの名）地方、バンティエイ・ミエス（金色の砦）地方およびコムポ
ート地方に属している。

雨季であっても、ゾウあるいは水牛車を使って、3 日半で踏破することができる。ただ
し水牛車の場合には、各駅に交代の荷車が準備されていたならば、である。

宿駅の数 は 6 である。すなわちコムポン・トゥオル（高い岸）、クナー、スラー・コー、
コー、マック・プラン（一種の果樹）とドムナック・トゥークである。

渡河のために小船が配置されているので、河川が増水しても重大な困難は発生しない。
起こりうる最大の障害は大河の氾濫で、ひどい場合にはブレーク・トナオトまでの地が浸
水し、第 1 行程はカヌーを使うことになる。

プノム・ペンを出て最初の 7~8 キロ間は、ウドンの車道を通る。しかし、数年前から
橋の状態が悪くなっているため、平原を横切る小道に行く方が好まれている。この小道は
電信線とウドンの道が分岐するところで、電信線に合流する。

町を横切る小さな水路は、河をコック（シラサギ）の池とプーム・ペイの池に結ぶ。こ
の水路には、町を出るところで、ゾウが渡るに十分な木橋が架かっており、小道の出発点
となっている。

小道が走っている土地には多数の墓所があり、耕されておらず、高い草やいばら、あり
ふれた木々で覆われているが、街道に近づくにつれて様相が変わる。この街道だけは多く
の荷車が頻りに往来し、田舎の人々の群で賑わっている。とりわけ良い季節の間には、彼
らは自分たちの耕地の作物を持ってプノム・ペンまで行き、買物をしてくる。街道はコム
ポン・トゥオルまで、水田の中を走っている。次々と現れる空き地や、森林の断片が水田
をさえぎり、砂糖ヤシ〈原語 palmier à sucre、パルミラヤシのこと〉(Borassus
flabelliformis) の下に散らばるいくつかの小さな集落や、古木の陰になっている荒廃し

たパゴダが見える。

住民たちは少数で、稲を植え、ヤシ砂糖を作り、牛を育てている。時々、20～30頭の牛の群と出会う。

同じ地点を出発して、同じくコムボン・トゥオルに向かう道がもう1本ある。これは3キロほど道程が短い、乾季の末に、ゾウに乗った旅人が通るだけである。

コムボン・トゥオルの村は、旅人の家の周囲に集まった30軒ほどの小屋と、耕地の中に孤立した何軒かの小屋からなっており、カンダール・ストウン地方の一部をなしている。

プレーク・トナオトの右岸、プノム・ペンから24キロに位置し、カンボジア人農民、中国人商人、数人のアンナム人鍛冶屋あるいはクーリーが住んでいる。稲の他には、わずかばかりの桑、タバコ、藍を栽培している。川岸に立地しているため、高水位期には、染料木、特に蘇芳 (*Coesalpinia sappan*) や、川を遡ったところにある森林の産物を基本とした、小規模な商業活動のセンターになる。

プレーク・トナオトは雨季になると、幅70～80メートル、深さ7～8メートルになるが、その他の時期には、砂と砂利の河床の上に、わずか1ピエ (32.48センチ) の水が流れているだけである。両岸はよく耕され、数多くの村々が散らばって、活気に満ちた雰囲気を与えている。

プレーク・トナオトは水源の山の名前を冠した、3つのストウンの集合体である。すなわちコムボン・サオム地方から来るストウン・ダチ・プダオ、トポーン地方から来るストウン・ロロク・カーン・チューン、ソムラオン・トン地方から来るストウン・アウラルである。ストウン・ダチ・プダオとストウン・ロロク・カーン・チューンは、トモー・コル (標石) の村で合流する。ストウン・アウラルはその少し下流、右岸に注ぎ込む。

プレーク・トナオト (砂糖ヤシ) は後江に流れ込む主な支流であるが、それ自身に流れ込む重要な支流は1本だけである。それはアンロン・アーレアック (悪魔の淵) で、ソムラオン・トン地方のクラン・ソマー村とクレチュ村の間で、右岸に注ぎ込む。この川については後に取り上げることとなるが、その流路の一部は航行可能である。

2番目の宿駅、クナーまでの街道は、最初、水田に耕された平原を横切る。その中央には多数の砂糖ヤシが生い茂っており、その下には時々、孤立した小屋が隠れている。プノム・スルオチから来て、プレーク・トナオトに向かう1本の小さな小川が、これらの耕地と貧弱な森を隔てている。竹、やぶ、やせっぽちの木々が、わずかばかり草に覆われた砂地に生えている。道はえぐられ、わだちがいっぱい、ゆっくりとしか進めない。少しず

つ状態は良くなっていく。クラン・コムラエンの村が右手、別の耕された平原の中央に現れる。プノム・スルオチが同じ側に見える。間隔を置いて再び森が現れてくるが、先の森よりも力強く、山や水田を視界から隠している。

クナーはコムボン・トゥオルから 20 キロの所にあり、バティ地方に属している。その小屋は道の周囲の森の中に散らばっており、街道沿いでは 50 頭ほどの牛が草をはんでいる。旅人の家の正面にある 2 つの小さな池が、村に飲料水を供給している。

15 分ほど歩くと、道はプノム・スルオチから離れていく。この山脈は最初、8~10 キロほど離れていたのが、その半分ほどの距離まで近づいてくる。非常に木が繁茂しているように見える。この山脈は西方に続いているということである。

森の中に見られる水田や、ひっきりなしに通り過ぎる小さな家畜の群から判断すると、クナーとスラー・コーの間の地にはかなり人が住んでいる。しかしながら、近くには 1 つも集落がない。2 本の小川が東方に流れているが、高水位期には 1~2 メートルの水深がある。これらはプノム・スルオチから来ており、短い距離を流れた後、合流してプレーク・トーチになり、後江に注ぐ。左右には沼が多く、時には道の真ん中にもある。しばしば乾季でも水が残っているほど深く、旅人にとっては貴重な水源となっている。

ストウン・スラー・コーはその岸に第 3 の駅と、同じ名前の村があるのだが、水源が 2 つある。1 つはクラン・ソムラエ地方のプノム・モルーから来る。もう 1 つはコン・ピセイ地方のアン・キーである。岸には、スラー・コーまでに、クビー、アン・キー、クローク（ヒョウタン）、ポーの村々があり、スラー・コーの先には、コムボン・ユオル、トレアン、コムボン・アムピル（タマリンドの岸）がある。この川はトレアン地方とバティ地方の境界であり、チャウドックの町から北に少し離れたところ、主要な市場であるター・カエウ（タケオ）の下流で、チャウドックの水路に合流する。

川が街道を横切るところには、1 つの橋の残骸がまだ残っている。川幅は 7~8 メートルで、深さは 3~4 メートルである。雨によって増水すると、100~200 メートルの幅にわたる両岸を深さ 1~2 ピエの泥水で覆う。

コー、より一般的にはトラム・コーまでの地は、寂しく単調である。広い林間の空き地、大量の竹、利用価値の小さな木々など、プノム・ペン以来全く変わらない。その中には、多くのトバエン（*Dipterocarpus magnifolia*(?)）、一群のクローン（*Dipterocarpus crispalatus*(?)）がある。これらは油を出す種類の木だが、利用するに十分なほどの収量はない。何本かのソムラオン（*Sterculia*）がある。その種子から採れる油は蜜蝋と混ぜて、

カンボジア人が口ひげに使ったり、キンマに触れて汚れないように唇になすりつけたりするポマードになる。スラエン (*Strychnos nux vomica*) の実が落ちて地面を覆っているところもあるが、現地人たちは集めようとしなない。

第4の駅に近づくと、いくらかの水田が道を縁取っている。スラー・コーからは18キロしか離れていない。左右遠くには2~3の小集落が見える。地面は完全にむき出しになり、非常に良く耕された巨大な平原の中に出る。その中央には1つのパゴダがあり、小屋が散在し、大きな沼の近くに旅人の家がある。

南には、8~10キロの所に、アンコール・ティーとモルンの頂がそびえている。西にはバック・ヌムの山脈があり、その中では、高さが250~300メートルの、プノム・ノリエイとダムレイ・ロミエル (墜落、ゾウ) が目立つ。これらの山々は全て、木々が非常に繁茂しているように見える。

ここで後江の流域を離れる。これから出会う河川は、シヤム湾に向かって流れ下る。

今まで記述してきた地域に生息する軟体動物は、数が多いが種類は少ない。二枚貝〈原語 bivalve〉の中では、多くの種類の *Cyrena* 属〈原語 genre〉が、全ての流水および澱んだ水で繁殖している。この *Cyrena* 属についてはコル博士が、ソムラオン・サエンの地層に多く含まれていることを指摘している。2種類の *Anodonta* もまた、かなり広く分布している。Unio 属も様々な形態のものが、ほとんどあらゆる所で姿を見せる。3種類の *Hyria* 属と、2種類の *Iridina* 属も、プノム・ペンからコムボン・トゥオルまでの池や大きな沼には一般的であるが、プレーク・トナオトの向こう側では見つからなかった。

この地区で確認された、沼あるいは川に棲む腹足類〈原語 univalve〉は、以下の属に分類される。Ampullaria、Paludina、Melania、Limnea、Hemisinus、Bythinia と Planorbis である。Ampullaria と Paludina は大変に多く、それぞれ4種類が地区全体に広く分布している。その中で最も一般的でないのが、*Paludina cambodgensis* (Mabille、Lemesle) である。Melania、Limnea、Hemisinus、Bythinia はよりまれである。Planorbis は1種類だけが、プノム・ペン周辺の沼に棲んでいる。それは *Planorbis circumspissus* (Morelet) で、マビーユ氏とルムスル氏が、コーチシナでもクーラオ・タイの湿地に住んでいることを指摘したものである。

陸生の貝については、プランテーションや森、山の上で *Helix*、*Bulimus*、*Cyclostoma*、*Streptaxis*、*Strophostoma*、*Pupa* 属の15種類が見られる。*Helix distincta* と *crossei* (Pfeiffer)、および *Bulimus annamiticus* (Crosse、Fischer) は、頻繁に見られる。他

のものはまれではないが、あまり広く分布しているわけでもない。

街道はプノム・バック・ヌムの中央に向かい、その麓を通り過ぎる。そこは極めて肥沃である。林間の空き地では、高い草の中に、アンナム人の樵が数人、ひっそりと住んでいる。小さな開墾地の中央に、その小屋が見え隠れしている。山々には非常に多様な種類の木々が生えている。ティエル (*Dipterocarpus loevis*)、クロムオン・チャムバック (*Hibiscus*)、ソークロム (*Xilia dolabrifomis*(?))、プディエク (*Anisoptera*)、その他多数である。この地の人々は、それらからわずかばかりの油、植物蠟、樹脂を抽出する。彼らはヴォワ・アンコット (*Siphonia*(?)) という、ゴムを出す蔓を採集するが、様々な種類のチュレイ (*Ficus*) は、ありふれた樹木であり、大量のグッタ・ペルカを出すにもかかわらず、無視されている。

山脈を通り過ぎた後、ストウン・アントン・マック・プランに近づくまで、土地は砂質で、植物はやせている。この川は左岸に、先の駅からは27キロ離れて、第5の宿駅があり、注目に値する。この場所での川幅は8~10メートル、深さは4~5メートルである。バンティエイ・ミエス (金色の砦) 地方のチュルオツ・ドムボーン (急流、棍棒) の山を出て、北西から南東に流れ、バンティエイ・ミエス地方と右岸のコムポート地方、ピエム (河口) 地方の境界になっている。この川はスラエ・クノーン (内側の水田)、ブン (湖)、クロオープ (香り)、トラペアン・キー、マック・プランといった村々の領域を横切り、アン・クレイ、クラン、スバウ (小屋を葺く草)、ワット・アン、テイ、トゥーク・ミエス (金の舟) を通った後、プノム・カンラン (コガネ虫) に至る。トゥーク・ミエスまで潮が感じられる。フランス人石灰製造業者がいるプノム・カンランからは、ジエン・タイン水路の水と混じって流れ下り、ハーティエンで海に注ぐ。

アンロン・マック・プランは、スラエ・クノーンからアン・クレイまではかなり深いが、この地点からトゥーク・ミエスまでの間はしばしば歩いて渡ることができ、その先は川筋の終点まで航行可能である。大雨が降ると、流れは急になり、岸を越えて、幅 300~400メートルにわたる兩岸を、何日間も2~3ピエの水で覆う。特にスラエ・クノーンからマック・プランの間はよく耕されており、非常に肥沃である。反対に近隣の豊かな森の産物は、ほとんど完全に無視されている。ストウンで筏を操るのが困難なので、森の開発に携わる者はほとんどいない。時には落下した枯れ木の枝で、川床が完全にふさがれてしまう。よりしばしば、兩岸から小枝が突き出してもつれ合い、水面で交差して、無数の越えがたい障害をなしている。しかしストウンは十分に深く、おそらく一年のうちのある時期にそれ

を使うのは、ほとんど問題がないであろう。ぐらぐらする橋を渡るとそこは、素晴らしくよく耕された、小さな国の入口である。すばらしい園地の左右を森が区切り、その中央にはチュークの集落の小屋が散らばっている。タバコ、桑、サトウキビの畑の縁では、子供たちが村の家畜の群の番をしている。4~5キロにわたって水田が続き、所々でそれをさえぎるように、桑のプランテーションが現れる。少しずつ、森が再び姿を現す。そのまばらな木々の中にはかなり多くのクルールがあり、カンボジア語でムレアクと呼ばれる美しい黒漆を出すのだが、手がつけられていない。大量のスマチ、すなわちティートリー〈原語 Melaleuca〉(アンナム語のチャム)があり、松明を作ったり、小屋の棟を覆ったりするために、皮が半分むかれている。

これらの木々は、広く真っ直ぐに視界の果てまで伸びている街道に沿って、列になっているように見える。チュヌル・チュルルの小川が同じ名前の村の辺りから流れて来て、街道を断ち切り、トゥーク・ミエスの方に流れ、ストウン・アンロン・マック・プランにその青い水を注ぎ込んでいる。幅は4~5メートル、深さは2メートルである。その両岸に人は住んでいない。

前方には、両側に山々が見えてくる。右手がトヴィエ・ダムレイ(ゾウの門)で、左手がプノム・ルーン(亀裂の入った山)である。プノム・ルーンは洞窟だらけである。その険しい山腹は裸の岩々で、深く裂けている。所々、豊かな植物が山の麓から頂上までを浸食していて、この山に独特の雰囲気を与えている。右手の峰々が比べものにならないほどの森に覆われ、ほとんど規則的な起伏を見せているのとは全く対照的である。

ドムナック・トゥークは、マック・プランから20キロの所にある、第6の駅である。村はなく、簡素な休息の家がある。ここで奉仕する人々や交代の車両は、先に語った集落、チュークから来る。

左手のプノム・ルーンは、わずかに離れた所にある。その間の平原は、最初は低く、一年の内のある期間は、半ば浸水している。わずかに数本の木が生えている。しかし、土地が高くなり始めると、植物は急に発達し、枝が密集し、高いところで交差して、主な洞窟に続く小道を陰らせている。この洞窟はいきなり姿を現す。地面から8~10メートルの、2本の巨大な油の木の間にあり、その小枝が入口の回廊のようにになっている。岩から岩へとよじ登って入り口に着く。そこからは、奇妙な光に照らされた、広い空間が眼前に開ける。頂上の大きな開口部から、微風に揺れる灌木や蔦の葉を通して光が入り込み、奥の、湧水で濃い緑色になった、切り立った岩壁に影が踊っている。それはこの岩壁に陰影を与え、

そこに映った影とともに、劇場のカーテンが動き、震えているように見せている。

蔓や竹の梯子が、ねじ曲がりながら岩を伝ってよじ登り、アーチにしがみついている。現地人たちはそれを使って、穴の底や、劇場のボックス席のように左右に段状に並んでいく別の洞窟に取りつき、手には松明を持ってあちらこちらを探索し、無数にいるコウモリの糞を採集するのである。彼らは、昼間はマントに似た翼にくるまって、この暗い回廊の凹凸に後ろ足でとまり、群になってぶら下がっている。

例年、年の初めに、かなりの手間をかけて糞を洗浄し、約 3~4 ピクルの硝石を抽出して、カンボジア政府に納める。1 人当たり 5 キロの硝石を係の役人に引き渡すと、賦役の代わりとなる税 (20 リガトゥール) (リガトゥールは数百個の貨幣を紐で通したもの) を免除される。しかし、岩をよじ登るのは難しく、頻繁に岩塊が落下したり、修理をなおざりにしている梯子が切れたりする危険がある。さらに迷信があるため、この地の人々はこの仕事を恐れ、もっぱらネアク・ンギエ (世襲の奴隷) たちにやらせている。プノム・カンランの近くの洞窟を観察したルフォシュール氏は、1868 年にサイゴンの農業委員会に、コウモリのグアノは肥料に使えるという指摘をしている。

12 種類ほどの貝殻が、雨水に流されて、岩のくぼみや割れ目に集まっている。これらは先に挙げた種に属しているが、*Rhiostoma* 属の一種、*Rhiostoma Bernardii* (Pfeiffer) と、*Pupa* 属の 1 種だけが、おそらく新しいものである。

コムポートと国境の間の山々の中には、他にも相当数の洞窟が散らばっており、同じように利用されている。主なものには、プノム・カンランの近くのプノム・クヘー (洞穴) がある。

ドムナック・トゥークを出てすぐ、ルーンの峰々を通り過ぎると、それと向かい合うように、左手には街道と平行に約 300 メートルの間、非常に近接した複数の小丘が続く。それが途切れる直前に、右手やや離れた所にあった山々が急に迫ってきて、隘路が始まる。通路の幅は、最初は 300 メートル近くあり、半キロの間はそのままである。その後急に広くなり、その中央は直径 1 マイルほどのカーブをなす。それは再び閉じていくのだが、600~700 メートルの長さに渡って 500 歩ほどの開口部が残り、その中央に街道が通っている。その向こう側の出口では急激に広がり、山はほぼ直角に、両側で遠くに消えていく。この隘路の長さは 3 キロを下らない。その砂質の土壌には、さほど勢いがない木々がまばらに散らばっているが、山々には豊かな種類の木々が生い茂り、大きく成長している。蔓、竹、灌木が生え、大木の幹からみついでいて、進入を拒む密林のように見える。しかしなが

ら、そこではゾウたちが暴れ回っている。あちらこちらに彼らが通った跡が見られる。彼らが暴れ込んでくるので、夜の通行は危険だと言われている。飼い慣らされたゾウたちは、日没後にここを通るときには不安な様子を見せ、自ら歩みを早める。プノム・トヴィエの最高峰は、明らかに200メートル以下である。イギリス人旅行家トムソンは、1866年にここから5,000~6,000ピエ離れたところを通過し、自分の本『中国とインドシナの10年間の旅 *Dix ans de voyages dans la Chine et l' Indo-Chine*』の中で、これらの山々に数行を割いている。

クローン、トバエンなど、価値がないと思われる種の木々が卓越する森を抜けて、街道は大きく美しいカーブを描き、アレンヒエムの集落の高みに至る。トヴィエを出ると、左手1,500メートルのところに、プノム・クポップの小丘が見える。

深さ2メートルの小川、オー・オムピル・コードルが、東、後に語ることになる重要な河川、プレーク・タニの方に向かう。

アレンヒエムは水田に囲まれ、1キロ左手、ドムナック・トゥークとコムポン・バーイの中間の、低く湿地性の土地にある。ここはかつて、コムポートからウドンへの最初の宿駅であった。今日では偶然に人が泊まる程度である。

もう1つの小川、オー・スピエン（橋）が、先の小川と同様に、西のトヴィエの山々から流れてくる。ここにはかつて橋が架かっていたが、今は残骸しか残っていない。この川もまた、プレーク・タニを形成する。プレイ・コルの2つの小さな円い丘が300メートル右手に見え、その麓には、同じ名前の村とストウン・チェイの村の小屋が散らばっている。次にプノム・キチャス、続いてプノム・ソー（白い山）が、同じく右手に見える。これらは海図に「バンビの円錐」という名で現れ、尖った先端はかなり遠方からもくっきりと際立っている。この山々は竹で覆われ、洞窟があり、先に述べたような硝石をわずかばかり産出する。土壌は粘土質になり、街道はもはや深い溝にすぎない。植物が変わり、スマチ（チャム）が卓越し、やがて耕地に場所を譲るというように、両者が交互に現れる。

山の帯が地平線となっている。東にはプオンとリエプ（整った）の山がある。南にはカエプ（馬の鞍）の突端、プノム・ドムの丘々があり、それからはみ出して、フーコック島の頂上もやに包まれている。西には「象」と呼ばれる山脈があり、その終点がカムチャイの山々である。大木の葉の上にアレカのふさふさした葉の冠が突き出して、右手に蛇行するプレーク・コムポートの曲折をなぞっている。幅7~8メートルの泥だらけの支流が1本、この川から分かれて、沼地に縁取られ、プノム・ソーの峰のところから始まる水田の

平原を区切っている。コムポン・バーイはもう少し先である。フランスの国旗が電信局の上に翻っているのが遠くに見える。

2. コムポート

コムポン・バーイから見ると、象山脈は北西で、プノム・バラン（祭壇の山）を要とする巨大な扇を形作って終わっている。この小さな峰の名は、その一番上に横たわっている巨大な岩塊に由来している。森を歩き回る者たちは、この岩塊の上でネアク・ター・プレイ（森の精霊）に祈り、加護を求めるのである。

現地人たちの言うところでは、この山の麓から西方、カムチャイの山塊の溪谷に入り込んで1日以上歩けば、大変に高い高原に到着するということである。そこにはいくつもの尖峰がそびえており、木は生えておらず、小さな植物に覆われている。その中央には広大な池があって、睡蓮の葉の下の澄んだ水の中には、満ちあふれんばかりの魚が隠れている。彼らはさらに、その睡蓮の葉は四輪車の車輪と同じくらい大きいという。この水面が雲を生み、それが山脈の最高峰（約1,000～1,200メートル）、プノム・ポポーク・ヴル（山、雲、旋回する）のあたりを漂っているのである。

シャムの侵略が迫ったとき、おびえた住民たちは村々を捨て、皆で、森を抜ける道を斧で切り開き、この寂しい場所まで逃げて来て隠れ家とし、地に平穏が戻るのを待った。この場所はヴィエル・スラエ・ムオイ・ローイ（100の水田の平原）と名付けられた。一度ならず、彼らは同じような状況に陥った。ここは、危険が迫ったときの確実な避難場所として、少しずつ、不思議な、超自然的な性格を帯びたものとしてカンボジア人たちの目に映り始め、平時には入り込むことをはばかるようになったのである。

そこはコムポート川の水源である。小さな湖から1筋の急流が流れ出し、遙か先で、他の流れが百ほども合流する。乾季が進んでも、岩の上を流れる豊かな水が溪谷から溪谷へと下って、カムチャイまで達する。山々の下では、透明で深い水面が長く広がっている。それを最後の急流がかき乱す。激しく左右に蛇行しながら200メートルほどに発達すると、3つの小島によって4つに分流する。最大の支流は幅が35歩である。1年の前半の6か月間は、小島の足下まで潮が感じられる。そこでは水が塩辛くなる。水位の差は1メートル以上である。この場所を出ると、川はプレーク・コムポートという名で呼ばれるようになる。

南西モンスーンの間、山の中の急流は相当な規模になる。豪雨の後、水は巨大な塊とな

って驚くべき荒々しきで流れ下り、木々を引っこ抜き、狭い川床の岩の区域に集め、積み重ねる。もしその流れがコムポート川に流れ込む最大の支流、プレーク・トノッの流れとかけ合うと、1晩で6~7メートルも水位が上がり、岸を越えて、平原を、海までずっと1~2ピエの深さがある、巨大な湖に変えてしまう。この氾濫が3日以上続くことはほとんどないが、1年の間に何度も繰り返される。それは突然かつ不規則なので、ほとんど毎回、この地に与える被害は甚大なものとなる。

プレーク・コムポートの右側から流れ込む支流は、象山脈の東斜面（カムチャイと海の間部分）を水源とする、取るに足りないいくつかの小川で、主なものはプレーク・スラム・アムプルである。

左岸では、早瀬から1キロのところまで泥だらけの流れ、プレーク・トノッ（堰）が合流する。この川は最初に通ってくる村の名を取って、プレーク・ブン・トラという名で呼ばれることもある。この川の水源はかなり後方、プノム・トヴィエ・ダムレイの西、クラン・ソムラエ地方のポン・ロックという山の中である。コムポートの電信技師、クルジェアン氏は、その1部分を探検したことがある。この川は巨大な森を貫いて蛇行している。開墾地や水田が間隔を置いて岸を覆っていて、その中央に中国人とカンボジア人の小屋が見える。合流点から1日近いところにあるスロック・スラーまで船が遡り、そこで様々な日用品と土地の産物を交換する。その先は川床が枯れ木で埋まり、航行できなくなる。プレーク・トノッの氾濫は毎年、森を浸水させる。水が引くと開墾地に熱病が発生するために、大変に不衛生だと言われている。

左手の小さな分流が形成したマック・プランとコムボン・クラオム（低い岸）の島を通り過ぎると、最初は70~80メートルしかなかったプレーク・コムポートも目に見えて広がり、コムボン・バーイの手前では300メートルにも達する。この村の下流で、トラウイ・コッの島によって2つに分流する。東支流はマレー人の村であるコムボン・カンダール（中央の岸）の名を帯びて、直接海に向かう。この村の正面で一連の岩が川床を塞いでいる。もう1本はコムポートの前を通り、さらに先で分流して、2つの河口から湾に注ぐ。左手の河口はプノム・ドムの丘の麓にあり、完全に砂で埋まっている。もう1つは平均幅が150メートルで、船舶の出入りがある。その入口の、漁師たちの目印となっている巨大な菩提樹の下に、カンボジアの政府が税関および監視基地を設置している。そのそばにはひどく荒廃した小さな砦があり、虫に食われた柵がまだ立っている。

トン数が大きなジャンクは、2~3マイル沖に停泊している。喫水が2メートル以上の船

船は、砂州のために港に近づけないのである。また砂州を越えるためには、潮位の高い時か、浸水の時期を利用しなければならない。

海岸は沼に縁取られ、マングローブに覆われている。マングローブは前進し、砂浜を浸食して、小さな川の両岸に半里にわたって連続している。この川筋はせいぜい15~16キロしかない。続いて水田と砂糖ヤシの帯が現れる。マレー人の小屋が耕地の中に散らばり、カトリック・ミッションが放棄した土地が現れる。続いて海から約2マイルの所、右岸にコムポートが現れる。その正面にはトラウイ・コッのアンナム人の村があり、さらに1,800メートル先にコムポン・バーイがあつて、これらがいわば一体をなしている。

アンナム人はこの小さな港をカン・ボットと名付けたが、住んでいるのはほとんど中国人のみで、カンボジア人女性、あるいはカンボジア人女性との結婚によって生まれた混血児〈原語 *métis*〉か、アンナム人と結婚しており、コーチシナの村々と取り違えるほど、小屋の建て方がそっくりである。ここはわずか15年ほど前まで、実質的な重要性を持っていた。荷積みが困難で、錨地が何の避難所にもならないにも関わらず、例年多数のヨーロッパ船と、多くの中国の大型サンパンがやって来た。北東モンスーンの時期には湾が大変に穏やかで、平均して10~12艘を下らないサンパンが錨を下ろしていた。それに加えて、海賊行為が極めて日常的に、容易に行われていたにも関わらず、常に多くの船が近隣の港、ザクザー、ハーティエン、スラエ・アムベル（塩田）、チャンタブン、バンコクなどと連絡していた。

近隣の港やカンボジアの産物と交換に、中国からは絹布、食器類、家具、油などを受け取り、シンガポールからは綿布、インド更紗、アレカ、ガンビエを受け取った。シャムは絹と金で織った高価な衣装、金属の花瓶、アレカの石灰などを送ってきた。ゾウや牛車の隊商が、これらの積み荷の大部分をウドンやプノム・ペンに輸送した。ジャンクの乗組員や、内陸から連日のようにやって来る隊商が、賑やかな人混みとなって市場を埋め尽くし、賭場や劇場、露店のレストランを繁盛させていた。先の王は輸送しやすい類の収税物をここに運んで売らせた。それが頻繁であったので、この地は大いに活気づき、取引が盛んに行われた。

今日ではサイゴンとチョロンが、カンボジアの諸センターに全ての物資を供給しており、王国のあらゆる産物も、プノム・ペンからこれら2つの町に向かう。コムポートはもはや、それ自身の資源だけで存続している。

変化は突然ではなかったが、それに対する反応はかなり著しかった。少しずつ、住民の

一部分がよそに移住した。動揺の後には平穩が来た。主な通りでも、わずか20人ほどの商人が日常の商品を並べているだけである。いくつかの小屋のひさしの下では、女性たちが絹か綿を織っている。あちこちで空き家が廢墟になっている。通りはほとんど無人に見える。船でいっぱい of 岸辺だけが、いくらかの活気を保っている。

あらゆるものが、この運命の轉換は単なる停滞期間にすぎないのだという期待を抱かせる。この地方の土壤の肥沃さは、特別な作物（コショウ、タバコ）の栽培に大きな発展の可能性を持っている。ほとんど開發されていない森の豊かさに加えて、山々には砂岩や石灰岩の他に、貴金属が秘められていることが確認されている。灣に安全が広がり始めたことも、遠くない将来に新しい生命が与えられることを約束している。その上、錨地は完全に放棄されたわけではない。乾季の間には多くの中国船が沖にいて、日々、自分たちの積荷と海岸の産物を交換していない方が珍しい。1878年には1艘のヨーロッパ船が来て、米、塩、高価な木などを積み込んでいった。1880年にももう2艘がやって来て、積荷を得て行った。

コムポートは毎年、量を計ることは困難だが、一定量の米を外に輸出している。1878年には、15,000ピクル（1ピクルは約60キロ）を下らない程度であった。（表1）

表1

コショウ	3,000ピクル
タバコ	150
ガンボージ	80
ヤシ砂糖	1,000
皮革	100
木油	100
樹脂	50
松明	10本の束6,000

さらに量は非常に限られており、変動も大きい。角、漆（ムレアク）、樹脂顔料、馬錢子、ヴォワ・アンコット（ゴム）、染料木その他、カルダモン、ナマコ、鱗、蠟、沈香木などを出す。チョロンの価格が取引の基本になっている。

豚の飼育もかなり大規模に行われている。1880年には2,600頭を輸出した。通常中国人の沿岸航海船が、ピクル当たり35リガトゥールという価格で買いつけ、シンガポールに運ぶ。田舎では水牛の数がかなり多く、ほとんど毎年、相当数をコーチシナ（ハーティエン、ザクザー）に売る。牛は何より牽引に使われる。価格は5～15ピアストルである。雌牛は3ドル以上することはまれである。ほとんど値打ちのない馬もいくらかいる。

対岸に広がるアンナム人の村は、40～50家族で構成されており、主な産業はナマコの漁である。これをカンボジア人は海のヒル（チュルーン・サモット）と呼ぶが、チャンタブンの海域では豊富に生息している。中国人はハイソムと呼ぶ。彼らにとっては珍味である。プノム・ペンの市場では何種類ものナマコが見られるが、中国からもたらされたものは、ピクル当たり50ピアストル以上することもしばしばである。他はフェなどから来ている。コムポートのものは15～20ピアストルで売られる。

雨季の中頃に、モーンと呼ばれる長さ6～8尋、深さ1尋半の網の準備が始まる。編み目は均等で、1辺が3～4センチである。

北東モンスーンが間もなく安定する頃に出漁する。船には5～6人が乗り込む。テトの祭りに戻ってきて、その後は6月まで操業する。漁民たちは以下のような手順で、ナマコを処理する。50匹ほどのナマコが獲れると、船上でそれを掃除し、海水で煮る。調理時間は1時間半である。この棘皮動物は、生きていたときには下膊くらいの大きさであったのが、完成する頃には売られているのと同じ大きさ（直径約2センチ、長さ10～12センチ）に縮み、硬かった皮膚は十分に柔らかくなる。次に網垣の上に広げ、適度な炎の上で24時間乾かす。

戻ってくると、積み荷は通常大変にささやかなものであるが、中国人がピクル当たり8～12ピアストルで買い上げ、チョロンに送る。漁民たちはその他に鼈甲を持ってくる。カメが産卵にやって来るときに、海岸の砂の上で捕らえるのである。それは質によって、カティー（1カティーは600グラム）当たり10～25リガトゥールで売られる。

彼らの利益配分は、いつもだいたい以下になる。船や網の持ち主は、遠征に参加していた場合は漁獲の3、参加していなかった場合は2を取る。水夫は各々1を取る。

12年ほど前から、半数ほどの住民が村を離れて、フーコックやハーティエン、ザクザーに移住した。それ以前には、良い季節になると10～12艘を下らない大船を備えていたものだが、現在では多くても4～5艘である。この資源が半ば打ち捨てられた理由は、漁獲量が減少したためであろう。もうけを出すためには、かつてよりもはるかに時間をかけなくて

はならなくなった。損耗も無関係ではない。テトの祭りをするため、船舶を海に出せる状態にするため、アンナム人は中国人に漁獲代金を前借りするが、これが彼らを悲惨に突き落としている。

このようにして、コムポートとコムポン・バーイはかなり縮小した。ちなみにコムポン・バーイのことを、中国人やアンナム人はボムバイ（プーム・バーイ（米の村）が訛ったもので、イギリス人がバムビとし、海図ではプノム・ソーの小山をそう呼んでいる）と呼ぶ。この村の立地は素晴らしく、川が2つに分流して海に注ぐ分岐点に位置しており、地方の知事の居所で、プノム・ペンとハーティエンへの街道の起点でもある。ここに設置された電信局によって、この2つの町とは直接に連絡している。

アン・メイ女王の廃位とアン・ドゥオン王の即位に先立つ混乱期の間、カンボジアの沿岸地方を占領したアンナム人たちは、シャム人に対抗するために、コムポン・バーイに小さな土の砦を築いた。それは防壁で囲まれ、周囲に堀を回らせ、1辺約150メートルで、中に300～400人が配置された。彼らはこの地に駐屯し、家族は村に住み続けていた。しかしシャムの艦隊が現れると、アンナム人たちは陸路コムポン・サオムに撤退し、そこからさらにチャンタブンに向かった。そして小さな島に向かったが、そこにはすでに、コムポン・スロラッ（コムポン・サオム地方）の小部隊が避難してきていた。危険が消え去ると、彼らは船でハーティエンに向かった。カンボジア人たちは砦の小屋が破壊された跡に、1つのパゴダを建てた。少し後にこのパゴダは焼失したが、修復されなかった。その後、その土地は掘りくぼめられた。今日では、砦が貯水池に変わったことが辛うじて知られているのみである。

1858年末頃アン・ドゥオン王は、村の北端とプレークの岸に同じような囲いを建てさせた。その土手と堀はまだ元のまま残っている。その中には長子、すなわち現王の住居を納める予定だったが、いずれにせよ彼はシャムから帰国後のほんの短期間、そこに滞在しただけだった。

コムポン・バーイがある意味コムポートの郊外であるのと同様に、川岸も、カムチャイの早瀬までがその郊外である。象山脈の高い山々を背景にした景色は、とりわけコムポン・クラオムの先では本当に魅力的である。高い竹や大木のカーテンの下枝がうつむけに延び、所々で澄んだ水に浸っている。その背後には、延々と連なるコショウやタバコ、アレカなどのプランテーションが隠れている。これらを維持しているのは中国人か混血児である。

外観は美しいにもかかわらず、実は、コショウ栽培は縮小している。農園主たちによる

と、現在の生産量は3,000ピクルを越えることはほとんどない。20年ほど前には6,000～8,000ピクルに達していた。この生産量の違いは、一部の栽培者が置かれている困難な状況と、それに一役買っている価格の変動（1873年には、コショウは、ピクル当たり12ピアストルであった。1877年には6ピアストル、現在では9ピアストルである）が原因であろう。自分たちのプランテーションをきちんと管理するために必要な銀がなく、肥料や世話が与えられないまま衰えるに任せている。このような状態のコショウの木には、見捨てられたようなものもあり、枯れた株がタバコなどに置き換えられたものもある。しかし、灌漑用の沼の水は、『1878年のコーチシナ *la Cochinchine en 1878*』で言われているように塩辛くはなっておらず、農園主たちが挙げたのも先の理由だけであった。彼らはコショウが熟すにつれて、2月、3月、4月に行う収穫の30パーセントを前借りしている。クーリーたちは宿、衣類、食事を与えられ、月4ピアストルの割で支払いを受ける。この作物への税は盛りの株1本につき4テールで、港を出るときに10パーセントである。1年に4カティー採れるコショウの株がある。大半はもっと少ない。そうすると税は収穫に比例する。

（以下の地域でも、少量のコショウが採れる。トレアン地方内の、ヴィン・テ運河から半日の所に位置する、プレイ・アンデン、ブ、スラック、スコム、バポール、タウンの集落で約300ピクル。バンティエイ・ミエス地方内では、アンナム人がリンクインと呼び、ジエン・タインとハーティエン経由で海に注ぐプレーク・プレイ・アンカンの両岸や、高水位期にはチャウドックの水路と連絡するタニの沼の周囲で、少なくとも200ピクル。）

カムチャイのタバコは、カンボジアでは最高という名声を得ている。ピクル当たり15～20ピアストルを下ることはほとんどない。収穫が悪い年には30ピアストルにも達する。小売ではカティー当たり4～5リガトゥールで売られていることもまれではない。中国人たちがこれをプノム・ペン、チョロン、ザクザーに送り出している。

アレカはカンボジアでは生育が困難だが、カムチャイでは豊富である。他の作物、藍、サトウキビ、桑は、かなり限定されている。この地では多くの絹が織られている。ここで育てられている蚕では原料が不十分なので、プノム・ペン、ザクザー、カマウから、余剰分が送られてくる。

あらゆる種類の果樹がプランテーションを縁取り、小屋の前を埋めつくしている。中でも忘れてはならないのがトゥーレーン〈ドリアン〉(Durio)で、その繊細かつ極上の果実は、その臭いゆえにしばしば嫌われている。この木はシンガポール、シャム、チャンタブ

ンではかなりありふれている。しかしカンボジアではコムポートだけで生育可能であり、世話がかからない。高さが 10 メートルにも達し、葉は枝にまばらにつき、果実は長さ 40 センチ、直径 20 センチにもなる。外見はジャック・フルーツ、クノル・ソムロー (*Artocarpus incisa*) にひどく似ている。毎年数百個を収穫するが、ほとんど全てが宮廷や官人のために買い上げられ、プノム・ペンに発送される。その大きさによって、1 個が 1~5 フランする。左岸には、かつて王の庭園と呼ばれ、ほとんどほったらかしにされているのだが、いまだにそう呼ばれているプランテーションがあり、他の多くの果樹とともに、何本かのトゥーレーンが植えられている。

右岸を覆うプランテーションと象山脈の間に広がる土地は、大部分が水田に耕作されている。そこにはいくつかのカンボジア人の集落が散らばっている。耕地が終わるところで森が始まり、山々の上まで広がっている。この森の中に、現地人たちがマック・プランと呼ぶ木が豊富にある。それは小さなプラムの一種である。黄色い果実がなり、乾季の終わり頃に熟する。それが実る時期になると、この地方の人々は大勢のグループになって収穫に向かう。やはりその頃、彼らは山々に分け入って土を掘り返し、ドムローン・チュルーク (豚の芋) とドムローン・キアと呼ばれる 2 種類のヤマノイモや、カンボジア人がドムローン・ティエン (ロウソクの芋) と呼ぶクズ (原語 arrow-root) や、クドウオチと呼ぶキャッサバを探す。

ここでも一般的な木々は、すでにプノム・ペンとコムポートの間の地に生育しているとして名を挙げたものである。すなわち、様々な種類のコーキー (サオ) (*Hopea*, sp. ?)、クラ・グム (チャック) (*Dalbergia*) などである。

象山脈やその近隣のガンボージはカンボジアでは最高で、大河の岸のものよりもピクル当たり 25~30 フラン高い。沈香はまれである。アンナム人の樵の 2~3 家族が、数年前から、カムチャイの早瀬の前の急流の岸に住み着き、ほんのわずかばかりの沈香を採集している。このアンナム人たちと、山々の麓に散らばっている他の何人かが、言わば、この森の唯一の開発者である。

注目すべき軟体動物が、木陰、コケや芝生の中、枯れ葉の間に生息している。*Bulinus annamiticus* (Crosse, Fischer) および *Rhiostoma Bernadiei* (Pfeiffer) を除いて、先に挙げたような種は全て、ここでも見つかる。その上、かなりまれではあるが、素晴らしい *Bulinus schumburgki* (Pfeiffer)、および *Rhiostoma* 属と *Pupina* 属のそれぞれ 1 種にも出会う。これらはおそらく、まだ記述されていない。ルムスル氏が、プノム・ペンとウドン

周辺では、まれにしか見つけられなかった *Herix Crossei* (Pfeiffer) も、ここではかなり豊富である。山々の麓に住んでいるアンナム人の樵たちは、カタツムリの 1 種、*Cyclophorus volvulus* (Muller) を食べている。これはこのあたりでは非常に一般的であるが、現在までにプーロ・コンドルでしか確認されていない。

川に棲む(川に棲むというのは、常に淡水の中に生息している軟体動物のみを意味する)貝は、後江の流域ほど一般的ではない。動物相は、*Unio* 属の数種で、沼や小川の海岸からかなり離れたところに生息しているもの、*Melania* 属の 2 種で、急流の中で見つかるもの、多数の *Paludina* と *Ampullaria* に限定されている。*Paludina Cambodjensis* (Mabille、Lemesle) および *Ampullaria polita* (varietas major) (Deshayes) は、両方の地域で共通している。*Paludina Cambodjensis* は、プノム・ペンの周辺では概して無傷だが、コムポート周辺ではひどくすりむけたものしか見つからない。成体ではたいていが、最初の 2 つの螺旋が欠けている。*Melania* 属の貝殻でも同様に、その通常の棲み処であるくぼみや岩の下から、水流によって押し出されたのである。

プレーク・コムポートは、年間のある時期は水が塩分を含み、通常は河口で見られるような、ときに河口の軟体動物という名で呼ばれるような種をいくつか育てている。*Orbicula* の一種で、記述されていないものが特に興味深い。それは川岸を縁取る水ヤシの上にいる。*Cerithium* 属の多くの種類が、ここでは一般的である。マングローブに覆われた、海に近く、しばしば海水に沈んだり、氾濫の時にはプレーク・コムポートの水で沈んだりするような低い土地には、*Melampus* 属の 3 種と、1 種の奇妙なコガネムシ(原語 Scarabe) が豊富にいる。きれいな *Auricula Judae* と、美しさでは引けを取らないが、より珍しい *Auricula Midae* は、マラッカ海峡の沿岸のものよりも生育がよい。この土地にある多くの水たまりには、おそらくまだ属が決まっていない二枚貝が生息している。それらは *Velorita* 属(Sowerby) に近い、川に棲むホタテ貝(原語 conque) の科の主な性格を備えている。4、5 種の *Littorine* が、マングローブの幹や葉にうじゃうじゃといる。その 1 種は赤く、非常にまれで、おそらくはまだ記述されていない。

川の入口と海岸沿いの浜では、何より注目すべきは *Neritacé* である。豊富であることと、この科の様々な属の種それぞれの、模様の独創性、色の美しさ故に、この場所では、極めて興味深いコレクションを作成することができる。その中であまり一般的でないのは、*Nerita albicilla* と *Natice de Gould* (Chenu) である。

極小でやはりきれいな *Neritina* 属の 1 種は、まだ報告がない。これは通常、海岸沿い

に生息していて、躊躇なく海の種類の中に分類されるべきものである。

カンボジアの外海および海岸では、海の軟体動物が過度に多い。いくつかは、*Aspergillum de Java* (Lamarck)、*Panopea australia* (Ménard)、*Cyprea argus* と *aurora* (Linné)、*Scalaria preciosia* (Lamarck) など、まれな種に属している。巨大な種は、*tridacne*、*casque* に代表される。

現地人たちは、*Cyprea pustulosa* 〈タカラガイの仲間〉と様々な巻貝のふたを、賭博のコインに使っている。彼らはいくつかの種を採集し、自分たちの食糧の重要な部分に組み入れている。とりわけ、シャミセンガイ〈原語 *Lingula*〉の1種でかなり一般的なものは、雨季の初めにシャベルで泥砂を掘って採る。

Solen 属〈マテガイの仲間〉の1種は、今まで報告されたことがないようだが、コムポート川の入口に豊富である。とりわけこれは現地の人々に人気がある。彼らはそれを大量に採り、餌に使ったり、生で食べたり、保存食として塩水に浸けたりする。これらは引き潮のときに、尖らせてギザギザを付けた棒を使って採る。現地人たちはこの棒を、この軟体動物が棲んでいる穴に突っ込む。棒に触れるとこの動物は殻を閉じ、棒を締め付けるので、漁師が引っ張り出すことができるのである。潮が大きく引くと、浜は女性や子供たちで覆い尽くされ、皆籠いっぱい、この美味しい身を持つ貝を採っている。

牡蠣も多くの種類がいる。現地人たちは一般的な牡蠣を好む。アメリカやインドの大河の河口に豊富な種を食べているのであるが、俗称でマングローブの牡蠣と呼んでいる。海が引くと、潮位が高いときには水に浸かる木の根にぶら下がって、この軟体動物の塊が風に揺れているのが見える。食べるには、燃える炭の上に貝を置いて料理するのである。

カンボジア語で貝を意味するのは、クチョーンという言葉である。エモニエ氏が自分のクメール語辞書で述べているように、リエスという言葉は使われない。リエスというのは様々な種類のシジミ〈原語 *cyrène*〉の名で、石灰を作るのに使われる。この言語では、以下の属に、このような名称を与えている。〈表2〉

表2

Lingula	Khchang Kéchhieu
Ostrea	-Creng
Arca	-Ngeau

Solen (円い種類)	-Crachac (爪)
Solen (平たい種類)	-Pir (2つ)
Cyrena	-Liès
Unio	-Chompuc téa kamop
Iridina	-Chompuc téa (アヒルの嘴)
Hyria	-Krom
Paludina	-Kechau
Ampullaria	-Tal
Melania	-Prat
Auricula	-Trâl (織機のシャトル)
Helix	-Kadac
Bulimus	-Taloc
Cyprea	-Bie (ゲーム)

カンボジア人による分類はこの程度で、その上、対象にしているのはいくつかの種に限られているので、互いに関係ない多くの種が同じ名称で混同されている。

かつてアンナム人が造った、ハーティエンに向かう風光明媚な道をたどると、コムボン・バーイから7キロのところではプレーク・タニに出会う。これはゾウの門の隘路を離れてすぐのところを通り過ぎてきた小川、オー・オムピル・カンドゥオルとオー・スピエンによって形成されたプレークである。水の流れがハーティエンへの街道を断ち切るところ、左岸に、重要なチャム人の村、クバル・ロミエス（サイの頭）がある。川はその先2里で海に達するが、その間、クバル・ロミエスの名で呼ばれるようになる。幅は50~60メートルで、深さは5~6メートルであり、数年前までは周囲のパゴダの僧侶たちが建てた美しい木の橋が架かっていたが、今日では完全に朽ち果てている。

プレークを遡ると両岸にはネアク・トランの村がある。川はそこまで航行可能である。続いてタニとトラペアン・サーラーの村がある。クバル・ロミエスと海の間には、コムボン・カエ（月の岸）の村があり、クバル・ロミエス同様、人口が多い。クバル・ロミエスの少し上流で、左岸からプレーク・スラー・ター・アオン（ター・アオンの実、ヤシの一種）が合流する。この川は3キロ東の、同じ名前の小山から流れてくる。

この山は 60 メートルを越えない。水田を横切る小道をたどってそこまで行くことができる。この山には、様々な点で興味深い、広い洞窟が 1 つある。最も入りやすい入口は、8～10 メートルの高さにある。洞窟の入口に入ると、海の貝の破片が散らばっている。地面を少しばかり掘ると、ほとんど完全でかなり良い状態の、Strombus (Linné)、Arca、Pectunculus、Cardium、Venus、Naticae、Murex、Triton (Lamarck) が見つかる。そして、年月と湿気の作用に抵抗できなかった、より薄い種の破片を見つけることができる。採集した標本は特別な研究の対象となるだろう。プノム・スラー・ター・アオンは海から 8～10 キロである。その間の土地は沖積性で、一定して低い。

洞窟の最初の開口部から狭く細長い通路を通り、暗い小部屋を過ぎる。そこではしみ出た石灰分が、乳頭状の凝結物でできた岩壁を覆い隠して、岩の凹凸を独特な形状にしている。もう 1 つの入口に到達する。そこではぼんやりした日光でおぼろげに見えているが、深い地面の裂け目の底で、1 つの朽ちた棺が塵になろうとしている。ここに、この地の人々が崇拜する、ネアク・トラン（正しい人）がやすんでいるのである。

新年の時期にチャーム人たちは、死んだ祖先の墓を手入れしに行く。松明を手にして、大勢で洞窟に向かう。各自好き勝手な方向に歩き回る。開口部では木の葉を通して、祭りの衣装である色鮮やかなショールがあちこちに見える。人々は墓の周囲を掃除する。一瞬にしてそこは、白い綿の小さな旗で覆い尽くされる。ムスリムの聖職者が祈りながら近づく。棺に香水を注ぐ。儀式の後、あちらこちらの地面の上で、食糧や菓子、果物が広げられる。食事がすむと、群衆は散り散りになる。

旅人ムオは 1859 年にコムポートを通過したが、この小さな地方に大変興味深い 1 章を丸々割いている。特に、沿岸警備を担っていた有名な中国人海賊、ムン・スイのことを書いている。彼はこの重要な役職につく少し前に、ハーティエンを略奪していた。いずれにせよ彼は、湾のこの部分全体において脅威であり続けたのであった。

この偉人は、好意的な旅人が記しているように、後に遭難して船と財産を失い、航海生活を終えることになった。今日では老いさらばえ、ほとんど惨めな状態で、長らく自らが恐怖の的となってきたコムポートに住み、大切にされている。かつての職業ゆえに、彼は傷の手当が非常にうまい。この地方で唯一の外科医として、数里四方から彼のもとを訪れてくる者たちがいる。彼は無償で施術してやる。

3. コムポートからコムボン・サオムへ

プレーク・コムポートとプレーク・コムボン・サオムの間、象山脈と海の間に関し
ては、現在まで不確実な情報しかなく、しかもその大半は間違っている。このほとんど未
知の領域は、コムポート地方とコムボン・サオム地方に属している。

相当数の河川が縦横に走り、しかも規模の大きなものが多く、その下流部のいくらかは、
素晴らしい水田に耕されている。しかし、大部分は未耕地で、未開な雰囲気がある。比類
なく肥沃で、驚くほど繁茂した森に覆われているかと思うと、それに続いて全く対照的な、
不毛な土地の貧弱な植物が唐突に現れる。またある所では、木が生えていない広い平原で、
シカの群が草を食べている。長い砂浜あるいはマングローブで覆われた湿地が、海岸を形
成している。そこでは、集落や村々は一般的に、海から少し離れた川岸に位置している。

アンナム人による占領期、カンボジアの沿海地方には、ハーティエンを出て、プレーク・
コムボン・サオムの航行可能な限界、コムボン・スロラッを終点とする街道が通っていた。

同じようにアンナム人の手によるもう1つの道が、ウドンを出て、コムボン・スロラッ
の軍事基地に達している。そこからコムボン・サオム地方の主要なセンターであるスラエ・
アムベルやシャム湾には、船で連絡する。

急流や小さな川には、ゾウが通行できるほど頑丈な木の橋が数多く架けられていたが、
今となってはただの1つも残っていない。しかしながら現地人たちは、コムポートから道
沿いにある場所に行く際には、今でもハーティエンの街道を使っている。あまりにも通行
が困難な所でだけ、道を離れて迂回する。

この道はまだ、プラウ・ユオン（アンナム人の道路）という名で呼ばれ続けている。古
老たちは、赤い衣装を身につけ、小さな竹のサラッコ（salacco）で髪を結った兵士たちの
ことを記憶している。当時はトラムの業務が非常にきちんと行われていたのだが、彼らは
その護衛をしたり、銃あるいは槍で武装して歩き回っては、人々に橋の修理をさせたり、
雨でえぐられたり、あるいは植物に浸食されたりした道を修復させたりしていた。

とりわけトゥック・ロオクから先では、道は良く手入れされており、まだかつての面影
がいくらか残っている。トゥック・ロオクはコムポートからコムボン・スロラッまでの途
中にある、同名のプレークの河口から10キロ離れた小港である。たいていは船でハーティ
エンあるいはコムポートからトゥック・ロオクまでやって来て、そこから先の道程は徒歩
で進む。休憩のための避難所が等間隔に配置されていたが、今となっては痕跡しか残って
いない。

今日では便利とは程遠い道になっている。コーチシナまで水牛の群を連れて行って売る者や、ある村からもう1つの村へ、ほんの短い距離を移動する現地人が通るくらいである。商人たちや旅行者の大部分は、ジャンクに乗って海岸伝いに行く。

多数の小川や急流があり、これらについては後で記すが、乾季の間は干上がったたり、歩いて渡ることが可能であったりするにせよ、雨季には小舟が逆行できず、渡し舟が使えないため、より一層越えがたいものとなる。以下の12の河川は、非常に限定されたその流れの大部分においては急流であるが、潮の影響を受け、いかなる季節であっても船でなければ渡れないような地点で街道を遮断している。

それらはプレーク・コック・トーチ、プレーク・クダート、プレーク・エンティオック、プレーク・トナオト、プレーク・トラペアン・ルプウ、プレーク・プラー、プレーク・サンケー、プレーク・ティエル、プレーク・トゥック・トラ、プレーク・トゥック・ロオク、プレーク・パホー、プレーク・バック・チャンチェンである。

道程の中で出会う村々あるいは集落は、コック・トーチ、プレーク・トナオト、トゥック・ロオク、スラエ・トム、スヴァイ、チャムパー、ヴィエルである。

最も条件がよい季節に旅すると、コムボン・スロラックには旅程4日目の晩に到着することが可能である。その場合には、プレーク・トナオト、スラエ・トムとスヴァイで夜を過ごさねばならない。プレーク・コムボン・サオムでは、コムボン・スロラックから先では潮が感じられるので、うまく行くと7~8時間でスラエ・アムベルに到着できる。

ここで街道についてももう少し詳細に述べ、12月末のこの地がどのような景観であったかについて、いくらか述べることにしよう。

全くの小道に過ぎないような道が真っ直ぐに南に向かい、次いで、象山脈の南端を回り込むために西に向かう。最初はコムポートを出たあたりから始まる水田の中を通り、続いて森を抜け、山よりも湾に近い方を通る。通行人があまりいないので、何か所かでは、植物が道を消滅させてしまっている。木の枝が障害物となっているので、1歩目から諦めて徒歩で旅するしかない。

海岸の土地は低く、時に湿っており、概して砂質であり、貧相な森に覆われている。そこにはしばしば、様々な種類のマングローブ (Carallia, Bruguiera など) が生えているが、それは山々に近づいて土地が高くなるにつれて姿を消し、より生命力が強く、密生した植物が生えてくる。野生のマンゴー (Mangifera)、ポペル (Vatica) がとりわけ街道沿いでは一般的である。

1時間歩かないうちに、早くも幅が1~2メートルの小川を3本渡り、プレーク・ロールオス (*Erythrina indica*、偽火炎樹) の岸に到着する。これは幅8メートルの急流で、真っ直ぐに海に注ぎ、美しい砂の川底の上に1ピエの深さの澄んだ水が穏やかに流れている。

プレーク・ロムドウオル (*Unona mesnyi*, Pierre) に着く前に、もう1本の小川が現れる。ロムドウオルの木は、現地人が花を薬として用いたり、唇用の蠟に香りをつけたりするのに用いる。このプレークは先の急流と変わらないが、この種の木が周辺に数多く生えているために、そう呼ばれている。しかしこの季節には、カンボジア人がテク (tek) と呼ぶ陸生のヒルが岸にうようよしているのです、むしろその名をつけるべきである。

小さな河川が連続しているために、すぐに靴で歩くのは不可能だと分かる。裸足で行く方が好ましいが、そうしているとすぐにヒルが這い上ってくる。

腹まで届く水、あるいは泥がつまった長さ百歩の長い溝が、プレーク・コッ・トーチ (小さな島) の少し前にある。プレーク・コッ・トーチは幅40メートル、深さ3~4メートルで、右手に続く山脈の最高峰、プノム・スルオチ (尖った) とプノム・ボーク・コー (牛の瘤) の間に見える溪谷から来る、いくつかの急流によって形成されている。このプレークではかなり遠くまで潮が感じられ、何艘かの船が遡ってきて、木を積み込んで行く。15~20軒の小屋からなる同じ名前の村が、すぐ近くにある。村は水田に囲まれており、その中では多数の水牛が草を食べている。この集落はコムポートから11キロに位置している。かつてはラムセットという名で、さらに15分ほど西に行ったところにあった。土地がやせたので、住民たちは現在の場所に移動したのである。

砂糖ヤシが多数、この土地に散らばっている。間もなくラムセットの放棄された耕地を過ぎ、力強い森の陰に入る。その美しさは、大木の上にそびえる野生のアレカの強烈な香りと相まって、ほとんど忘れ去られた道の不便さを打ち消してくれる。

急流は相変わらず次々と現れる。最初はオー・トモー・ルーン (穴の開いた石) である。その名は、河口をふさいでいる巨大な花崗岩の塊に由来する。次にプレーク・トンゴー・トーチ、続いてプレーク・トンゴー・トムである。これは道を断ち切る少し前に、2つの支流に分かれている。そしてオー・チュルオツ・チュニエ (喧嘩の小川) であるが、すでに干上がっている。

山脈と街道の間に、プノム・プレーク・スマチの小丘群が現れる。それらに近づくと、道ははっきりと南に向かい、プレーク・クダート (ハスの一種の名) を、ちょうど河口のところでボートで渡る。このプレークではかなり先まで潮が遡る。幅25メートル、深さ3

～4メートルで、ワニが大変に多いらしく、現地人たちは家畜を渡らせるのを恐れており、500メートル迂回して、潮の低いときに、プレークの入口をふさいでいる海中の砂の上を渡らせる。このプレークは小さな入り江に注ぐ。その砂浜はモクマオウ（原語 filao）（*Casuarina equisetifolia*）で埋めつくされており、心地よい。他の海岸が遠くまで泥とマングローブが見えているのとは対照的である。プレーク・クダートの先は、海岸のすぐ近くをたどっていく。自然は知らぬ間に景観を変え、取るに足りないオー・チャン・アン（敗北の小川）を渡った後は、プレーク・エンティオツ（莫藎を作るのに使う草）である。幅は10メートル、深さは2メートルで、全くの沼地の中を歩かねばならない。特有の木々に覆われているが、スマチ（チャム）がとりわけ豊富である。またプレーク・スマチに近づくと、長い水たまりを避けるために海の方に向かい、船に乗って対岸に渡らねばならない。さらに1マイル遠方、プレーク・トナオトの左岸に、同じ名前の村がある。コツ・トーチからは12キロである。そこには20家族ほどのカンボジア人が住んでおり、道は彼らの水田を通り抜けて行く。さらに多数の中国人の密輸商人と、100人ほどのアンナム人が住んでいる。アンナム人は15年ほど前に、何人かが住み着いたばかりである。それから人数が増え、村の多数派を形成するまでに時間はかからなかった。彼らは漁業には従事せず、山の木々の伐採だけで生計を立てている。彼らは通常ハーティエンかコムポートの中国人から前払い注文を受けて、板や小船を造る。

プレークは深く、マングローブに縁取られている。今までのプレークと同じようにこのプレークもまた、山脈から来た1本の急流によって形成されているが、その川筋は比較的長い。プレーク・プノム・スマチの丘の数多くの曲折によって曲がりくねっており、上流部をふさぐ岩のせいで、海に着く1時間前になってようやく航行可能になり始める。しかしながらアンナム人たちは、丸木舟を使って山々の麓まで遡る。プレーク・トナオトからこの河口まではほとんど完全に泥で埋まっており、船でおよそ15分かかる。

続いて出会う最初の河川は、プレーク・トラペアン・ルプウ（池、カボチャ）である。幅は20メートル、深さは3メートルである。その川床は砂洲で満たされており、その両岸は少し後にあるプレーク・プラー（魚の一種）と同様湿地で、接近が困難である。プレーク・プラーは幅8メートル以下しかない。10分離れた所にオー・クレサットという小川があるが、おそらくこの川から流れ出る分流か、この川に流れ込む支流の1つであろう。

プレーク・トナオトの近くの土地はわずかばかり耕されているが、その後は完全に未耕地となる。カンボジア人が皮を利用しているスマチ（チャム、ティートリー）の散らばっ

た長い疎林に、小灌木が入り混じった錯綜したやぶが続く。そこではとりわけヤシ、それも海の近くに豊富に見られる種が目立つ。例えば砂糖の木のような外観のトリエク(?)や、ター・アオン(?)などである。ター・アオンは柱や質の良い貫板を作るのに使われると同時に、その芯は同じく大変豊富にあるペン(?)と同様、食糧として、現地人たちから大変に好まれている。またパホー・ヤシ(?)も同じく大量にある。その幹は太くてもせいぜい手首くらいであるが、大変に固い木の一種であり、槍の柄にしたり、カンボジアで使われている戦闘用の棒にしたりする。

プレーク・サンケー（漆を出す木）(?)の2支流を渡る。両者の間隔は200~300メートルで、最初の支流は幅15尋、深さ3メートルである。その後、道は少しばかり北向きになる。山はわずか2キロしか離れておらず、刻々変わる土壌の上で、森は厚くなっていく。続いて幅35メートルのプレーク・ティエルと、プレーク・トゥック・トラ（澄んだ水）を渡る。その上には橋の残骸がいまだに見える。最後に1キロ先のプレーク・トゥック・ロオク（濁った水）で、一連の小川が終わる。これらは最初、斜面に切り開かれた川床を流れ、続いて沖積土を通り抜けて、山脈と海の間で自分自身が形成し、着々と延長し続けている狭い帯状の土地に、ほぼ平行な筋をつけている。

右岸にはプレーク・トナオトから約12キロ、海から5キロのところに、12~15の混血中国人の小屋が建っており、トゥック・ロオクの主な集落をなしている。トゥック・ロオクでは肥沃な沖積土の土壌を水田が覆っている。比較的多数のカンボジア人農民の人口を持っている、重要な地である。

このプレークはそれまでのものよりかなり大きく、村の上流1時間の所から航行可能になる。この地点から先は岩や枯木で埋まった急流に過ぎず、潮は感じられない。平均幅は、頻りに往来がある部分で、25~50メートルの間を推移する。ジャンクは、河口だけは、海面が高いときに越えなくてはならない。海面が低いときには、深さはほぼ一様に2~3尋である。

北東モンスーンの始めには、主にコムポートから来た多数の船がプレークを遡り、米を買いに来る。それらに乗り組んでいる人々は大部分が中国人かマレー人で、この田舎に広く入り込んで、綿製品、タバコ、アレカ、その他生活必需品を提供し、収穫の余剰や、わずかなガンボージ、樹脂、油、ゴムその他の、山々の上や麓で収穫された森林産物と交換する。

象山脈はその地形ゆえに、まさにその同じ時期、この地のプレークの両岸幅2キロの海

までの空間に、非常に注目すべき気象現象を引き起こす。現地人はこれをクチョール・カダック（11月の風）と呼んでいる。このことは急いで通過するとなかなか分からない。見たことも聞いたこともないような荒々しきで、高みから平原に風が押し寄せ、文字通りあたりを一掃し、後には1本の木も残らない。これが吹くと、猛烈な暴風の中に捕らえられて、天変地異を目撃したと思うことであろう。毎年、住民たちは静かに座して、自分たちの藁小屋が破壊されるにまかせ、修理は季節の終わりを待ってからにして、資力があるときに小屋の壁を板で建て直すくらいにしている。とりわけ稲の実りが遅れたりすると、クチョール・カダックによって収穫が失われたり、被害を受けたりすることも珍しくない。暴風域の外側に位置する近隣の集落でも、耳を聳する騒音が聞こえ、埃や乾いた藁が巻き上げられて濛々たる雲のようにになっているのが見える。

トゥック・ロオクを出ると、道はずっと通りやすくなる。以後はだいたい昔のアンナム人の道をたどって、比較的古く形成された固い土地を北上していく。所々で何回か斧を振るうだけで、邪魔な植物を排除することができるので、ゾウで行くことも可能であろう。河川は南に下れば大きくなるが、渡河地点ではまださほどの規模にはなっていない。最初に出会う川のプレーク・パホーを例外として、潮の影響も受けていない。そして乾季には水がないので、この季節には障害にはならない。

スラエ・トム（大きな水田）はトゥック・ロオクから3時間である。プレーク・トラウ（水草の一種の名）、パホー（ヤシの一種の名）と後に取り上げるブン・ランが、ほぼ等間隔に道を断ち切っている。それらの源は2つの小さな小川で、これらは少し南で合流して、プレーク・トラウになるのだとされている。プレーク・パホーの水は塩辛く、幅10メートル、深さ2メートルである。プレーク・ブン・ランは小川に過ぎず、この場所に300メートルの池を形作っている。

街道はトゥック・ロオクの水田を離れると、素晴らしく美しく芳しい森の陰を抜けて、スラエ・トムの耕地に至る。ここで道をそれて、左手に、耕された平原を抜けて集落に続く、長さ2キロの1本の小道がある。この集落には40軒ほどのカンボジア人、あるいは混血中国人の小屋がある。これらは森の端、あるいはプレーク・スラエ・トムの岸に散らばっており、このプレークを通じてこの地の産物を輸出している。かつてこの村は道の近くにあったのだが、年々土地から十分な収穫が得られなくなっていき、住民たちは土地がやせたと判断して、自分たちの耕地を放棄し、森を開墾したのである。2回致命的な疫病が襲い、大勢が死んだ。そこで住民たちは、悪い土壌の上に小屋を建てたのが原因であると

考えて、現在の場所に移動した。

スラエ・トムに向かうために道をそれた場所からアンナム人の道に戻ると、1時間弱で、プレーク・スラエ・トム、オー・ヴィエル・カンダール（平原の真中の小川）から分かれる2支流、オー・ドムローンの4支流、プレーク・チャウム・ソムの2支流を渡る。これらの河川と先の3河川については、後にプレーク・スヴァイのところで再び触れる。これらはプレーク・スヴァイに注ぎ込む支流である。これらの河川は腐植土および植物性の土の中に深さ数メートルの川床をうがっており、雨が降ると激しい勢いで流れ、しばしば岸いっぱいになる。一方乾季には、数センチの水が細かい砂の川底を濡らしていることさえまれである。

どんどん豊かになり、勢いを増す森を抜け、右手の象山脈に沿って進み続ける。先に述べた急流を過ぎると、土地は少し高くなり、景観が変わる。岩塊が撒き散らされ、木々が散らばっている。半ば不毛なヴィエル・ラルの高原の上に出たのである。

この平原では、シカやノロジカが1,500~1,800メートルのところで草を食べているのに出会うことすら珍しくない。続いて森が現れる。

中央にトラペアン・クチョール・ボック（池、風、漂う）があり、ハスの下に水を湛えているこのきれいな空き地ほど、休息に相応しい場所はないだろう。池の周りにはすくすくと育った木々の葉が密生しているので、正午でも太陽を避けて休むことができる。

この地は全くの無人のようである。1人の人間も現れない。土壌は所々苔に覆われ、ロヴェーン (*Laurus* sp.)、利用されていない肉桂の木、ローン (*Garcinia morella*)、ガンボージの木があちこちに見える。

池の水は、数百歩離れたところでプレーク・トトゥオル（受け取る）に流れ込む。幅10メートルの川で、川床のくぼみにはまだわずかな水が残っている。雨季には丸木舟で、水源のかなり近くまで遡ることができる。

林間の空き地にあるいくらかの水田から、村が近くにあることが分かる。後はオー・ブン・スヴァイ（小川、池、マンゴー）を渡るだけで、常に森陰を進んで、数分でスヴァイに到達する。

スヴァイは全く小さな集落で、その小屋は互いにかなり離れて散らばっており、カンボジア人が住んでいる。彼らは自分たちの食糧にぎりぎり十分な米を作り、スマチの皮とティエルの油で松明を作ることを生業としている。この集落はプレーク・スヴァイの右岸にあり、25キロ離れているにもかかわらず、トゥック・ロオクに所属している。

象山脈を發するプレーク・スヴァイは、ここでは10メートルの幅を持っている。高さ4～5メートルの土手に挟みこまれた川床の底では、細い糸のような水の流れが岩々や、枯れ木の間を流れている。枯れ木は、雨が降ったときの猛烈な急流が、そこに投げ出していたものである。プレークは間もなく、先に述べた古く形成された土地を離れ、沖積土の上を蛇行する。この沖積土は、プレーク・スヴァイと後に語ることになる他のいくつかの河川が、複数の小島を1つの広大な半島に変容させたもので、チューン・コー（足、牛）、ヴィエル・レーン、ソムラオン（Sterculia(?)）、スラエ・チャーム（チャーム人の水田）といった丘の麓まで広がっている。これらの丘は非常に近接して連続し、流域の西を区切っている。プレーク・スヴァイは南に向かって流れ、自身とプレーク・トゥック・ロオクとの間の地を縦横に走っている急流や河川を次々と受け入れて、プレーク・トゥック・ロオクの河口のそばで湾に注ぎ込んでいる。

すなわち左手からはオー・ブン・スヴァイ、プレーク・トトゥオル、プレーク・チャウム・ソム、オー・ドムローン、オー・ヴィエル・カンダール、右手からは山脈を流れ下る3本の急流と、そしておそらく前方右手に現れるプノム・バックの山々に發する他の多くの急流の水を受けて膨張し、プレーク・トム（大きな）という名になる。海に着く前には、東岸からプレーク・スラエ・トム、ブン・ラン、パホー、トラウが流入し、西岸からはプレーク・チューン・コー（同じ名前の山から来る）、プノム・チューン・コーとプノム・ヴィエル・レーンの間に水源を持つ、プレーク・ヴィエル・ミエス（金の平原）、プノム・ソムラオンを發するプレーク・ソムラオンが流入する。

この西岸ではさらに、プレーク・ヴィエル・ミエスとプレーク・ソムラオンの間で、プレーク・トメイ（新しい）と名づけられた一種の小さな水路が、ブン・プロンとブン・ヴェーン（長い池）に連絡している。これらの池はかつて、ヴィエル・レーンの丘々の麓まで広がっていた。

これらの水の流れが寄り集まって、プレークはかなりの規模になる。平均幅は100～200メートル、河口では700～800メートル近くに達する。河口では泥が邪魔をしているが、中型の船でスヴァイの下流3キロまで航行が可能である。流入する支流も、下流部では同じように航行可能である。雨季のまるまる半分の間は、このプレークが貫流する低い平原は川水の下に隠れ、地上に膨大な量の屑や、急流の土手から削り取った泥土を沈殿していく。

年々の堆積物による土地の成長は急速で、目に見えるほどである。いくつかの場所では、このモンスーンの終わりに水田の中に水を留めておくことと、高潮のときに海水が水田に

入り込むのを妨げるということ、二重の目的を持った堰システムによってこの作用が促進され、その結果より厚い沖積層が保持されることになっている。

とりわけプレーク・トムの河口では、その現象が顕著である。ここでは沖積土の堆積が増えていく速さが分かる。この地で興味深いことの1つは、左岸のプレイ・トメイ（新しい森）、すなわち5～6メートルの高さのマングローブで覆われた広大な空間が、まだ15年も経っていないのに、海上に進出していることである。現地人たちがまさにそこで船で漁をしていたことを記憶しているこの土地は、まもなく水田に姿を変えていくであろう。

そのような河況は、土壤に比類ない肥沃さを与えている。現地の人々の言うことでは、人手が不足していてすっかり耕してしまうことができず、より多くの収穫を与えてくれるはずの新しい土地に向かうために、古い水田が頻繁に捨てられているというのである。

この豊かな平原によってコムポート地方は、カンボジアで最も興味深く、注目に値するものになっている。

スロック・トゥック・ロオクはその大部分が同じ名前のプレークの両岸沿いか、例えばスヴァイのように、山々に近い高い土地にある。最近の沖積土の上にも、2つの主な集落がある。コムボン・レチ（西の岸）とコムボン・スマチである。コムボン・レチはプレーク・トラウのほとりの航行可能になる地点にあり、プレーク・トラウはプレーク・トムの左岸から流れ込む最後の支流なので、プレーク・トムに行くにはここで船に乗る。この集落はクチョール・カダック（11月の風）が極めて荒々しくなぎ払っていく地帯の中にあり、20軒ほどの小屋からなっている。コムボン・スマチはより北、プレーク・トムの右岸、海から約7キロの所にある。この集落は数年前までは、この場所よりもかなり後方にあった。住民たちはより収穫が多い土地に住もうと、昔の場所を捨てた。昔の場所は、スマチ・トーチ（小スマチ）と呼ばれる新しい場所と区別するために、スマチ・トム（大スマチ）と呼ばれている。

プレーク・トラウを離れてヴィエル・レーンに行くのならば、川を少し遡り、対岸でプレーク・トメイと呼ばれる水路に入らなければならない。この水路は大変に狭く、深く、短く、ブン・プロンに続いている。この池では小さな堤防が氾濫の水を堰き止めており、（12月末でも）プレークよりも高い水位を保ち、わずかに狭い裂け目から外に逃していた。丸木舟をブンに入れるときは、最初は岸の上を引き、続いてわずかに高い土手の上を引いていく。このブンとそれに続くブン・ヴェーン（長い池）は、日々縮んでいき、見る見るうちに底がせり上がってくるのが分かる。注目すべきことにブン・ヴェーンの中のある場所

は、すでに大変に実りの多い水田に変わっている。そこでは耕す必要がない。この地の人々は田植えの前、水位が上がり始める時期に、草を刈り取って除去するだけである。

ヴィエル・レーンの 20~30 軒の小屋は、同じ名前の丘の麓まで散らばっている。その一番手前のものは、池から最初に地面に足を下ろした所にある。これに属するヴィエル・ミエス（金の平原）の小屋は、少し北、プノム・ヴィエル・レーンとプノム・チューン・コーが作る角にある。この 2 つの集落の住民たちは、コムポン・レチとスマチの住民たちと同じく、混血の中国人かカンボジア人である。コムポートの中国人やチャーム人が所有する、多数の水田がある。彼らはそれを奉公人に耕させ、収穫を配分する。

美しく古い木々が、木のない平原の中では大変に目立っている。その下には、カンボジア人たちが小屋を建てている。それはソムラオンの丘々からわずかに離れたところで、少し前に海を征服した古い海岸のそばである。そこは砂浜に変わり、表面は素晴らしい水田の泥土に覆われている。丘々と同様に、村もソムラオンという。これに属する集落はすぐ近くにある。このスロックはこの地方の 4 スロックの中で、最も規模が小さい。

地面を何ピエか掘ると、保存状態が完璧な、*Nerita*、*Natice*、*Solarium*、*Rotella*、*Turitella*、*Cerithium*、*Strombus*、*Nassa* 属等々に属する小さな種の、海の貝の残骸が大量に見つかる。それらは溝の底や、道の砂の中に撒き散らされている。海は今日、ソムラオンから 6 キロである。ここに挙げた軟体動物は、この海域を縁取る泥の上にはいない。これらに出会うためには半島の先端、プノム・スラエ・チャームの麓まで行かねばならない。

ヴィエル・レーンとソムラオンの間、これらの名を冠した丘と丘を隔てる森の端、水田の中央に 7 軒の小屋があり、40 人ほどの未開人（原語 *sauvage*）が住んでおり、自分たちが種族の最後の者であると思っている。彼らはチオンと自称している。カンボジア人はスイと呼ぶ。

どうして彼らがそこにいるのか？ それを知ることは容易ではない。彼らが自分たちの歴史だとしていることと、カンボジア人が彼らについて知っていることは、結局の所わずかにすぎない。かつて彼らは、半島中央部の唯一の住民として、独立して、近隣の人々から孤立して暮らしていた。アンナム人たちですらも、彼らが平和に暮らすままに放っておいた。彼らの主要なセンターかつ首長の居所はタパンで、西方に 1 日歩いたところにあった。ある日、シャム人が侵略してきた。ソムラオンの 2 人の男とタパンの 3 家族だけがそれを免れることが出来たが、部族（約 300 人）は捕虜として連れ去られた。わずかばかり

残された不幸な人々は1人の首長を選び、最初は惨めに森の中で暮らしていた。もはや危険はないと確信したとき、ソムラオンに移り住み、カンボジア政府の保護下に入った。政府は首長の任命を追認し、彼にオクニャのタイトルを与え、後継者にそれを継承させ、ヨマリエチ（司法大臣）の直接の権威下に置いた。ヨマリエチは彼らに、毎年1ピクルのサライ（現地人が食べる海藻）と、1ピクルのキー（皮をむいて塩漬けにした魚）を納めさせた。部族は他の税や賦役を全て免除されている。

捕虜となった同胞たちから届いた報せは、悲惨なものだった。一部は道中で果て、残りは散り散りになり、不幸に打ちのめされて間もなく消滅した。やがて、彼らの消息は聞かれなくなった。

ソムラオンの小丘の3家族の1つには、子供がいなかった。アン・ドゥオン王は部族が消滅するのを避けるために、兄弟姉妹以外の親族の間での結婚を許可した。今日、彼らの実数は43人、うち22人が子供である。

スイの女性たちはベテルを食べず、房にした縮れ髪に油をつけない。彼女たちは収穫を手伝い、森で働きに行くが、男女いずれの現地人の眼差しも入念に避けている。注目すべきは、現地人の誰もが、彼女たちの誰一人として顔を見たことがないのである。日常的な取引をするためにながりのカンボジア語を話すか、彼女たちはそのとき次のように振る舞う。カンボジア人あるいは中国人の女性がただ1人で集落にやって来て、小屋の扉の前に食糧を置き、声をかけて退く。家の女主人が出てきて品物を吟味し、選んで家に入る。女商人が戻ってきて、藁小屋ごしに交渉する。

チオンたちは、シャム人の侵略の前は完全に裸であった。家の中ではまだほとんど衣装をつけていないが、容赦なくからかう現地人たちと交際するときには、カンボジア人と同様同じ衣装を身につけ、カンボジア人の習慣を少しずつ採り入れている。

彼らは祖先を崇拜し、ネアク・ター・プレイ（森の精霊）にも、一種の信仰を持っている。祭りはカダック（11月）とピサーク（5月）に行う。彼らはその時に飲むために、米の酒を準備する。彼らは弩で猟をし、矢には毒を塗りつけてある。部族に奴隷はいない。

男たちは耳に穴を開ける習慣を放棄した。カンボジアの田舎のいくつかの部分では、まだ女性たちが耳に穴を開けている。彼らには2つのタイプがある。1つは綺麗になでつけた髪をし、額をあらわにして、愛想のいい雰囲気である。もう1つは髪が縮れていて、精力と不信感が表れている。彼らの体格はカンボジア人と同じである。

彼らが耕していたり、あるいは延長して新しく耕地にしたりした荒地は、彼らの所有

物と考えられている。中国人や混血中国人の農民が毎日のように、人を馬鹿にしたような贈り物を使って、随分と奇妙なことには正規の契約書を交わし、何ヘクタールでも思うがままに、土地を委譲させている。ここにコムポートの電信技師、クルジェアン氏が手に入れたことができたその種の証書のコピーがある。

ネアク・オクニャ・カンキリ、メー・プレイ、トヴー チア サムボット トック
ヌウ セ・リム チェン チュオ、ニエン・ブオイ、トバット バーン ヨーク カス 1 トロ
ナオト、スラー 1 ドープ、サムボット・ソー 5 ハット、スラー、モルー、トナム モ
ーク ソム デイ・プレイ ヌン カップ・リエン トヴー チア チョムカー スラエ ロー
ク・シー トートウ。ヌス ネアク・オクニャ バーン ヴォス デイ・プレイ ヌウ ブン・
ヴェアン カバル トタン 15 セン、ボンダオイ 25 セン、アオイ トヴー ローク・シー。
バウ ミエン チュモス ナー モーク スロデイ プラカン ター チア ケー ロボス ク
ルオン コム アオイ プローム。ソムボット トヴー トック ヌウ トガイ 14 コット
カエ ボス チュナム トス アエカサック。

Neac ochna Khankiri mé prey thvu chéa sombot tùc, nou sè Lim chen Chuor neang
Buoy debét ban joc cas 1 trenot sra 1 dâp sompot sã 5 hat sla molu thnam moc som
dey prey nung cap rean thvu chéa chomca srê roc si tâtou, nus neac ochna ban vós
dey prey nou bóng Véang cabal totung 15 sên bondoy 25 sên oi thvu roc si bó mean
chhmos na moc sredey pracan tha chéa ké robâs khluon com oi prom; sombot thvu
túc nou thngay 14 cot khê bós chhnam Thâs Eckâsac.

カンボジア政府が部族の長に与えた印章が、この書類の下部に押されている。書類は通常、白い1片の綿布の上に書かれている。以下が訳文である。

我ら、オクニャ・カンキリ、森の長はこの証書を作成し、中国人セ・リム・チュオとブオイ夫人に委ねる。彼らは未耕地の委譲を得、園地や水田に変え、生計をたてようと、以下のものを我々にもたらした。1リガトゥールのサペック (75セント)、1瓶の酒、5クデー (2メートル50センチ) の白い綿布、アレカ、ベテル、タバコである。ヴェアン池の近くで、我らは彼らのために、幅15センチ (600メートル)、長さ25センチ (1,000メートル) の土地を測った。彼らはそれを耕し、そのあがりて食べていくことができる。もしこの財産は自分が相続すべき遺産であると主張する者がいても、その主張を考慮する必要はない。

この証書は、1880年トッ年 (卯年) アエカサック (十千の1年目)、ボツ月 (陰曆

3月) 14日に作成・交付された。

彼らの言語には、相当数のカンボジア語の単語が導入されている。文字はないので、遠からず消滅してしまうことだろう。皆どうにかこうにかカンボジア語ができる。少数であることと、生活の必要に強いられて隣人たちと密な関係を持たざるをえないために、自分たちの父祖の言語をどんどん忘却していつている。すでに彼らは半ば、中国人債権者のなすがままになり、だんだんとその下僕になっていつている。彼らは森に逃げ込まない限り、他の住民たちと混じり合って消えていくだろう。

この表は彼らの言語の日常的な単語であるが、ソムラエやチョンに大変近いので、彼らの民族性を知る助けになるだろう。(表3)

表3

フランス語	カンボジア語	チオン	日本語
Un	Muey	Mos	1
Deux	Pi	Péas	2
Trois	Bey	Chés	3
Quatre	Buon	Phoos	4
Cinq	Pram	Param	5
Six	Pram muey	Katoong	6
Sept	Pram pil	Kanur	7
Huit	Pram bey	Kraki	8
Neuf	Pram buon	Kanchéa	9
Dix	Dâp	Haray	10
Onze	Motondap	Raymos	11
Vingt	Maphey	Péas si	20
Vingt et un	Maphey-muey	Péas hasimos	21
Trente	Samsèp	Chéas uisi	30
Quarante	Sésèp	Phoos si	40
Cinquante	Hasep	Param si	50
Soixante	Hoc sep	Katoong si	60

Soxante-dix	Chet sep	Kanul si	70
Quatre-vingts	Pet sep	Kati si	80
Quatre-vint-dix	Cau sep	Kanchéa si	90
Cent	Moroi	Mas chhur	100
Cent un	Moroi muey	Mas chhur mos	101
Homme	Pros	Chumlong	男性
Femme	Srey	Chumkhon	女性
Enfant	Con	Khéen	子供
Ainé	Bâng	Slâng	年長の
Cadet	Pôn	Môt	年少の
Père	Oupuc	Ur	父
Mère	Meday	Méi	母
Épouse	Propon	Chas kon	妻
Époux	Phdey	Châlôôr	夫
Corps	Khluon	Kop	身体
Tête	Cabal	Kùt	頭
Cheveu	Sâc	Sok	髪
OEil	Phnêc	Mat	目
Nez	Chremos	Antâ	鼻
Dents	Thménh	Khoi	歯
Oreille	Trachiêc	Proléang	耳
Bras	Day	Ti	腕
Ongle	Crâchâc	Kakth	爪
Chair	Sach	Chûôc	肉
Excréments	Ach	Tâkhik	糞
Urine	Nom	Kôs	尿
Malade	Chhùr	Két	病気
Voir	Khùnh	Téang	見る？見える
Aller	Tôu	Chév	行く

Venir	Moc	Inléas	来る
Courir	Rôt	Mintuv	走る
Cacher	Puon	Sùk	隠す？隠れる
Manger	Si	Chha	食べる
Boire	Phoc	Thas	飲む
S'habiller	Sliêk	Sâbis	着る
Dormir	Déc	Pich	寝る
Pouvoir	Ban	Takhiên	できる
Vouloir	Châng	Mos	望む
Acheter	Tinh	Tiy	買う
Vendre	Lôc	Toc	売る
Aimer	Sralanh	Mos	愛する
Jour	Thngay	Thâ ngès	日
Nuit	Júp	Chhéap	夜
Matin	Prúc	Péar	朝
Midi	Thngay trang	Thâ ngès totuor	正午
Soir	Thngay longéach	Thâ ngès pès	夕
Ciel	Mic	Jul	空
Terre	Dey	Thès	地
Tonnerre	Phcor	Kâthes	雷
Pluie	Phlieng	Kamas	雨
Eau	Tùc	Téar	水
Montagne	Pnom	Noor	山
Forêt	Prey	Bâry	森
Maison	Phtéa	Tâng	家
Fer	Dêc	Krâhoong	鉄
Lance	Ampéng	Sras	槍
Arbalète	Sna	Sar	弩
Flèche	Pruonh	Chârôôt	矢

Blanc	Sâ	Prông	白
Noir	Khmau	Chàc	黒
Rouge	Crâhâm	Ngauv	赤
Étoffe	Sompot sa	Trâhéas	布
Tabac	Thnam	Anchok	タバコ
Couteau	Combét	Chas as	ナイフ
Eau-de-vie	Sra	Kâ ranh	酒
Quel prix? (combien)	Thlay pomnan	Thlay-chhi-is	いくら?
Méchant	Kaach	Kadim-ka	意地悪な
Bon	Lââr	Moléng	良い
Adieu	Léa son	Chy	さようなら

時間が切迫していたのでスロック・レームを訪れることができず、現地人たちから集めた情報だけでこの風変わりな地を離れなければならないとは、何と心残りなことであろうか？

レームは4スロックの中で最も規模が大きく、ソムラオンの南西、同じ名前のプレークの岸に位置しているらしい。このプレークはヴィエル・レーンの丘々の西斜面に水源を持つ川の、左から流れ込む支流である。この川は東のプレーク・スヴァイの下流部と同じく、プレーク・トムと呼ばれている。さらにもう1つ流れ込んでくる重要な支流に、プレーク・トゥック・サープ（味の無い水）がある。この第2のプレーク・トムと先のプレーク・トムの間には、プレーク・バンティエイ・プレイ（砦、森）の河口がある。南にスラエ・チャム（チャム人の水田）の小さな山が見える。この名前はシャム人に破壊され、全住民が捕虜として連れ去られた1つの村と同じである。この村は惨事に見舞われる以前は大変に栄えていたのだが、再び人が住みつくことはなかった。

カンボジアの税関によると、全く信用できないが、米の収穫は大部分がコムポートに送られており、スロック・トゥック・ロオクで530ピクルを越えないという。ヴィエル・レーンは550ピクル、ソムラオンは420ピクル、レームは1,000ピクルである。

この地を見た者にとっては、これらの数字は注意を払うだけの価値がない。

プレーク・トムの岸からスヴァイに戻る間、前方に象山脈がある。この山脈は海図では象山脈と呼ばれているが、それは恐らく航海者の純粋な気紛れだけからであり、多分間もなくカムチャイという名が回復されるであろう。コムポートと同じくここでも、カンボジア人はそう呼び続けているのである。この山脈はほとんど起伏がなく、プノム・スルオチ（尖った山）、プノム・ボーク・コー（山、瘤、牛）の高い頂から700～800メートルの一定の高さを保ちながら、北寄りに延びている。遠くには、その西端が一種の支脈に支えられているのが見える。その支脈は木が生えておらず、頂上が平らで、徐々に、ほとんど目立たない程度に、人工的な感じがする規則正しさを沈下している。

長い城壁が未知の地を隠している。この城壁はたいいてい、人の侵入を拒む森をまとっている。しかしながら時々、この城壁を隠しているのが単なる緑のタペストリーに過ぎないこともある。その険しい脇腹は時々崩壊し、所によっては絶壁のように切り立っている。木と産物で豊かであってもほとんど利用されておらず、様々な種類の野獣たちが歩き回っているだけである。

スヴァイを離れると道は、ラテライトの塊が散らばり、1本の乾いた急流によって分かれたた厚い森に入り込む。別の2本の小川が、1つの長い空き地を、ヴィエル・アノン、ヴィエル・トアプ（戦いの平原）、ヴィエル・トラペアン・プノム・バック（プノム・バックの池の平原）と名づけられた3つの部分に分割している。

正面左手に見えるのは、プノム・バックの山々である。カムチャイの支脈であるが、たまたま切り離されたように唐突に始まり、切り立っていて、まさに壊れた山という名がふさわしい。南に向かって長く延びており、高さは300ピエ、木が茂っており、プレーク・スヴァイの流域を区切っている。その川床にまだ少しの水を保っているオー・チュヴェークは、プレーク・スヴァイに流れ込む最後の支流である。先の3急流もまた、この川に注ぐ。オー・チュヴェークはそれらと同じくプノム・バックを発している。まさにヒルの巢窟であり、切り立った両岸に挟まれて、ヴィエル・トラペアン、プノム・バックと、トモー・アンカエプの小さな高原の間を流れ下る。トモー・アンカエプは幅3キロで、壊れた山と、右手の大山脈を連結するハイフンのような役割を果たしている。

ヴィエル・トモー・アンカエプは砂質の土壌で、木は生えていない。そこに生える草は貧弱で、まばらである。セメントに似た一種の礫岩の巨大な塊が、あちこちに散らばって横たわっている。最大のものは急流から100歩の所にあり、もう1つの石の上に引っかかっている。その形と配置は、昔話の「揺れる岩」を思い起こさせる。身をかがめると、石

が入り込んでいる穴の底に土台があって、その上に載っているのが何とか見える。揺らし
てみようとしてみる。実際に、力強く押ししてみれば恐らく動かすことができるだろう。
カンボジア人はもちろんそれに大いに興味を持っている。ここはネアク・ター・ヴィエル
(ヴィエルの精霊)の居所なのである。

2つの石の間、奥の奥に、彼らのいうところでは目に見えない奥底に、はかり知れない
ほど齢を経た、巨大なカエルが住んでいる。それがネアク・ターである。彼は岩の裂け目
を通って地中深くにもぐり込み、雨が降ると岩の中の穴に溜まる水を使っている。2、3年
ごとに、近隣の集落はもとより、遠方の住民たちもネアク・ターのもとを訪れて、彼が自
分たちの守護者であることを思い出させ、疫病から必ず守ってくれるように、トラやワニ
の牙から護ってくれるように、実りをもたらすようにさせなければならないと考えている。
彼らはヴィエル・トモー・アンカエプ(高原、石、カエル)に集まる。古老の1人が群衆
の前で、訪問の目的を精霊に説明する。彼が語り終えたときに、彼の言葉に答えるように
カエルの鳴き声が響きわたると、喜びの叫びが炸裂し、草の上で祝宴となる。ネアク・タ
ーが何も言わないときは、その沈黙を説明するために、千もの理屈が持ち出される。余り
良くない卦が出たときでも、盛大に飲み食いをする。

案内人は旅人に全て語り終え、旅人が笑ったのを見ると、腹ばいになって手を岩の下に
延ばし、手に一杯の糞便を引き出してきて、ネアク・ターが存在するという決定的な証拠
を示した。

南西に散らばる一連の小さな丘は、遠くでプノム・バックと結びついているようだ。最
初のプノム・チャムカー・クイ(山、畑、クイ)は、プノム・バックから1,500メートル
離れているが、少なくとも1キロさらに南には離れない。その名の由来はカンボジア語で
クイと呼ぶ果樹(Willughbeia)であるが、そこではありふれているらしい。続いて道から
だんだんと離れていくが、以下のような名の山々がある。プノム・タエコン、プノム・ブ
ン・トラーチ(山、池、トラーチ)、プノム・プネーン(木の一種)、プノム・コポックな
どである。

ヴィエル・トモー・アンカエプに続いて、以下のヴィエルがある。プレイ・トタン・ト
ム(森、幅、大きい)、コム・セン、コム・プレーン、チェン・ヨム(中国人、泣く)であ
る。急流の増水からは安全な場所らしく、互いに小さな小川か森の名残によって隔てられ
ている。この無人の高原は斧と火で切り開かれて、短い草に覆われた広い牧草地のような
雰囲気である。中にはいくつもの大きな沼があり、野生の水牛やシカなどの足跡がそれら

を取り囲んでいるが、雨を待つまで十分な水を湛えている。

これらのヴィエルは両側に木が植えられていて、街道から離れている。いくつかの樹種が広がっているが、木々は若い。おそらくアンナム人が街道を作り、保護するために広範囲にわたって森を破壊した後に、利用しないにしても、価値ある種は生えるがままに残したのであろう。クルール (Melanorrhéa, sp.) は、大量の黒い漆を出す木だが、極めてありふれている。ここには何千本もある。ター・トラウ (Nauclea) は枝が大燭台のように幹に向かって持ち上がっている木だが、他の多くの種とともに、かなりたくさん生えている。

ヴィエル・トモー・アンカエプを出ると同時に、プレーク・スヴァイの流域とコムポント地方を離れ、プレーク・バック・チャンチェン (壊れた指輪) の流域に入り、コムポン・サオム地方に入る。

すでにずっと前から、キダウクの小山脈が見えている。これはヴィエル・プレイ・トタン・トムを離れるときに通り過ぎて背後に長く伸びている、カムチャイあるいは象山脈の分枝である。全体の長さの3分の2にわたってカムチャイと同じ方向に伸びているが、高さは半分ほどで、西端は街道をふさぐように曲がっている。

2つの山脈の間には谷が広がっており、そこから発するバック・チャンチェンは、ヴィエル・チェン・ヨムを区切って道を断ち切るところまで山沿いに流れている。この場所では、幅は25メートルである。増水すると深さは4~5尋にもなる。しかし乾季には潮がわずかに逆流を起こすとはいえ、プレークの水位は1~1メートル50センチを超えず、大粒の砂利の川底には転石や木の幹が散らばり、川船の航行は不可能である。

アンナム人の道はこの川を渡らない。川から距離を置いて左岸沿いを行き、同じ岸の上、コムポン・スロラッの古い基地の正面で終わる。道と基地は橋で結ばれている。これが破壊されて以来、ゾウで通る者はいない。わずかに何人かが、徒歩で踏破するだけである。植物がすっかり再征服を完了している。

今日、コムポン・スロラッまでの道程を終えた道の端には、チャムパーとヴィエルの集落がある。それらは川の右岸からかなり離れているが、スヴァイ以来、唯一の集落である。これらの集落に向かうと、さらに一層プノム・キダウクに近づく。この山に源を発する急流、オー・ヴィエン・チュレイ (曲がったチュレイ (Ficus) の小川) が現れ、道路を断ち切るときには、この山々は2キロと離れていないところに来る。植物は前と全く同じである。所々、一種のカシワ (原語 chène) (Quercus) で、カンボジア語でチレーという木のドングリが、地面を覆っている。トラーチ、トバエン (Dipterocarpus)、クルールが特に多数

を占めている。

チャムパーに到着すると、かなりむき出しの地面が思いがけず好奇心をそそり、目を楽しませてくれる。西に様々な間隔をとって散らばっている小さな丘の群が、重なり合って一つになって、波のようにならねって見える。その配置は、偶然に山国に入り込んだように思わせてくれる。完璧なイリュージョンとなっていて、あらかじめ知識を持っていなければ、旅人はこのそれぞれ異なる山脈について調べようとは思わない。彼にとっては全体で一つに過ぎないからである。

チャムパーの 12~15 軒の小屋はキダウクの最後の峰々の麓の、半ば開墾され、果樹に覆われた田野のあちこちに建っている。集落は 3 キロ離れた村、ヴィエルのスロクに属している。ヴィエルの住民たちが耕す素晴らしい水田は、オー・クランとプレーク・ストウン・ヴィエルを通り過ぎると始まる。これらの小川では澄んだ水が、幅 3 メートルの砂の川床の上を流れている。この小さな地方は本当に独特な雰囲気を持っていて、小道は生け垣に縁取られ、耕地の周囲を囲む砂糖ヤシとココヤシの陰になっている。

さらに半時間歩くと、コムボン・スロラッに到着する。この短い旅程の中で、土壌の性格が完全に変わる。ヴィエルの耕地では土地はやや砂質で、比較的高く、その小さなプレークの中では潮は感じられない。広い沖積平野の中に入り込むと、木がなく、非常に高い草に覆われており、この平野を貫流するプレーク・バック・チャンチエンの水位をかるうじて超える位の高さしかない。

この地点こそが、アンナム人たちが自分たちの大陸路の合流点に選んだ場所である。彼らはここスヴァイから 20 キロの地点、幅 25~30 メートル、潮が低いときの水位が 3~4 尋でプレークが航行可能になる地点の右岸に、コムボン・スロラッの砦を建てたのであった。

長方形の囲いの中心には、貧弱なポー (Ficus indica) が生えている。この軍事基地は南北辺が 100 歩、他の 2 辺が 75 歩という大きさである。その土手を覆っていた厚板の柵は、1 片たりとも残っていない。土手の基部の幅は 3 メートルだが、高さは 1 ピエ半しかない。濠は川の泥土が少しずつ埋め立てていつているが、囲いから 3 歩のところでは始まる。幅は 2 メートル 50 センチである。扉が 2 つある。1 つはコムポートへの街道に砦を結びつける、頑丈な木の橋に面している。現在では流れに押し流されそうになっている何本かの杭によって、その位置が分かる。2 つめはウドンへの道を通っている平原に向いている。

コムボン・スロラッという名は、むき出しの岸を意味する。東、北、西に目を遣ると、

非常に低い一連の山々に区切られた、素晴らしい地平線に囲まれている。地平線の山々はまずキダウク、続いてはるか離れたかなり奥に、プレア・チョール（神が入る）の山々である。これを延長して、プノム・ロロム（倒れた山）、次いで、キダウクよりも少し近くに、バック・カン（壊れた腕輪）の山々がある。その最高峰はプノム・ロロムに最も近く、カイ・タムパンと呼ばれている。山々の麓までの植物はあまり発達していないようだ。最近まで、砦の周囲は水田で覆われていたという。分厚い木々のカーテンがプレークの岸の曲折をなぞり、この地の南側を視界から隠している。

プノム・プレア・チョールとロロムの山々の間隔は小さい。そこはトヴィエ（門）・プレア・チョールと呼ばれている。コムボン・スロラックからウドンへの道は、ハーティエンから来る道同様、いまだに「プラウ・ユオン（アンナム人の道）」と呼ばれており、東で、おそらくかつてのウドンからコムポートへの街道と合流するということであった。

4. コムボン・サオムからウドンへ

プレーク・バック・チャンチェンは、海に向かうときは別の名前になる。コムボン・スロラックに到着する少し前、急流ではなくなり、沖積土の中を流れ始めた地点で、サオムと呼ばれる一種の籐（Calamus?）が周辺に豊富に生えている小さな集落の名を取って、プレーク・コムボン・サオムと呼ばれるようになる。

この呼称は海図に取り入れられており、何人かの著書でこの河川の存在について語ってもいるので、カンボジアでは広く認められている呼称であるが、この川を指す呼称は他にもある。また現地の人々はしばしば、もともとの名前の前に、最初に流れ込む主要な支流の名前を付けて、プレーク・ソムラオン・バック・チャンチェンとも呼ぶ。また時々、この地方唯一の港であり、主要なセンターである地名をとって、プレーク・スラエ・アムベルと呼ばれることもある。

すでに見たようにこの川は、プノム・キダウクとカムチャイの山脈の間にできた谷を出ると、交互に北西と南西に向かって流れている。雨の多いモンスーンには、多くの河川からその河床に流れ込んできた水や砂を、北東端に口を開いた広大な河口に運ぶ。乾季には、それ自身の流量に比べればとるに足りないとはいえ、かなり上流まで潮が流れを遡ってくる。

コムボン・スロラックから海までの川筋は 40~45 キロ程度ではあるが、海に着く前に幅は 2,000 メートル近くなる。深さは最低でも、河口を除けば 2~3 尋である。河口も通過は

困難だが、潮位が高いときなら越えることができる。しかし、数え切れないほどの礁があってふさいでいるので、特にスラエ・アムベルを出ると航行は困難に満ちたものになる。ジャンクはなるべく右岸沿いに行く。その方がより水深が規則的だからである。川筋の最後の部分では形成途中の大きな島々が、その大部分は潮位の高いときには沈んでしまうようなものだが、川床に散らばっている。そこには耕地も居住地もない。

この川が曲がりくねって流れている土地の景観は、特に下流域では、コーチシナの水路沿いとほとんど変わらない。違っているのは、美しい一群の丘が小島のようにあちこちに散りばめられていて、風景を極めて魅力的なものにし、単調さをうち破っている点だけである。

両岸の低く沼地になった部分は、内陸に向かって広がる無数のマングローブに覆われている。しばしば、やぶや水生植物がカーテンとなって侵入を拒んでおり、そこから大量のター・アオンヤシ(?)やペン(?)が頭を出し、平原を視界からさえぎっている。しかしながらその平原も、ほとんど裸のようで、利用されていないスマチ（ティートリー）が散らばっている。

プレーク・コムボン・サオムには、多くの支流が流れ込んでいる。この川が生まれた谷で合流する様々な急流の他に、右岸ではオー・ヴィエン・チュレイ、オー・克蘭、プレーク・ストウン・ヴィエルが合流する。プレーク・ストウン・ヴィエルは、ヴィエル・チェン・ヨム（中国人、泣く）とコムボン・スロラツの間で街道を断ち切っている。

コムボン・スロラツの基地を出た後では、以下の河川が合流する。

1. 右岸で、プレーク・ソムラオン、プレーク・コムバオ、プレーク・タップ・チェアン、プレーク・コムボン・クルオッ、プレーク・プラカム、プレーク・プラン、プレーク・ブン・プラン、プレーク・チュニエム、プレーク・チャエク・ブラック、プレーク・チェム・克蘭。

2. 左岸で、プレーク・ブン・トラーチ、プレーク・カオン、プレーク・トリエク、プレーク・トラペアン、プレーク・コムボン・スダム、プレーク・レラット、プレーク・ダウム・ケドン。

後に触れることになるプレーク・タップ・チェアンを除いて、これらの河川の流路については、まだ知られていない。

潮がよいときにアンナムの砦を離れ、丸木舟で 5~6 時間も進めば、スラエ・アムベルに着く。この地点まで川岸近くには 1 軒の小屋もなく、1 片の水田すら見られない。

プレーク・ソムラオン (Sterculia) の合流点が最初に来る。そこでは 2 つの小島が川幅を広げている。現地の人々の言うところでは、プレーク・ソムラオンは北から流れて来ており、ここまでプレーク・コムポン・サオムを航行してきた距離よりもはるかに長く、航行可能だとのことである。

プノム・ブン・トラーチの丘は、侵入を拒むような竹に覆われている。この丘のために、少し後で、プレーク・コムポン・サオムは左側にゆるく屈曲する。丘の麓の沼からは、プレーク・コムポン・サオムの大変にささやかな支流である、プレーク・ブン・トラーチが流れ出している。

さらに 5 キロ先で、プノム・ブン・クラオム (山、低い沼) の山から来たプレーク・カオン (湾曲した) に出会う。南方かなり先で、プレーク・コムポン・サオムは突然、それまでの南西方向を離れ、まっすぐ北上するようになる。

この地では、プレークの水が一年の大部分塩辛い。現地人たちは丘の麓や少し高いところに掘ってある井戸のことを心得ており、旅をするときにはその近くで休憩して、食事を作ったり、水を補給したりする。例えばプレーク・コムバオ (石灰) の合流点に着く前の右岸には、アンドーン・トゥック・サーブ (井戸、真水) と名付けられた休憩所がある。

このプレーク・コムバオでは、トロバエク (グアヴァ) と名付けられた集落まで船舶が遡るが、すぐそばにあるタップ・チェアンほど重要ではないようだ。この川は同じく北から来て、プノム・トゴン・プリットの麓で再び南西方面に流れ始めたプレーク・コムポン・サオムに合流し、魅力的なプローンの丘に沿って行く。この山の麓は河床に沈み込み、懐にスラエ・アムベルの小屋を抱いている。

その地理的な位置ゆえに、コムポン・サオム地方はとりわけシャムの侵略にさらされて来た。侵略者たちがその主邑のスラエ・アムベル (塩田) を見逃すはずがなかった。今日この小さな港は何の重要性も持っていないが、それでも繁栄の日々があり、川面にはより活気があふれていたことは真実なのだ。ムサン年 (巳年、1833 年に当たる) の侵略は致命的であった。1 本のココヤシの木も残らないほどの破壊を受け、住民たちは全員が捕虜として連れ去られ、その名の由来となった美しい塩田は永久に放棄されてしまったのである。

もともと非常に少なかった田舎の人口も、同時に根こそぎにされた。

新たにスラエ・アムベルに住み着いたのは、中国人かその混血児 (原語 *métis*)、あるいはシャム人であった。現在村には 50 軒ほどの小屋があるが、そのうち 2 軒だけにアンナム

人が住んでいる。

この地の他の部分とはいえば、逃亡し、虜囚になることを免れた住民たちが、荒廃した自分たちの集落に戻り、村に見せかけだけの生命を与えた。長く時間が過ぎる間に、シャム人の手から逃れることに成功した捕虜たちもいた。現在、スラエ・アムベルの近郊には、収容されていたラプティという場所から脱出し、およそ10年の時を経て父祖の国に戻ってきた70人ほどがいる。

アンナム人たちはその占領期の間、この基地を大いに利用するということはなかったようである。彼らは基地とコムポン・スロラツの間を、定期船で連絡していた。もしうまく行っていれば彼らは恐らくいずれ、陸路でチャンタブンと基地を連絡したことであろう。チャンタブンはより西にあるシャムの港で、彼らの1隊が配置されていた。彼らが侵攻軍から逃れるためにたどったのはこの将来の道筋で、コムポン・スロラツとコムポートの守備隊をなしていたアンナム人は、チャンタブン近くのコッ・トモー・ソーに到達するために、この方向へと次々に道を切り開いた。

水際の家々には、コムポートやチャンタブン、バンコクの港との交易に使う、小さな海ジャンクが半ダースほどもやってある。無人の田舎からスラエ・アムベルに届いた珍しい産物を交換に持って行つては、綿布、インド更紗、乾燥アレカ、石灰、乾燥ベテルの葉などを求めてくるのである。

商品の種類はあまり多くはない。米、わずかばかりの肉桂、かなりの量の黒い漆などである。40ピクルほどのガンボージがコムポートに送られ、コムポートのストックと一緒に売られる。10本の松明の束が2,000～3,000個。かなり粗悪なゴザ。これはこの地ではかなり評判が良く、米の貯蔵や住居の間仕切りのために大量に使われている。海岸地方全体でコムポン・サオムの藁小屋という名で知られている藁小屋。大量のスマイ〈あるいはスメイ〉(*Bruguiera gymnorhiza*)の皮。これは褐色に染めた布を藍に通すことによって、褐色あるいは黒色に染めるのに使われる。川沿いや山には価値ある木も珍しくないが、現地人の言うところでは商業的な需要がほとんどないので、ほとんど利用されていない。クロニューン(チャック)(*Dalbergia*)は、スラエ・アムベルでピクル当たり半ピアストルの価格である。

プローンの丘々の背後に散らばっている集落の中で、主要なものはトラペアンという。スラエ・アムベルから1,800メートルに位置している。ここが現在のコムポン・サオム知事の居所である。住民たちは西に延びる素晴らしい平原を水田に耕し、そこではコムポー

トを出て以降初めて見る、牛の群が草をはんでいる。トラペアンでは、土地は大潮の水位よりも数ピエ高い。従って雨季には川の大増水で沈む。北東モンスーンの終わりには、プレークのすぐ近くに掘られた井戸の水が塩辛くなるので、沿岸地方の住民たちは水を求めてトラペアンまで行くのである。

川に面したプローンの丘々の斜面では、何人かの中国人農民がベテルのプランテーションを開いている。彼らが収穫する分では現地での消費量に足りないので、貧しい人々は、シヤムから船で運んでくる乾燥したベテルの葉を噛んでいる。開墾された空間は、平原から7~8メートル以下の高さまでに限られている。この小山群の高さは75メートルを越えることはほとんどないのだが、残りの土地は耕されていない。また、地平線の至る所に散らばっている他の小丘群と同じように、力強い植物に浸食されているので、歩き回るのには都合が悪い。その土壌はほとんどの場合、厚い腐植土の層に覆われているが、ときには砂質のことがある。所によっては雨水がうがった溝の中に、ラテライトが顔を出している。草や木の根本に *Hélix*、*Bulimus*、*Streptaxis*、*Pupacte* 属の貝が大量に見つかるが、全てすでに指摘したものである。

土地の人々は、旅人の好奇心をひくであろうと、スラエ・アムベルを見下ろすプローンの小丘の頂上に、シヤムのパゴダだったと信じられている建造物の痕跡があることを教えてくれた。長方形の囲いを形作っている壁はまだ60~80センチの高さを残しているが、それを構成する巨大なラテライトのブロックは、時と植物によってばらばらにされている。おそらく像の残骸であろう、何片かのセメントだけが残っている。主要な入口は東に向いており、西門との間には25メートルの距離がある。南北は15メートルだけである。毎年、カンボジア人たちがそこにやってきて祭りをする。

スラエ・アムベルの女性たちは、腰巻きと、裾が短く、やや身体にぴったりしていて、喉元までボタンで留める、一種のチュニックを身につけている。僧侶たちは非常に濃い褐色を身につけている。ティカルと呼ばれるシヤムの貨幣が使われており、ピアストルは排除されている。コーチシナのリガトゥールも使われているが、括られているのは600セペックではなくて、300セペックだけである。アヘンの農場は年に20玉を生産する。

ここまでのプレーク・コムポン・サオムは平均幅が150メートルを越えなかったが、海に近づくにつれて急速に大変な比率で拡大し、10分も行かないうちに両岸は400メートルも隔たってしまう。

河口までに次々と現れる川の合流点を踏査するためと、案内人が一群の支流の入口を見

分けるのに苦労しているため、岸の大変近くを伝っていかなければならなかった。これらの支流は内陸深く入り込み、そこにいくつもの小島を形成している。右方にボン・レチの水路を通り過ぎた後、川を離れて500メートル奥までそこに入り込むと、プレーク・コムボン・クルオス（岸、砂利）の河口があった。スラエ・アムベルから6時間ほどのチュー・コツと名付けられた池がその水源である。この川はボン・レチと同じような他の水路によって、プレーク・プラカムにつながっている。

プレーク・プラカムは幅30メートルで、あまり高くない山に沿って流れている。この山は大木に覆われ、麓には同じ名前のかわいい集落がある。

ここからプレーク・コムボン・サオムの中央には大きな島々が近接して連続するようになり、川がいわば2つの部分に分けられたようになる。

両岸は徐々に低くなり、潮が高いときにはプレークを縁取るやぶのおかげで、プレーク・プーム・プランとプレーク・ブン・プランが何とか見分けられる。プレーク・プーム・プランは同じ名前の村のあたりから流れて来る。プレーク・ブン・プランの両岸には人が住んでおらず、1つの沼から流れてくる。

プレーク・ブン・プランの所で川幅は1キロになり、そして非常に急速に、さらにその倍に広がる。しかしプレーク・チュニエム、プレーク・チャエク・ブラック（銀を分配する）、そしてプレーク・チェム・クランを越えると川は狭くなっていき、河口では800メートルを越えない。これらのプレークの河口は互いに少しずつ距離を置いている。またこれらに関する情報は欠如している。

左岸沿いのプレークを下っていった旅行者は、以下の5つの小さな水路に気づくであろう。

プレーク・トラペアンは同じ名前の集落の近辺に水源がある。これと、このプレークが通り抜けてくる場所についてはすでに語った。

プレーク・トリエクはかなり離れた一群の小山から来て、トリエクの村の近辺を通る。

プレーク・コムボン・スダム（右の川岸）は、右岸にコムボン・スダムの村がある。

そして最後にプレーク・ロローク（氾濫した）とプレーク・ダウム・ケドン（木の名）は、2つとも地上2～3キロの所に見える丘々から来る。

プローンの丘々に続いて同じ側の岸に、スラー・ムニエン（アレカ、王の妻）、チュー・ティエル（ティエルの木）の丘が続く。他にも多くの丘が遠くにうねっている。全て木が生い茂っているように見える。それらには50～60メートルを超える高さのものはない。

風変わりな河口を一望するためには、マングローブを越えなくてはならない。マングローブは水の上に尖った苗の前衛をのぞかせながら、浅い海底を前進しつつある。プレーク・コムボン・サオムはゆっくりと、泥と砂で河口を埋め立てていつている。大きなコッ・ロンの島（ガンボージの木島）が、あたかも泥土が出て行くのを妨げるために配置されたかのように湾の入口にある。その側面の水路は時の経過とともに縮んで、小さくなっているようだ。右に、左に、一言で言えば海岸全体に、同じ植物がはびこっている。西方1キロ以内にプレーク・チャムボックの河口がある。このプレークは流路の最後で、プレーク・コムボン・サオムとほぼ並行に流れている。同じ名前の村まで船が遡り、数時間で到達することができる。現地人の言うところでは、他には湾に下る重要な川はない。マングローブの背後は、巨大な河口の両脇に沿うようにして小さな高みがある地形なので、彼らは間違っていないと思われる。

ヴィエル・レーンのプレーク・トムの中と同じように、コムボン・サオムの川の中でも軟体動物の種類は少ない。そこで集めることができた種は、コムポートの川に生息していることが確認できたものと同じである。両岸の低い土地では、特に *Auricula midae* が一般的である。海岸と同様河口でも、この点に関する研究が行われたことはなかった。知られているのは食糧になったり、美しさゆえに漁民が持ち帰ったりする貝のみである。前者の中にはクチョーン・ピーという名でカンボジア人に知られているものがあり、それについてはコムポート湾のところで先に述べた。またここでは潮が低いときに、*arca* 属（フネガイの仲間）の一種を籠一杯集めることができる。

スラエ・アムベルからウドンに行こうとする者は、プレーク・タップ・チェアンを訪れるとよい。プレーク・タップ・チェアンはおそらく、プレーク・コムボン・サオムに流れ込む最大の支流である。このプレークの源まで到達した後、その水源である山々を横切るとプレーク・トナオトの流域に出、あとは目的地までほとんどまっすぐ村から村へと進むだけである。

この旅程を終えるにはそれでも10~12日が必要で、良い季節でも楽ではない。

プレーク・タップ・チェアンはほとんどまっすぐ、北から流れ下っている。その合流点は右手に通り過ぎてきたが、スラエ・アムベルに到着する3キロ手前、プノム・トゴン・プリットの前面、コムボン・サオムの川が北西方向から南西方向に流れを変える地点にある。

プレーク・タップ・チェアンの名は岸にある最初の集落に由来しており、コムボン・ル

ンから先では名前が変わる。その先では高くても 400~500 メートルの山々から来るあらゆる急流が合流して、この川を形成している。

その流域はかなり狭く、両岸に短い間隔を置いて続く小さな山脈によって区切られている。流れ込んでくる支流は少なく、大変に貧弱な流れで、あまり重要性を持たない。

コムポン・ルンまでの川幅は 30 メートルを超えないが、20 メートルを下ることは滅多になく、均一である。コムポン・ルンまでの流路は 3 つの部分に分けられる。少なくとも乾季の景観では、このように分割することが可能である。

第 1 の部分は合流点とタップ・チェアンの間で、沖積土の中を流れ、中型の船舶で接近可能であり、潮の影響がある。両岸は海から 1~2 メートルの高さである。

第 2 の部分はコムポン・タチェスまでである。川岸は急速に 5 メートルの高さに達し、潮は大変にわずかに感じられる程度である。川床は長い砂州にふさがれ、岩塊や枯れ木が詰まり、危険をおかすというほどではないにせよ、軽い丸木舟を巧みに操っていく以外に航行は困難である。

第 3 の部分はコムポン・タチェスからコムポン・ルンまでで、もはや所々深い水面で分断され、高さ 7~8 メートルの切り立った土手の間に閉じこめられた、小さな早瀬の連続に過ぎない。大木が岸からもぎ取られ、雨季の水によって川をよぎるように投げ出され、時にいくつか集まって大きな歩道橋の役割を果たしている。

土壌は概して比類無く肥沃であるが、プレークの谷はほとんど無人である。住民がいまいと行って良いようないくつかの集落が、長い距離を隔てて両岸に点々と並んでいる。

乾季の間、川が一様な砂底の上を流れている部分では、辛うじて 2 ピエの深さを保っている。対照的に雨で膨れあがると、途方もない規模になる。毎年 1 回以上は、川床の狭いところから水を吐き出し、1 メートル以上の水を地に溢れさせて、それが 3~4 日も続くことがある。この氾濫は農民にとっては厄災で、明らかにこの地の人口がこれほど少ない理由の 1 つとなっている。

プレーク・タップ・チェアンの増水の様子から、プレーク・コムポン・サオム自身が並はずれて膨れあがるときには、そのいくつかの支流が送り出した水を全て受け取っているのであると判断できる。

タップ・チェアンの最初の数キロの間は、岸が低く、潮が遡ってくるような水路に共通した景観である。しかし進むにつれて、沿岸はより圧倒的な雰囲気を持ってくる。大きなティエル (Dipterocarpus)、コーキー (Hopea)、巨大な竹等々が、マングローブ、スマチ

(チャム)、水ヤシ、やぶなどに取って代わる。

プレークに入ると、まずプノム・トゴン・プリットを迂回する。その麓は右岸、わずかに30歩の所にある。高さは70～80メートルで、溢れんばかりの植物に覆われており、沼地に囲まれている。この山々を通り過ぎるとすぐ、小さなプノム・タ・ドゥオンの群が前方に現れる。同様に木が生えているが、より低く、150～300メートルほどの長さしかないように見える。

周辺の地は耕されておらず、きれいなスヴァイ・バック（折れたマンゴーの木）の山々の麓まで人が住んでいない。川の曲折のために、山の側面と正面が交互に見える。この丘々は川の左岸近くにあり、まず同じ名前前の小さな集落を過ぎると、続いてタップ・チェアンの集落が対岸に現れる。山の高さはおそらく100～150メートルである。傾斜は急だが一定で、木々が折り重なるようにして生えており、地面がほとんど見えない。

タップ・チェアンは数軒の小屋がある集落で、半ば水田に耕された平原の中にある。家々の大部分は、米の収穫の後に放棄されている。田植えの時期になるとまたやってきて住み着くのである。スヴァイ・バックの家々も同様である。ここに住んでいる人々はほぼ全員カンボジア人で、スラエ・アムベルの中国人の下僕である。

タップ・チェアンではベテルの葉がないので、現地人たちはセラット(?)と呼ぶ灌木の葉を噛む。彼らはそれをあらかじめ二重にした籾殻の間に挟んで、日に干して乾かしておくのである。

タップ・チェアンはプレークの入口から4時間の所にある。コムボン・タチェスはさらに2時間半先になる。この場所まではスヴァイ・バックの山々が見えている。気紛れな川の流れが山々をここに運んできたかのようだ。2つの集落を隔てている短い旅程で、川床は信じられないほどの枯れ木に埋まっている。100メートルも行かないうちに半ば砂に埋もれた岩の地区が現れ、停止しなければならなくなる。水は澄んでいて浅い。ほとんどどこでも砂の底が見える。切り立った、あるいは崩れ落ちた土手は、全く利用されていないティエルやコーキーに覆われており、時々その枝が流れの上に立派な丸天井を架けている。

コムボン・タチェスは村ではなく、川を遡るときに休憩する場所である。オー・コン・チャーの合流点の前面に位置している。オー・コン・チャーは遠くに見える同じ名前前の山々から来る小川で、1キロ離れたところにコン・チャーの村がある。コムボン・ルンまでに出会う人の居住地では、最も規模が大きい。

このカンボジア人たちは、スラエ・アムベルとはほとんど関係を持っていない。彼ら

は自分たちの食糧として必要な分だけを耕し、いくらかの松明を作り、また同じく森林産物とともに、中国人行商人が時々持ってくる商品と交換する。大多数はセペックを見たことがない。丸木舟の値を尋ねられた1人は、「水牛3頭」と答えた。

コムボン・タチェスからプノム・クサチ（砂の山）の集落までは、2時間の道のりである。川幅はそのまま、間もなく急流の様相を見せ始める。水は堰や小さな早瀬のようになった岩底の上を流れるかと思うと、細かい砂の上を流れる。流れが澄んでいるので貝が見える。種類は少ないが、非常に多く、Paludina、Unio、Anodonta、Cyrena、Iridina 属に属している。

早瀬を越えるとき、漕ぎ手たちは水に入り、丸木舟を押しして一番通りやすい場所を通過させる。この障害物の高さは30～50センチの間を推移する。それらを覆う水の層は1ピエもない。土手はどんどん高くなり、平均で7メートルに達し、時に崩れそうになって、その足下を浸食している急流の川床の上にせり出している。植物はどこでも盛んである。コーキー（サオ、Hopea）が優勢だが、川と同様大きくはない。

流れのあちこちに砂州ができており、乾季には水からむき出しになる。プレーク・タップ・チェアンには、カンボジア人がタサイと呼ぶカメがどこよりもたくさんいて、1日中太陽の熱暑にさらされている砂の堆積を選んで卵を産むということである。

このカメはかなり大きくなるに違いない。なぜならその卵は、カンボジアでは人気のある御馳走なのだが、長さが10～12センチ以上あるからである。

タップ・チェアンで産卵された分は、王太后の所有物となる。彼女は川を監督して卵を集めるために、以下のような人員を持っている。ウドンに住んでいる1人の官人が毎年、この貴重な産物の採集を監督し、とどこおりなく輸送するために現地まで赴く。彼の命令下にあるのはヴォンサー・サンクリエムと呼ばれる下役1人と、2人の男である。この4人はコムボン・タチェスの正面の、コン・チャーの集落に住んでいる。彼らは次のように任務を遂行する。

産卵の季節になると、彼らは日夜カメが住んでいる区域、コン・チャーからプノム・クサチまでを頻繁に巡回する。タサイの痕跡を見つけた砂州には、竹の薄片の束を端に付けた棒を刺して印をする。そして現地の人が卵を横取りしないように、卵が大好きなワニやイノシシが餌食にしないように見張る。

もちろんこのカメを獲ることは禁止されている。小屋の中で語ってくれたところによると、カメを捕らえるという罪を犯した者は、その過ちをあがなうために、捕らえたカメの

甲羅に一杯の銀貨を支払わなければならないということだった。これを語ってくれた者たちは今までに銀貨を見たことなどなく、誰かがそのような額を支払わねばならない羽目に陥ったという噂も聞いたことがなかった。

2月が近づくと、ウドンから官人が到着する。彼の部下と3人の助手たちは近隣の住民たちを招集し、採集させる。それぞれが50～60センチの細い棒を持ち、砂に突き刺して探っては、卵を見つけると手で掘り返す。砂山の中から30ほどの卵を見つけ出す。河の中に砂州は数多くあり、それぞれに通常5～6個の砂山が隠されている。しかしながら、王太后のもとに700～800個以上の卵がもたらされることはまれである。彼女はその卵を息子や王女たちに与える。

ピエム・トリアンは左岸にある3～4軒の小屋の集落で、クサチの少し手前にある。その名前は、プレークに流れ込む小川から取られたものである。

クサチは少し先の右岸にあり、規模が小さい。住民たちは森で採集してきたガンボージで税を払う。彼らは貧しく、青いたばこを熟し次第吸う。

周辺の小さな小川の中には、Melania 属の素晴らしい一種が生息している。それはカンボジアではまだ報告されていないものであった。

クサチを離れると、カンボジア人がアンロン（淵）と呼ぶ、プレークの中に多数ある深い水面の中でも最も美しいものの1つに出る。川幅は変わらないが、素晴らしい木陰で、まっすぐに1キロ以上続く。

プノム・クサチからコムボン・ルンに到着するまで4時間はかかる。この旅程の最後の部分では、障害物が増え、早瀬が連続し、平らな岩がほとんど常に右岸から突き出しており、プレークの中央まで届いていることもしばしばである。1か所ならず、岸からもぎ取られた木の幹の上に堆積した砂で堰が形成されている。

この2か所の間では、4本の急流が右岸からタップ・チェアンに水を注ぎ込んでいる。それらはオー・デイ・ソー（白い土）、オー・ルプウ（カボチャ）、オー・トロソック（キュウリ）、オー・ケシオである。何軒かの家が左岸に散らばっており、スロック・ロムロットに属する。

コムボン・ルン（イグサの岸）は丸木舟で行き着ける終点である。ここから川はそれまでの名を失う。これ以後はストウン・コムボン・ルンの名で知られるようになる。この川には、はるか後に再会することになる。川床は狭まり始める。水は岩の後ろに押し込まれた大粒の砂利の上を流れる。

岸には1軒の小屋しかない。1人の中国人が住んでいる。彼は綿布、食器類、アレカなどと、カンボジア人が持ってくる森林産物とを交換する。彼はこのようにして大きな利益を得ている。とりわけ印象に残ったのは、彼の倉庫の中には一種の松脂があり、彼がそれは1ピクル当たり40リガトゥールであるが、プノム・ペンでは5~6倍になると主張していたことであった。現地人たちはこれをコムニアンと呼んでいる。コムニアンは彼らの薬局で使われており、現地風のロウソクを作ったり、とりわけ楽器の弦に塗りつけたりするのに使われている。市場ではわずかな量しか見られなかった。

北西に2時間、ゾウあるいは徒歩で行くと、森の中をオー・クナー・チャーイが流れている。ストウン・コムボン・ルンに向かう急流であり、トラダック・ポーン（ハゲコウの卵）とポー・バンの村に続いている。これらは水田に耕された平原の中にあり、互いに2キロ離れている。ポー・バンのパゴダからは、タップ・チェアンの溪谷を北から囲んでいる山々の一部が眺められる。東から順番に、遠くの巨大な峰々がプノム・プティオク、近接する一連の小さな山々によって東側でプティオクに繋がっているように見えるのがプノム・スナー（弩）、互いに孤立しているのはチョムゴー、プノム・プガ、チュオ・ペーイ、タクート、プロビエトである。プティオクの前には他から切り離された小さな峰があり、その形からクラ（稲の毛虫）と名付けられている。

通常ウドンやプノム・ペンの方に行く人々がたどる道は、プノム・チョムゴーとプノム・プロム・プガの間を通る。これから取り上げる東の山々の中に踏み込む小道は、通る人も滅多にない。

最初はプノム・タクートに向かい、この山を横切ってアロンの村に到達する。この村の水田は、プノム・プロビエトの麓まで広がっている。タクートは岩だらけの丘で、その貧弱な植物は、腐植土が集まっているところでは少し勢いがある。ストウン・セノックはストウン・コムボン・ルンに流れる大きな急流であり、1日北に行ったところにあるプノム・ダチ・プダオから来ているらしく、この山とアロンの耕地の間を流れている。

アロンはトラダック・ポーンと同じく、ポー・ブンのスロックに属している。これらの集落にはあわせて25~30の小屋があり、この3つでタップ・チェアンの溪谷上流の人口全体をなしている。

この一角の住民たちは、1881年1月初めの天然痘で大変に苦しんだ。10日間で28人が奪われた。しかし彼らには、気力が戻り始めてきている。1週間のあいだ現地のアヒルを食べないようにせよという、アロンの医師の処方が効いたのである。

アロンを離れてもまだ2日間はコムポン・サオム地方の中におり、1軒の小屋を見ることもなく、山中を歩き回ることになる。

道程はプロビエトの丘々から始まる。これらはタクトの山よりわずかに高いが、ストウン・セノックに流れるオー・タプーとオー・プラム・チューク（5つのハス）の急流によって、大山脈から隔てられているようである。

続いて、スナーの山塊が前に立ち現れてくる。この山はオー・ルン・スヴァイ（イグサとマンゴー）によって、2つの部分に分けられている。オー・ルン・スヴァイは山脈の北から来る急流で、プレーク・タップ・チェアンの主な水源である。

前半部分には山脈の最高峰（約500メートル）、チュロモー・スナー（弩の鼻）の頂があり、南側のチュロモー・スノップでいきなり終わっている。この山はおそらく250メートルほどの高さで、ルン・スヴァイが流れる切り立った溪谷にさえぎられている。ルン・スヴァイはこの山を迂回して西に向かい、コムポン・ルンに達する。

後半部分ではその最大の峰、ヴォルヴォン・ソーリヴォンの名が有名である。ルン・スヴァイを渡るとすぐ、1つの支脈が続いていく。その最初の山がプノム・コムバオであり、急流の流域の南西を区切っている。

ヴォルヴォン・ソーリヴォン山から先は、最高峰をコムパリエと呼ぶもう1つの支脈がゆるやかに南側に浮かび出て、まっすぐに東に向かう。これは現地人たちによると、カムチャイの山々（象山脈）に合流するとのことである。

プノム・コムバオの周辺の急流は、ルン・スヴァイには注ぎ込まない。それらはプノム・コムパリエから発するオー・ロムガ・スイに合流し、ストウン・チョム・リエン・ティエウを形成して、さらに先ではアンロン・アーレアック（悪魔の淵）と名前を変え、最大の支流としてプレーク・トナオトに合流する。

山脈の高原の上を走る小道は楽な道である。上りの傾斜は規則正しく、ほとんど感じられない程度である。プノム・カン・チョムパー・トーチ、プノム・カン・チョムパー・トム、プノム・ソムバオ・ロヴィエン（肉桂の皮）、プノム・チュロモー・スナーブを上がり下がりする。これらの山々は、この先出会うことになる山々の大部分と同じように、砂と小石が混ざって固まった一種の礫岩からなっており、その大きな塊があちこちで地面の上に散らばっている。地面は一般的に、薄い腐植土の層に覆われている。しかし所々では、雨水でむき出しになった石が風化して、手でボロボロに崩れる。植物はあまり発達しておらず、木々はひ弱で、価値のない種類である。ソムバオ・ロヴィエンの中腹には、肉桂(Laurus

sp.) が広く見られるが利用されていない。

オー・ルン・スヴァイはチュロモー・スノップとトゥオル・トラペアン・プレイ（森の池の高み）の間を流れる、大きな急流である。コムボン・ルン近くで合流するストウン・セノックとともに、プレーク・タップ・チェアンを形成する。チュロモー・スノップの麓では、先に渡ったオー・ソムバオ・ロヴィエンと左岸にあるオー・トモー・ルーンが合流する。

現地人たちの言うところでは、その澄んだ水はけっして干上がることがない。道が横切るところでは、2メートル50センチの滝になっている。1つの岩の裂け目から流れ出して狭い谷に落ち込み、礫岩の中や上に掘られた水路から漏れ出て、雨の時には橋のようになった岩の区域を流れる。両岸にはカンボジア人が火の木（チュー・プルー）と呼ぶ灌木が豊富に生えている。この樹液が肌につくと、火傷したようになるのである。ガルスリー氏はカンボジアの北部で、蛮人たち（原語 *sauvages*）がこの木の皮を用いて魚を捕っているを見た。これを投げ込んだ水は急速に黄色くなる。やがて魚が水面まで浮いてきてもがくので、容易に捕らえることができるのである。

ここからヴォルヴォンまでは、ずっと上りが続くばかりである。道は小さい池に沿っていく。最初に乗り越える峰の名前の由来となった池である。プノム・トモー・ルーン（穴が開いた石）を横切り、同じ名前の急流を渡り、プノム・コムバオ（石灰の山）を右手に通り過ぎると、ルン・スヴァイを出て3時間でヴォルヴォンに到着する。

この旅程では、土壌の性質は変わらない。この石だらけの土地の上では1匹の軟体動物も生きていようには見えないが、陸生の貝がいくらかオー・トモー・ルーンに転がっており、この急流が発する山々はそうではないと推測できる。さらに、近くに見えるプノム・コムバオは全く対照的である。そこの植物は途方もなく発達している。この山はその名がほのめかし、また案内人も言っているように、石灰岩を懐に抱いているのではないか？

足元の土壌は貧しいままだとしても、植物は著しく変化する。最初はまばらだった松が、トラペアン・プレイの池の少し先で他の木々に取って代わり、ヴォルヴォンに着くはるか手前から、松しか目につかないようになる。松が山脈の上に占めている空間はかなり限定的なようである。なぜなら、峰々の上では道が通り抜けている左右の山々に松は見当たらないし、ヴォルヴォンを過ぎるともはや見かけなくなるからである。

この松は、恐らくコムボン・スヴァイのものと同じ (*Pinus longifolia*) であろうが、利用されていない。その樹脂はプノム・ペンではピクル当たり8ピアストルするが、採集

されていない。根元の直径は平均 25～30 センチである。いくつか 60 センチに達するものもある。高さは 15～25 メートルである。

同じく向こうに見えるプノム・ヴォルヴォン・ソーリヴォンは、カンボジア全体にその名を知られている。広く普及している写本によると、「その頂上には天然の円形城壁を形づくる岩々があり、かつては恐るべき要塞であった。伝説によるとそこには、ヴェイ・ヴォンサーという名の篡奪者が住んでいた。正統王の息子、ヴォルヴォン王子とソーリヴォン王子がヴェイ・ヴォンサーを打ち破って殺し、山に自分たちの名前を付けた。」

事実松の下には列のようになった岩々が頭をもたげているが、それらは低く、間隔が離れており、囲いを形成してはいない。

案内人はヴェイ・ヴォンサーの母である美しきモンティエが連れてこられて死んだ場所を示し、伝説を語って、敗者の首がさらされたという岩の周りを回らせた。さらに、離れたところにある、身体を置いたという大きな岩塊を回らせた。

フランシス・ガルニエがもたらしたカンボジアの年代記 (『インドシナ探検旅行 *Voyage d'exploration en Indo-Chine*』) は、このように言っている。「この時期 (1437 年) の初めすぐ、アンコールの最終的な放棄が起こり、カンボジアの首都はある時はバサン、ある時はプノム・ペンとなった。1516 年について、精力的で辣腕の王、プレア・アン・チャンが王位に昇り、一時的に、衰退した母国を立て直した。彼が即位したとき王国の一部は、1 人の反逆した官人が支配していた。彼はバサンにいて統治していた。王は彼を打ち倒し、カンボジアを平定して、居所をポーサットからロヴェークに移した (1528 年)。」

『カンボジア史理解のための地図、1346 年から今日まで *Carte pour servir à l'intelligence de l'histoire du Cambodge, depuis 1346 jusqu'à nos jours*』(1 巻図版 5) によると、その著者がバサンだと想定した場所は、ヴォルヴォン・ソーリヴォンのすぐ近くである。

ヴォルヴォン・ソーリヴォンの高さは 300 メートル以下しかない。上りは容易だが、反対側の斜面の急な坂の下りはそうでもない。土壌を覆う厚い腐植土の層に、木々ややぶ、つるが密に生えていて、土壌は完全にそれまでとは異なっている。地面には、大量の貝が散らばっているが、その中にある *Hélix* の 2 種類は、うち 1 つが *sénestre* であるが、現在に至るまで、カンボジアでは報告されていない。*Bulimus schamburgkei* と *Hélix distincta* はとりわけ頻繁に見かける。

草の中に現れる岩、あちらこちらに転がっている石は、もはや先に述べた礫岩ではなく、

砕けやすい切石のような外見をしている。

一群の小川が北から南へと、渓谷の中を流れている。おそらくそれらは、右手にずっと続いているプノム・コムパリエの麓で、ロムガ・スイを形成する。まもなく横切ることになる急流である。

この川については後に話すことになるが、その流れを左側に残してしばらく行くと、巨大な砂利の堆積が道をふさいでいる。案内人はそれを見て、石を1つ取って加えた。「これは」、彼は言った、「山の街道のネアク・ター（精霊）です。トモー・クロベイ（水牛の石）と呼ばれています。ここを通る者は各々石を積み上げて、旅が成就した幸運のお礼にするのです。」

最初に出会う集落はロヴィエである。しかし通常休息するのは、ヴォルヴォンから7時間離れたトラペアン・クレーン（貝の一種、クレーンの池）である。

ウドンまでの残りの道は、プノム・ペンからコムポートへの道とほとんど平行である。徹底して変化に乏しい地で、プレーク・トナオトによって2つの部分に分けられている。プノム・ペンを出たときコムボン・トゥオルで渡ったあの川である。

距離は30キロで、トラペアン・クレーンからプレーク・トナオトまでに、6つの村がある。これらの村々は、水田やいくらかのタバコ畑に囲まれて、互いに広大な疎林に隔てられている。そこで最も良い木々はプチェック（Shorea?）、ソークロム（Xylia）、プディエク（Anisoptera?）と、いくらかのクノーン（Pterocarpus）である。

村々の名前は、バンティエイ・ロカー（綿の木の砦）、クロモム・バン（乙女の祈り）、クラン・ロヴァイ、クラン・プラー、ストウン（川）、クラン・ソムナーである。

人口は少ない。彼らは夜間に住居のあたりをうろつきまわるトラやヒョウの牙から家畜の仔を守るために、用心をしなければならない。

トラペアン・クレーンは最後の山々の麓に位置している。オー・ロムガ・スイはこの村まで、山脈と平行に流れている。この川は村に着く前にストウン・チョムリエン・ティエウと名前を変え、右岸から様々な急流が合流するが、最も勢いがあるものはオー・ロヴィエとオー・サンコイである。

トラペアン・クレーンの前でこの川は3つの支流に分かれ、さらに少し先で再び合流するため、時にストウン・ベイ（3つの川）と呼ばれることもある。この村を離れると、川は右手に離れて行き、ストウンでまた再会することになる。この旅程ではチョムリエン・ティエウ川がトラペアン・クレーンまで、4~5メートルの深さに開いた、土手のない岩の

川床の上を流れている。雨季には航行可能で、北西から来るオー・克蘭・ロヴァイが左岸で合流する。ストウンの集落では、川幅は20~30メートルである。

プレーク・トナオトは克蘭・ソムナーを通過して西から東に流れている。この村から2~3キロ下流に、アンロン・アーレアックという名の、チョムリエン・ティエウとの合流点がある。ストウンの1時間ほど先でストウン・ヴァンが右岸から合流した後に、この新しい名前が変わるのである。ストウン・ヴァンはおそらくバック・ヌム（壊れたくびき）の山々の西斜面の水を源とする、大きな川である。プノム・バック・ヌムとは、プノム・ペンからコムポートに向かう際に横を通ったあの山である。

ストウン・ヴァンとアンロン・アーレアックは、コムボン・サオム地方とプノム・スルオチ地方を隔てている。プレーク・トナオトはソムラオン・トン地方との境界である。プレーク・トナオトからウドンまで残り75キロの旅程で、重要な川の流れには出会わない。3日目に到着した最後の村を含めて、踏査してきた地全体がソムラオン・トン地方に属している。

この旅程で通過した主な集落は以下の通りである。クレチェは、プレーク・トナオトの右岸にある。ブン・ボックはオー・トム（大きい）の近くにある。オー・トムはプノム・プラーを発し、プノム・ロヴィエの麓にあるプレーク・トナオト・アンロン・ペー（カワウソの淵）に向かう小川である。

この地は比較的人が住んでいる。ロンペイからウドンまでに8~10以上の集落がある。唯一の作物は米とタバコである。雨水に運ばれた砂が道を埋め尽くし、土壌は一般的に粘土質のようで、巨大な未耕地が森に覆われているが、それは多くの場合やせていて、とりわけコントウオト・プレイ(?)と呼ばれる果樹など、価値のない種類の木々が多く生えている。スラエン (*Strychnos nux vomica*) がかなり一般的である。巨大な平原を覆うのは、竹のみである。先にプレーク・トナオトの右岸に生えていることを指摘したクノーン、プチェック、プディエク、ソークロムはここでも見つかるが、まれである。

旅の最初にクナーの近くで（プノム・ペンからコムポートへの街道）、プノム・スルオチを右手に見て通り過ぎながら、この山脈は西へ延びているのであろうと推測した。今、クレチェを離れるときにその西端が姿を現したことから、この山脈は東西に15~20キロの長さであることになる。もしもストウンから東で気づいた幾つかの孤立した丘のようであるなら、プノム・スルオチはプノム・バック・ヌムに結びついていることになる。プレーク・トナオトに達するストウン・ヴァンと、ストウン・スラー・クーの流域は、チャウド

ックの水路に向かう、全くうってつけの場所にある。

ウドンに近づくと土地は砂質になり、薄い粘土層に覆われ、乾いた小川が何本も刻まれている。雨が降るとこの小川が平原の水を直接、トンレ・サープに運ぶ。

25 年前、アン・ドゥオン王の即位の前にカンボジアを荒廃させた戦争が残した傷跡は、すでに消えている。ウドンはその戦いの最後の一幕を目の当たりにしたのだが、もはやそれを記憶してはいないようだった。その人口は 12,000 人と推測されていた。主要な通りは 1 キロ以上の長さがあり、大きな中国人の市場であるコムポン・ルオンとカトリックの主要な村落であるポニエ・ルーが一種の郊外で、繁栄を極めていた。

アン・ドゥオン王がそこに住んでいた。彼は自分の首都を見事な車道によってコムポン・ルオンおよびプノム・ペンと結びつけ、その重要性を高めた。すでに見たように、コムポートおよびコムポン・スロラッに向かう道によって、ウドンはシャム湾岸に連絡していた。後に触れるが、別の街道がポーサットおよびバット・ドムボーンとウドンを連絡している。

ウドンは 200 年以上に渡って、カンボジアの首都というタイトルを保っていたが、都会とは程遠い景観である。近代的な宗教記念碑を頂いた 4 つの小丘が王太后の宮殿をなす建物群とともに南の境界をなし、20 のパゴダが反対側の境界をなし、広大な水田の平野があり、その中央には要塞化された巨大な城壁が 2 つある。

王太后の住居に並んで、丸々 1 村の召使いの村がある。2 つの砦の北端には、全て混血児（原語 *métis*）と中国人で、60~80 の小屋を持つ規模のもう 1 つの村があり、砦の門はこの村に向かって開いている。そして市場があり、農地の中に散らばる数多くの家々の住民たちが食糧を買いに来る。

この砦はウドンに住み着いた最初の君主たちが建てたものであり、バンティエイ・チャス（古い砦）と呼ばれ、長い間アンナム人たちに占領されていた。アン・ドゥオン王はここには住まず、ヴェアン・トメイ（新宮殿）という、もう 1 つの住居を建設して住んだ。アン・ドゥオンの前に王位にあった 2 人、アン・チャンとアン・メイもここには住まず、プノム・ペンで生活していた。アン・チャンは現在の宮殿の近くに住んでいた。アン・メイ女王はコッ・ノリエの島に住んでいた。

この 2 つの城壁は、コムポートやコムポン・スロラッの砦同様、原始的な形態であるが、広大な面積を占めている。バンティエイ・チャスは現在では廃墟となっているが、1 辺 800 メートル以上であった。もう 1 つは半分ほどの大きさであるが、保存状態はよい。その土

城壁は4メートルの高さで、10クデーの長さの固い木の厚板の柵が取り付けられていた。濠の幅は20～30メートルであった。スラー・カエウと名付けられた広い池、一種の貯水池が、ヴェアン・チャスの北面全体を覆っている。古い砦の中には、竹や棘の生えた木の生け垣で囲まれた、ごく小さな区画がいくつかある。これらは、防御のために植えられたと信じられている。そこには廃墟となった建物がまだいくつか残っていて、現地の人々はその配置をまだ記憶している。

内部はほとんど完全に耕されていて、一部分に王太后の官人たちが住んでいる。砦の低い土地、濠やその周辺では、1月に、カンボジア人がスラウ・プランと呼ぶ遅い稲の田植えをする。

ウドンの人口はおそらく4,000人に届かないであろう。ここには大勢の僧侶たちがいる。大きな儀式で彼らが王太后のパゴダに集まると、やはり400人はいる。

アン・ドゥオン王が作った素晴らしい車道は、時間が経ってもまだ持ちこたえている。石積みの2つの舗装の間に挟まれていて、洪水にもびくともしない。幅10メートルの土手の上には、百センチ毎の距離を示す花崗岩の標石がまだいくつか見える。所々、やぶの下に広い石の階段が現れ、5～6メートルも下にある平原に降りることができるようになっている。

この車道には複数の橋が架かっており、ムオをして、カンボジアの行政の方がシャムのものより勝っていると言わしめたものだが、失われてしまっている。例外はコムポン・ルオンの近くの石積みの橋で、後で述べるストウン・クラン・ポンレイと近隣の沼から発するプレーク・ドン・スドンを結ぶ、沼のような水路の上に架けられている。

コムポン・ルオンの大きな中国人の市場は、昔ほどではないとはいえ、まだ重要性と活気を保っている。周辺では河を大湖に結びつける支流の岸の上で、タバコや野菜などが栽培されている。コムポン・ルオンはトンレ・サープの岸の上の、長さ15キロほどの狭い带状地からなるポニエ・ルーの小地方の一部である。

コムポン・ルオンのパゴダと王太后のパゴダは、カンボジアで最も豊かだといわれている。クメール芸術の頹廢を良く理解するためには、アンコールから戻ってからこれらを訪問するのがよい。

ポニエ・ルーはコムポン・ルオンの少し南、同じく河岸にある。そこにはもはや、何軒かのカンボジア人の小屋しか残っていない。そこに住んでいたカトリック教徒たちは大半がポルトガル人の子孫か、アンナム人であったが、プノム・ペンに移り住んでしまった。

ウドン周辺では、多くの貝が見つかる。特に *Paludina fischeriana* は、この場所より下ではまだ見つかっていない。*Bulimus annamiticus* はかなり広く分布している。同じく、今まで踏破してきた、湾に直接下る水系の流域では生息していない、いくつかの他の種がある。

遠くからは見えにくいだが、西方、2日ほどかかる距離に、もやの立ちこめた一群の山々が見えている。これはソムラオン・トン地方に属する。数百メートルに達する両端の峰は、次のような名前である。南がプノム・アウラル、北がプノム・チュルウ。

第1章で、プノム・アウラルから同名のストウンが流れ出し、プレーク・トナオトの最初の水源となることを見た。

ウドンを出てストウン・クラン・ポンレイを渡る。プノム・チュルウを発し、直接に湖の支流に向かう川である。

この2つの河川の間には他の川は流れておらず、プレーク・トナオトの流域の境界はプノム・アウラルからプノム・ロヴィエに向かい、そこからこのプレークの合流点に向かう線で示されている。この境界とストウン・チュルウの間に挟み込まれた平原の水は、プノム・ペン近くのコック、プーム・ペイ等、湖の支流と連絡する広大な池に流れ込むか、乾季にはかるうじて痕跡が見えるだけの小川を通過して河に流れ込む。

プレーク・トナオトに関してはこれが最後で、これ以後触れることはない。

他の2つの水源、ストウン・ルレイ・カーン・チューンとダチ・プダオが、同じ名前の山々から発している。位置はストウン・ルレイ・カーン・チューンがトポン地方にあり、ダチ・プダオはコムボン・サオム地方にある。

ダチ・プダオは明らかに、先に出会ったストウン・セノックの水源のプノム・ダチ・プダオそのものである。ストウン・セノックはルン・スヴァイとともにコムボン・ルンに向かって流れ、プレーク・タップ・チェアンを形成する。

一方プノム・ルレイ・カーン・チューンは、アウラルやダチ・プダオよりもさらに西の未知の地方にあり、この2地点を結びつけていると想定される。

この地ではアウラルとチュルウの峰以外の山々の群全体もチュルウという名で呼んでおり、その中央にはトスティエクと呼ばれる第3の峰がある。そこはじつに不思議で、絵画的な地として語られている。そこにはどこよりも多くのネアク・ター（精霊）たちがいる。その自然は比類ない美しさを持っている。

「小さな山脈の、互いに近接した両端の峰は」、彼らは言う、「円形劇場の半弧のように

なっていて、あまり高くない高原は驚くほど肥沃で、一部分、混血の中国人たちが耕作しています。プランテーションの土地は大半がベテル畑で、乾季の間でも水を撒く必要がないほど湿っています。」

その土壌は不衛生だといわれている。ゆえに現地人たちは、そこに行くことをためらう。チャンすなわち現地人の言葉で森林熱の他にも、非衛生的な地域で罹る様々な病気、ネアク・ターたちの不満が引き起こすという病気がそこでは猛威を振るい、彼らに恐怖心を抱かせるのである。

ノロドム王はこれらの山麓に別荘が、彼の考えた庭のあるのが良かろうと思いついた。この幅の広い道は、王太后の宮殿から森を真っ直ぐ横切って遠くで見えなくなり、王が将来の別荘の場所を選びに行けるようにしている。

通りすがりに、アジアの君主とカンボジアの廷臣たちが、筆舌に尽くしがたい無秩序が奇抜さを増している東洋の服装で、小旅行から帰ってくるところに出くわすことは、まさに幸運である。

200 頭のゾウが金色あるいは黒に塗られた古い形の椅子を揺らしながら、緋色のカーテンをつけた竹の屋根の下に王と王子たちを運び、ハーレムの女たちと肩掛けを掛けた半裸の踊り子たちを積んで敗走しているかのように過ぎ、車と歩行者が騎手たちとともに濛々とした砂塵の中に消えてゆくのは、忘れがたい夢幻境の絵であるかのような印象を残す。

5. ウドンからポーサットへ

ウドンとポーサットの間地には、数多くの河川が縦横に走っている。それらは商業的な観点からは何の重要性も持たず、乾季には航行できない。雨季になると遡行可能になるが、流路のほんのわずかな部分しか使えない。

現地人たちから流路に関する情報を得ることは容易ではない。彼らが知っているのは、それらが陸路での連絡の障害となっているときぐらいである。さらには、川沿いの様々な場所ではばばらに命名する習慣のため、呼称に混乱があり、通りすがりに真実を調査するのは困難なのである。

それらの水源は通常「ポーサットの山」と呼ばれる山塊の中にある。この山は支脈をコムポン・チナンやポーサットの方に延ばしている。カンボジア人たちはそれらを「ポーサットの山」という呼称で認識しているわけではなく、それぞれの山群に、後に列挙するような名を与えている。

この群の最初の部分には、すでに触れたプノム・チュルウが含まれている。この地域の山系のいわば核は、クチョールという。クチョールはより北西のプノム・ホム・クラヴァン（カルダモン）と結びついて、プレーク・トナオトの流域とストウン・ポーサットの流域を隔てている。この2つの川の水源は非常に近接している。この山には4つの頂がある。アウラル、チュルウ、チェソックとトスティエクである。最も高いところで700～800メートル以上ある。

東に連続して延びているそれほど重要ではない山々は、次のような名前である。ピエム・ルーク、デイ・クロホーム（赤土）、クローク、アーン（大壺）、クラン・ロミエス、ダムレイ・ロミエル（ゾウの墜落）、シウプウ（本）、ナム・カー、ティエプ（低い）等々。

北へ、ポーサットの方角へ延びているものは、プノム・クドル（木の名）、プノム・サンカット・プレーク、プノム・トック・チュレイ、プノム・ヨーク、プノム・コムレン、プノム・スラン、プノム・プノー（墓）、プノム・スバエク・クラー（皮、トラ）等々

100メートルはあろうピエム・ルーク以外の山々は、あまり高くない。最も高いものでも、百メートルを越えることはほとんどない。

プレーク・トナオトとプレーク・ポーサットの水源である他に、プノム・クチョールは、以下のようなストウンを産んでいる。

クラン・ポンレイ。この川はウドンを通る。

チュレイ・バック。その河口がコムボン・チナンである。

バボー。古都バボーの近くを通るため、そう名付けられている。

そして、トリエ・ムオーム。

（バボーとトリエ・ムオームは、ストウン・コムボン・ロカーの支流であろう。）

ピエム・ルークやデイ・クロホームなどを発する急流は、ストウン・チュラープ・アン・カムを形成する。

プノム・コムレンからは、ストウン・アンコンとストウン・アンロン・トナオトが流れ出る。

これらの河川は、直接にトンレ・サーブ（湖の支流と大湖）に向かう。他にも平行して多数の、それほど重要でない河川がある。多くの支流があるため、雨季にこの地を横切って旅をすることはより困難である。

かつてはいくつもの街道がウドンからポーサットに通じていた。河や湖上は比較的安全であるので、少しずつ河路が好まれるようになり、街道はあまり使われなくなっていった。

今日では1本だけにドムナック（休息の家）があり、きちんと組織された宿駅がある。

この街道はプラウ・ルオン（王道）という名を持っており、この国の中で最も人口の多い部分、トンレ・サープの支流および同名の湖に沿って、ずっと氾濫限界の外側を走っている。

道を等分している12の宿駅を、ゾウか牛車で踏破するのに6日間かかる。宿駅は皆、村の中にはない。駅を選択に際しては何よりも旅人用の水が乾季でも保証されるよう、池か川のそばであることに留意したようである。雨季の通行には多少とも長い停止が必要となる可能性がある。

以下が宿駅の名である。ブン・リエト、ブン・ポー（菩提樹の沼）、ブン・ディエプ、チュレイ・バック（折れたイチジク）、ストウン・チュラーブ・アン・カム、バポー、ブン・クナー、ストウン・アンコン、ストウン・アンロン・トナオト（川、淵、砂糖ヤシ）、ストウン・トリエ・ムオーム、ストウン・スラン・トム、ポーサット。

王道はまたプラウ・クラオム（低いところの道）という名でも知られており、もう1本のプラウ・ルー（高いところの道）と名付けられた街道と対照をなしている。この街道は山々の向こう側を通っており、長期間にわたって手入れされ続け、低い道と競合していた。低い道よりも短く、4日で踏破できる。とりわけゾウの旅人がよく通っていた。今でもたまたま通る人がいるが、もはや何の手入れもなされていない。休息の家は完全に消え去っている。

アンナム人たちがこの地を占領している間に通した第3の道は、今日では完全に忘れ去られている。この街道はプラウ・ユオンと呼ばれ、時にはプラウ・カンダール（アンナム人の道、中の道）と呼ばれていた。この道はウドンからポーサットへ可能な限りまっすぐに進み、山々の群の間を通っており、かなり近接したトラムの家を持っていた。他の道よりも有利な点は、全線にわたって、どんなに小さな河川であっても全て頑丈な木の橋が架けられていたことである。カンボジア人はこの道を放棄した理由の1つとして、そこではしばしばチャン（森林熱など）にかかるからだと言っている。

ゾウで旅する者たちは、どの道をとっても構わない。良い案内人がいれば、旅程をあまり延ばすこともなく、それぞれの道の一部分を通りながらポーサットに行くことも可能である。この最後の行き方をとると、先に数え上げた山々の近くを通って、この地に関するより正確な理解が得られる。この地では、後ろに残された大きな領域よりも小さな、ロヴェーク、ロリエプ・イエ、バポー、クランとクラコーの5つの地方が、ほぼ平行する帯状

の区画を分け合っている。

カンボジアではウドンの古い砦の西にあるワット・ポー（菩提樹のパゴダ）の近辺ほど、快い景色は滅多にない。その光景は最後には一目見ずにはいられないものであり、充分それに値する。1月に花が咲いているサボテンと偽火炎樹の生け垣の後ろに、カンボジア人の品のよい小屋が半ば隠れており、ゆったりとした雰囲気がある。農地に沿って走る、日陰になった道は、コムボン・ルオンに運ぶ靱か、田植えのための遅い稲を一杯に積んだ荷車で混み合っている。最初の収穫が終わり、2番目の収穫が準備されている。いたる所、牛や水牛の群が、この一角に並々ならぬ活気を与えている。それは平原のこの部分に王太后の官人たちが住んでいるためであると、案内人は説明した。

ストウン・クラン・ポンレイは幅15メートルである。ウドンの最後の小屋を過ぎると、この川を渡る。河口のすぐ近くであるのに、その水の流れは急流の雰囲気を持っている。その澄んだ水はほとんど土手のない川床の砂の中を流れているので、船は氾濫の時にしか遡ることができない。この川は水源の山の名前からストウン・チュルウとも呼ばれ、プレーク・コムボン・チュヴィエ（マレー人の岸）とも呼ばれている。合流点の近くに、マレー人の集落が1つあるためである。合流点はピエム・チョムニーク（掘った河口）と呼ばれる。

低い道の最初の2宿駅を通過するまでに、わずか4時間しかかからない。道の3分の1のところで、オー・ポマートとオー・ブン・リエトが現れる。乾季には水のない大きな小川で、雨季になると平原の水を河に運ぶ。オー・ブン・リエトとその湿地状の両岸を渡るにはまだ、幅50~60センチの歩道の残骸の上を通るという危険を冒さなければならないかもしれない。

旅程の最後はある風変わりな特質を秘めた地に行く。その耕地には、チューク・ソー（白蓮）と呼ばれる大きなチャーム人の村に属するマレー人の小屋が散らばっている。

25年前は獣しか訪れないような森が、この地を覆っていた。1858年のチャームの反乱が鎮まった後、多くの家族がポーサットの近隣に移り住むよう命じられ、特別のはからいとしてこの森を開墾し、この地に住むよう言い渡された。

当時このムスリムの小入植地はひどく困窮していたが、今日では彼らが耕している素晴らしい水田の平原、道沿いで草をはんでいる牛や馬の群が、その繁栄ぶりを示している。まだ利用できるほどには成長していない多数の砂糖ヤシから、入植地の年齢が分かる。

ブン・ポー（菩提樹の沼）は休息地であり、チューク・ソーと森を隔てる広い沼である。

晴天の多い季節になると、ほぼ完全に干上がってしまう。そうするとチャーム人たちは、沼を遅い稲で覆い尽くす。

その後、道はほとんどまっすぐに森の中を進む。幅は 12 メートルほどである。毎年やぶを払うくらいしか行われていない。時々、距離を示す古い標石が見られる。

次の宿駅に着く少し前に、オー・クバル・クマオチ（死者の頭の小川）を渡る。ここには近隣の沼の水が流れている。この小川は街道の近くで昔の墓地を横切っており、現地人の言うところでは、それが名前の由来となったという。

ブン・ディエプの宿駅はもう 1 つの大きな沼の端にあり、先の宿駅から 2 時間である。ここを発つと、ロヴェークの小地方を離れる。ロヴェークは東が河、南がソムラオン・トン地方、北がロリエプ・イエ地方、東から西にかけて、ソムラオン・トン地方とロリエプ・イエ地方に接している。この地方はカンボジアの昔の首都の 1 つの名前を冠しているが、それは河から少し離れた小集落で、昔をしのぶ縁は土城壁の遺構しか残っていない。

ブン・ディエプの少し先、右手に、プノム・ティエプ（低い山）、プノム・ダム・ピアがある。孤立した小さな峰で、ほとんど不毛で、石の塊が地面に散らばっている。その後、プレイ・クマエ（カンボジア人の森）の大きな村が現れる。この村の水田から街道を離れて、やはり大きなバン・チュコールの村に向かうことができる。

この 2 地点の間をストウン・チュレイ・バック（折れたイチジク）が流れている。この川のここでの名前は、より西にある村の名前に由来する。その村に 4 つめの宿駅がある。すでに見たようにこの川は、プノム・クチョールを発してコムボン・チナンに向かう。後にこの川に再び出会うときには、ストウン・キエプそしてオー・クロークという名前になっている。幅は 15 メートルほどで、ウドンのストウン・クラン・ポンレイと同じような様相である。従って水位が高いときにしか、船舶では近づけない。

バン・チョールは北を山脈に区切られた、大きな平原の真ん中にある。この山脈にはクラン・ロミエスとダムレイ・ロミエル（ゾウの墜落）の峰が含まれている。これらの山々は、コムボン・チナンから遠くないところで終わる。コムボン・チナンはロリエプ・イエ地方の主要なセンターであり、河の畔、湖の入口近くに位置する。

この平原には数多くの集落がある。住民たちは多くの米を生産する他に、コムボン・チナンと呼ばれる焼き物を制作する特技を持っている。この産業を生業としている村は、遠くからでも巨大な藁塚でその場所が分かる。それらの名は次の通りである。トローク、クレイ（木の名）、パリエム、クラン・ロミエス、クデイ・トナオト、クサム、コーク・バン

ティエイ、バン・チュコール、クレン・アク、チュレイ・バック、プレイ・パリエム、バンティエイ・シエム（シャム人の砦）。

この地の陶工たちのやり方は極めて原始的なものである。甕は手で作り、轆轤を用いない。以下のようなやり方で焼きあげる。1 ピエの厚さの薪束の床の上に、あらかじめ日に干しておいた甕を、口を下にして置く。木の燃焼が進み、炎が消えると、全てを厚い藁の層で覆う。この藁もすぐに燃えつきるが、かぶさった灰が十分な熱を保ち、あまり早く冷めすぎないようにする。

コムポン・チナン（鍋の岸）は、この焼き物に由来する名である。焼き物の集散所であり、それらを巧みに積み込んだ巨大な船が、カンボジアだけではなく、コーチシナの各地に輸送している。ヴィエル・ポック（泥の平原）の入口のすぐ近くにあるので、村の一部は、湖の支流との連絡が容易な池の上の、竹の筏の上に建てられた小屋から構成されている。極めて重要な村であり、日々拡大している。乾季の間には蒸気船のひき船がほぼ毎日、プノム・ペンとこの地点の間を結んでおり、大湖でとった魚を積んだ多数のジャンクを引っ張っていく。

ここで低い道を離れてまっすぐ西に向かうと、デイ・クロホーム（赤土）の山々の麓に着く。それまでの2日間は貧しく、ほとんど木が生えておらず、かろうじて自給できるくらいの水田に囲まれた、ほとんど住民がいないような集落があちこちにある地を歩く。

クラン・ロミエスとダムレイ・ロミエルの峰は遠くからは半ば裸に見えるが、現地人たちによると、そこに生えている木は数が少なく、田舎に散らばっているような価値のない種類に属している。最初の日の終わり頃に見えるプノム・アーンも同様である。通り過ぎてきた集落のいくつか、特にチエプ、タン・プロチ、クラン・クロークは、ロヴェーク地方の一部である。しかしこの地方に入ったと思うとすぐに、ロリエプ・イエの土地に戻ってくる。この村々のカンボジア人たちは、この地ではありふれているプチェック（Shorea?）という木から、かなり大量の樹脂を採集する。小屋のそれぞれにはこの樹脂が数ピクルずつ蓄えられており、中国人行商人が日用品を交換に持ってやってくるのを待っている。

道は最初、ストウン・チュレイ・バックの左岸に、距離を隔てて沿っていく。チエプ集落の領域の中で右岸に渡る。ストウンの名の由来となった集落である。そして山の麓に着く前、タン・プロチで西から北に向きを変え、次々とストウン・タン・プロチ、ストウン・クラン・クローク、オー・バック・チェアン、オー・バック・ドムを渡る。これらはクチャールの山々から来て、現地の人々の言うところによると1つにまとまって、チエプの少し

手前でストウン・チュレイ・バックそのものを形成する。オー・バック・チェアンとオー・バック・ドムは1つの同じ急流、すなわちコムポン・チョムと呼ばれ、源から遠くないところで2つに分かれているものから分流したものであろう。

2日目の夜はデイ・クロホームの丘の麓で、それを左手に見て休息した。その後ろにはプノム・ピエム・ルークがそびえている。この季節にはほとんど干上がった多くの小川が、この2群の丘から発している。これらが合体して、おそらくヴィエル・ポック（泥の平原）の方に流れるストウンを形成する。このストウンは王道（プラウ・ルオン）を断ち切るところではチュラーブ・アン・カムという名で、その岸にこの道の5つめの宿駅がある。小川の名はオー・デイ・クロホーム、オー・トラウ、オー・ポンとオー・ヴァイである。

これらの山々の横腹の地は裸で、低く、湿っていて、雨季にはしばしば浸水し、広大な沼が形成される。全くの無人の地で、クラン・クロークを離れて以来、1軒の小屋も現れない。小屋を見るまでにはもう丸1日歩かねばならない。野生の牛が群れをなして、旅人の前を大急ぎで逃げていく。山々は豊かな植物に覆われて、野獣のすみかとなっている。夜には野生ゾウの叫び声が響きわたり、ゾウ使いたちはおびえた自分たちの動物の側で見張りをしなくてはならない。

アンナム人の道はデイ・クロホームの東側を通っていた。案内人はそれを知っていたが、その跡を示すことができなかった。その父親であるかつてのクラン・クロークのメー・スロック（村長）があまりにも老いていて、道中ができなかったのは何とも残念なことであった。

この老人は思い出話を聞いてもらえることに満足し、質問を受けて次から次へと語ってくれた。

「高い道（プラウ・ルー）は」、彼は語った、「デイ・クロホームの西にあった。高名なシャムの将軍チャウ・クンが、ムサン年（辰年〈正しくは巳年〉）、1833年に、張明講が指揮するアンナム軍に押し戻され、追撃されたときにこの道を通った。彼は大急ぎで、ポーサット経由でバット・ドムボーンに撤退したが、そのときにこの地はすっかり荒廃させられてしまった。彼の一派がいなくなったのは、カンボジアにとってはよいことだった。彼らはクメールの田野に極限までの悲惨さを強いていたからだ。

すると山々から森から、哀れな、青白くやつれ、飢えた者たちが出てきた。彼らは自分たちの集落が在った場所を目指してきたが、その大半は破壊されていた。

逃げ遅れた者たちは皆捕らえられ、タイ王国の寂しい場所に住まわせるために、捕虜と

して連れて行かれた。森の中に隠れている間、あるいは流刑地に歩いていく間に、信じられないくらいの数の人が死んだ。

若い娘たちは家族から奪い去られ、侵略軍の兵に渡された。不満を表に出した者は不幸だった。シャムの人々はカンボジア女性の生命を全く考慮しなかった。

その上この地方では、彼らの戦争のやり方にどう対処すべきか心得ていた。侵略の噂が広がるや否や、大勢がパゴダに逃げて僧侶になり、急いで娘たちを結婚させ、村々では一団となって、集めることができただけの食糧を持ち、山々を目指した。そこならば、シャム人たちがわざわざ追って来ることはないと分かっていたからだ。

彼らは大きな道からやって来て、あらゆる方向に分遣隊を放って集落を急襲した。1つならず、逃亡者たちの群が彼らの手に落ちた。逃亡者たちもいつも震えていただけではなかった。時に絶望に駆られたカンボジア人たちがほとんど徒手空拳で、敵に血なまぐさい一撃をお見舞いすることもあった。

チャウ・クンが去って長く経った後でも、高い道沿いには、荷車などの残骸、牛やゾウ、そして人間の骸骨までもが点々と残っていた。

シャム人たちが去ると、今度はアンナム人たちを相手にすることになった。その兵たちは幸いなことに、バンコクの兵とは全く違っていた。彼らの軍隊には規律があった。人々は彼らを避けることはなかった。彼らの髪飾りの鶏の羽や赤い衣装が目に入ると、食糧を背負った女性たちがあちこちから出てきて、一種の臨時市場が宿営地に現れた。もちろん何件かの窃盗もあったが、指揮者たちは不満を聞いてくれた。

彼らの権威はカンボジアの中で大きくなった。それがアン・チャン治世の終わりの頃だった。アンナム人の道はすでに作られていて、大勢の賦役が時々、道の手入れや、数多くの橋の架け直しや補修のために招集された。カンボジア人たちはドイやカイ（アンナム人の下級官人）の指揮の下で働き、彼らをオン・ドイとかオン・カイとか呼んだ。彼らは病气や、米を手に入れるために帰宅する許可を、容易には与えなかった。

より高位の役人たちは、時々ゾウで、そしてもっと頻繁に駕籠で、位階を示す傘をさして工事現場を訪れた。この官人たちは長い絹のローブを着て、先端の尖った大きな帽子をかぶり、タバコやベテルが入った小さな巾着袋をそれぞれ肩から下げて、手短かに部下と話をし、カンボジア人たちには全く関心を払わなかった。カンボジア人たちは彼らをひどく嫌っていた。

アン・メイ女王がアン・チャンの後を継いだ。アンナム人たちは彼女に玉雲という名を

与え、現地の官人たちにアンナムのタイトルを与えた。彼らはといえば、自分たち自身に対しても、同じような意味のカンボジア語ではなく、オン（旦那様）という呼称を用いることを望んでいた。間もなくアンナムの役人たちが地方知事たちの側に配置された。兵たちの小分遣隊がこの地を行ったり来たりした。人々はあまり苦しんではいなかったが、屈従させられていた。大勢のカンボジア人官人たちは不満だったので、シャム人たちが同じ指揮者に率いられて、アン・メイを王位から下ろし、アン・ドゥオンと交代させるためにやって来たとき（1841年）、シャム側に加担し、シャムが悪習を取り戻してバット・ドムボーンに大量の捕虜を連れて行くのを防ごうとはしなかった。平和になる前の4年間の生活は困難だった。恐れながら、ある時は一方に、またある時は他方に従わなければならなかった。一度ならず、かつて隠れがとした山中への道を再び逃げなくてはならないことさえあった。

この最後の戦争以来、アンナム人の道は手入れされなくなった。」と、老いたメー・スロックは話を結んだ。

デイ・クロホームの湿地の平原から、厚い森の陰に入る。丘々は一瞬見えなくなったが、やがて後ろに現れた。ここに生えている木はすでに指摘したものばかりである。とりわけプチェック、トバエン、ティエル・クローン、ソークロム、チュレイなどがある。カサン(?)と呼ばれている棘のある木が非常に多く、その酸っぱい実が現地人に好まれている。

森はやがて明るくなり、土地は砂質になり、植物はほとんどなくなる。小道の左右、何百メートルかごとに、平原にも散らばっている巨大な礫岩のブロックに覆われた一連の不毛な小さな頂が、デイ・クロホームから続いて北方に延びている。これらはプノム・クドル（この地域にはかなり豊富にある木の名）(nanclea?)とプノム・サンカット・プレークで、平均の高さが40~60メートル、ストウン・チニエによってプノム・トック・チュレイから切り離されている。プノム・トック・チュレイとは同じ方向にある、様相も規模も似た別の丘々である。

この河川は、ウドン以来出会ったなかで最も重要なものである。その兩岸はほとんど切り立っていて、ここでは15ピエの高さがある。幅は15メートルである。1月末には30~40センチの透明な水の層が、まだ速く砂底の上を流れていた。巨大な枯れ木が川床のあちこちに投げ出されていて、水位が高いときでも航行を困難にしていた。

それはプノム・クチョールを発してヴィエル・ポックに向かい、ストウン・プサー・バポー（バポーの市場の川）という名になる。現地人の言うところによるとそれは、ストウ

ン・コムボン・ロカーの1つの支流と合流した後のことである。この支流は水源を同じくしており、先で再び出会うことになる。ストウン・プサー・バボアの両岸に昔のバボアの町、低い道（プラウ・クラオム）の6番目の宿駅がある。ここはかつてカンボジアの首都であったが、現在では意味のない村で、この地ではプサー・バボア（バボアの市場）の名で知られている。

プノム・トック・チュレイの上とその周辺では、植物は貧弱である。山々の近くを沿ってストウン・チニエに向かう小川、オー・トック・チュレイの岸では、土地は湿地で、イグサに覆われている。ティエン・プレイまでの地は、何本かの木と多くの竹が生えた無人地で、先のものと同じ方向に3本の小川が走っている。雨季にはしばしば浸水し、一群の小さな沼を形成しているが、水はあまりよどんではない。

この寂しい場所を通る時、非常に奇妙なやり方で武装したカンボジア人の小さな1隊に出会うことも珍しくない。彼らは盗まれた馬、水牛あるいは牛を探索するための正規の書類を持って自分たちの村を出、たいていは何日も歩き回ったあげく、近隣の村々に警告した以外の成果もなく戻ってくることになる。槍と弩、せいぜい火打ち石銃では盗人を威圧することもできないので、田舎の人々は常に自分たちの獣を見張っていなければならない。

ティエン・プレイ（森のロウソク）はクラン地方の中にあり、4～5家族の集落にすぎない。その小屋は水田の真ん中のヤシの木の下に集まっており、幸福そうな雰囲気である。続いて出会うのはプーム・チェン（中国人の村）という名である。この村は水田の中に孤立する何軒かの小屋から形成されており、カンボジア人が住んでいる。コークの木が生えた丘々を左手に残し、ストウン・コムボン・ロカーを渡って1時間半で到着する。プーム・チェンからは、互いにわずかな距離を隔てたプノム・コムレンとプノム・スランの2山脈が北方に見える。

ストウン・コムボン・ロカー（綿の木の岸）は、先に見た急流とは違う。幅10メートル、深さ5～6ピエで、土手はなく、一年のこの時期でも岸いっぱいには流れている。土地は粘土質で、この川がしばしば浸水させているに違いない。

ここでその流路について集めた情報を述べよう。クチャールの中のプノム・キエソックを出て、同じ名前の山の麓にあるコムレンという名の集落の近くで2つの支流に分かれる。1つは先に出てきたストウン・チニエと合流し、ストウン・プサー・バボアを形成する。もう1つはプノム・コムレンとスラン山脈の間の空隙を流れ、ストウン・アンロン・コーキーが合流した後、ストウン・トリエ・ムオーム（ムオームの道）となる。その岸に低い

道の10番目の宿駅がある。先の2つの宿駅はいずれもプノム・コムレンの北斜面を水源とする、ストウン・アンコンとストウン・アンロン・トナオトの岸にある。(ムオームは水田の中にたくさん生えている小さな植物の名で、現地人たちはその葉を料理の香り付けに使う。)

2つの集落の間、特にストウン・コムポン・ロカー沿いの植物は立派である。クルール(Augia?)、クノーン(Dipterocarpus?)、その他以前に挙げた種類の木が数多くある他に、クルオンと呼ばれる小型の木がたくさんある。その木材は軽く丈夫で、通常ゾウの椅子の制作に使われる。小屋の柱にするプリー、ローなども広く分布している。

プーム・チェンの水田から先は、土壌は砂質になり、裸になる。東西に延びるプノム・コムレンが少し近づいてくるが、その西端を越えるとオー・ポトロハイが現れる。幅7~8メートル、深さ1メートルで西方に流れる。ストウン・コムポン・ロカーの3番目の支流であろうが、ストウン・カン・プリエムに合流するらしい。道はやがてこの川によって断ち切られることになる。

この道は高い道(プラウ・ルー)である。長く寂しいところを走り、右手のプノム・スランからは数百メートルの距離を保っている。この丘々から出る一群の小川が横切り、ストウン・カン・プリエムに向かう。

コムレンの高度はおそらく百メートルを越える。スランは確実にこの数字には届かない。アンナム人の道はこれらの反対の斜面に沿っていく。

スラン山脈の中程手前で案内人は、道の左手にバナナの木が厚く生い茂り、その上に羽根飾りのようなココヤシや砂糖ヤシの梢が数多く突き出しているのを示した。

「あそこが」、彼は言った、「大きなスランの村があったところです。ムサン年のある夜、シャム人たちの急襲を受けて、住民たちは全員、捕虜として連行されてしまったのです。それ以来周囲の美しい水田は耕されないままで、小屋に陰を作ってやっていた木々の果物は、森の猿たちの餌となっているのです。」

スランの高さがそろった峰々を過ぎ、その麓に広がる湿地の平原を覆う高い草から抜け出ると、ストウン・カン・プリエムが道を断ち切っている。この川は案内人によると、2つの主な小川から形成されている。ストウン・カン・プリエムの名を冠したものと、ストウン・コムポン・ロカーの支流で、先に渡ったところではオー・ポトロハイの名であったものである。この川は西から来て、左手の森に隠れているプノー(墓)と呼ばれる一群の丘の麓を流れている。幅は20メートルで、1ピエの水が流れており、土手は2~3メートル

ルの高さで、多くの木々が川床に投げ出されている。

この急流の流路に関する情報は、ストウン・コムボン・ロカーに関する情報とともに道中集めたもので、現地人たちの言のみを根拠としている。彼らは不完全にしか知らないし、全く不確実なので、確かめてみる必要がある。話に出てくる名前が変化するために、混同してしまうことが最も懸念されるのである。

このストウンはおそらくストウン・スラン・トムに他ならない。その岸の上に低い道の最後のトラムがある。プノム・スランの続きからはほとんど離れていない。この山々は、スバエク・クラー（皮、トラ）と名付けられた一群で終わる。少し北に遡ったこの最後の峰々の正面、左岸に、重要な村落であるトタン・トンガイがある。雨季にはここまで船舶が遡る。この村の小屋は、巨大な水田の平原に散らばった数多くの集落に分かれている。この地の人々は漁期までヤシ砂糖を作り、米と一緒に荷車でコムボン・ブラック（銀の岸）まで運ぶ。この村は毎年天候の良い季節の間、カン・プリエムの入口に形成される。そのためカン・プリエムはコムボン・ブラックと呼ばれるようになったのである。

トタン・トンガイはクラコー地方に属し、プーム・チェンからは1日、ポーサットからは3時間である。この2地点の間を流れ下る唯一の河川がストウン・リエトで、プノム・ラン・クヴァオから来て、コムボン・カッサンでストウン・ポーサットに注ぐ。幅は10～15メートルで、ほとんど乾いており、トタン・トンガイからは1キロと離れていない。

ポーサットに達するまでに踏査すべき地は、想像をはるかに超えて寂しい。土地はほとんど常に砂質か不毛で、やぶ、竹、いくらかの貧弱な木しかない。所々巨大な平原が、わずかに草に覆われている。

ポーサットは1516年に、バサンに君臨する叛徒を鎮圧したかのアン・チャン王によって建てられ、1528年までカンボジア政府の所在地であった。ポーサットを通る主要幹線をやってくるシャム人たちによって、何度も荒廃させられた。1841年にチャウ・クン軍の侵攻を受けたアンナム人の小駐屯部隊が放棄した砦の痕跡が、今でも何とかそこに残っている。

ポーサットはほとんど無人で巨大な地方の主要なセンターで主邑であり、同名のストウンの両岸に並ぶ百軒ほどの小屋からなる。公式な書類にはポーティサットとつづる。その位置ゆえに生ずる政治的な重要性しかなく、市場を持たない。何人かの中国人が季節になるとやって来て、いずれ語ることになるが、クラヴァン山で採集されたカルダモンと川の左岸の巨大な平原で収穫された米の取引をする。この平原には視界の限り遠くまで、小さ

な集落が散らばっている、

一年の最初の月には、この平原が非常に活気づく。荷車が縦横に行き交い、米や食料をコムボン・ブラックに運ぶ。インド人、中国人の行商人たちが荷物を運ぶクーリーたちを連れて、集落から集落へと商品を交換していく。水牛、牛、馬、12頭ほどのゾウの群が、農地で自由に草をはんでいる。

ポーサット地方はシャム王国の境界である。その知事は他の地方の知事たちよりも位の高い役人で、オクニャ・スオキエロークというタイトルを持っている。

ストウン・ポーサットには2つの主な水源がある。第1はプノム・クチョールの中に、第2はプノム・クラヴァンの中にある。ストウン・アウラルとストウン・ロローク・カーン・チューンの水源に近い。この2河川は、プノム・ペンの下流11キロで後江に合流するプレーク・トナオトを形成する。

ストウン・ポーサットはトンレ・サープの方に流れ、小湖と大湖を隔てる部分に注ぐ。ここをカンボジア人はチューン・クラーク・チュローン（トラの通路）と呼んでいる。水位が低い時期に、この動物がその部分を渡るといわれているためである。

レアールチ、パストウン、トラデーウヴェチと呼ばれる3つの河口がある。トラデーウヴェチという名前は、この近くでは大変に一般的なタゲリに由来する。現地人の言うところではこの鳥たちは、天に押しつぶされないように脚を空中にあげて眠るとのことである。

ポーサットでは川幅は60～70メートルである。乾季でも3～4メートルの高さの土手の間に、1ピエの澄んだ水の面が砂の上をゆっくりと流れ下っている。雨季には岸一杯に流れ、大変に大きなジャンクでも遡ることができる。

ポーサットはトンレ・サープの氾濫限界の外にあるが、ストウンの氾濫を連続して被る。それはしばしば数ピエに達して、ちょうどよい時期に田植えをするのを妨げて、収穫を危険にさらすことがある。そのような時、小屋が浮かぶ浸水した平原の上を、多くの小船が縦横に行き交う。

2～3家族のアンナム人が川の右岸に住んでいる。華奢な少女がその最初の家にもたれていたが、旅人を見るとさっと家に入った。1人の老人が大きく扉を開いて、熱心に、旅人に座るよう懇願した。

アンナム人が国外で出会ったフランス人に向ける心遣いに満ちたもてなしには、それが時に打算的で義務的なものであっても、やはりうれしくなってしまう。

若い娘は小さな双子をからかいに行ったのであった。母親は大変哀しそうに、彼らを腕

の中に抱いていた。彼女は15歳にしては貧相だが、その顔立ちの申し分のない輪郭は成熟した女性のものであり、視線をひきつけた。

「昨日」、茶とタバコを運んできた父親が言った、「1人の官人がやって来て、このように告げたのです。『カンボジアの法律では、双子に生まれた子供は全て王の奴隷となる。それから逃れようと考えてはならない。』」

私たちはこの法律を知っており、ただ1人の人物、オクニャ・スレス・ピ・プネットというタイトルを持つ長がその執行を監視しているのを熟知しているので、シャムの地方へ行く準備をしていたのです。そこでは反対に、政府が扶養する家族のある者に救いの手を差し伸べてくれます。

官人の訪問でびっくりしたことと言えば、その男はこう言い継いだのです。『法律によれば、それぞれの子どもを銀棒2本で買い戻すことが可能である。あなたが子どもたちを手放さないでいられるように、棒4本であなたの娘を買うことを申し出る。』そして彼は立ち去ったのです。」

6. ポーサットからバット・ドムボーンへ

カンボジア人たちはカルダモンが生えている山々を一くくりにして、プノム・クラヴァンと呼んでいる。この山々はポーサットの南西から始まり、大規模な山脈を形成して、西方、チャンタブンの方向に延びている。ポーサットの川の主な水源はそこにあり、ストウン・ドントレイやストウン・サンケーもそこで生まれている。延長線上にあるクチョールと同じような高さであるが、クラヴァンはポーサットからは遠すぎて見えず、歩いて4日近くかかる。クラヴァンと人が住んでいる地域の間には、一連の小さな山々の群があり、そのうち最も近いものは、晴天の日ならポーサットからはっきりと見える。

この山々の中で最も興味深いものは、プノム・トゥック・ポル（山、毒の入った水）という名である。そこではクラ・グム (Dalbergia) の木が豊富で、伐採されてはいるが、プノム・ペンあるいはコーチシナに発送するのに間に合うよう、大湖まで運ぶのが不便である。つまり水位が下がる前は、ストウン・ドントレイの水で平原が浸水しているために、水牛に荷を引かせることができない一方で、水位が低すぎるために筏も使えないからである。

トレセイの小さな山々はクラヴァンの南端にあり、クラヴァン山脈をプノム・クチョールおよびプノム・ロロク・カーン・チューンとつないでいるように見えるが、その中に

は美しい大理石があり、カンボジアではポーサットの大理石として知られている。

コンボン・ルオンはポーサット川をなすストウン・クチョールとストウン・クラヴァンの合流地点にある村で、バット・ドムボーンとチャンタブンの間に開発された宝石鉱山から来たビルマ人たちが、小さなセンターを形成し始めている。彼らはここから山へ向かい、話をもとに富を得ようと期待している。彼らの探査はまだ成果を上げていない。

山々と湖の間には3本の道が、ポーサットからバット・ドムボーンに通じている。これらは、ウドンからポーサットに向かう道と同じように名づけられている。すなわち高い道、中の道、低い道である。低い道は雨季の一時期には使えないが、それ以外の時期には最も賑わっている。これから問題となるのはこの道である。

通常この道を踏破するには4日かかる。正午と夕方の休憩所は以下の場所にある。コムプーン、トラメアク、スヴァイ・ドーン・カエウ、チョピエ、モーン、トゥオル・プロム、コムボン・プレアそしてバット・ドムボーンである。

8本の河川が道を断ち切っている。最も重要なのはストウン・ドントレイの2本の支流で、乾季の終わりでもなんとかわずかばかりの水を保っている。これらは渡河地点では、ストウン・スヴァイ・ドーン・カエウとストウン・ルセイと呼ばれている。その他はオー・プテア・クラ、オー・コムボン・クデイ、オー・チャーク、オー・サダ、オー・カンおよびオー・ムニと呼ばれている。先の2本はストウン・ドントレイの支流であり、後の4本はそれに続いて現れる。オー・チャークだけが、乾季の間は乾いている。

この行程では山には出会わない。最も近づくのは西方、テプデイ、コーイとバノンの丘々であり、3日目の終わりあたりに到達する。

ストウン・スヴァイ・ドーン・カエウはより下流では、ストウン・コムボン・ブラックと呼ばれており、現在のカンボジアとシャムの境界である。ここまでの地はポーサット地方に属している。そこから先はバット・ドムボーン地方で、1795年以来シャムに従属しているとはいえ、やはりカンボジアの地方である。

道程に広がっている田舎は心地よいと言うには程遠いが、独特な景観である。村々の近く以外は耕されておらず、貧弱な木々が散らばった長い疎林が現れ、巨大な高い草の平原に代わる。地平線まで本当の海が広がっているようで、案内人は木の茂みを探して目印にしている。毎年火を使って、道を裸にする。数少ない住民たちが植物の侵略に打ち勝つために用いる、唯一の手段である。その痕跡は、目標をはみ出して焼いてしまった所では、想像を超えて荒廃した雰囲気になっている。

ポーサットを発つとコムプーンを目指し、裸の水田を横切っていく。その中央にはバナナの木に囲まれた集落があつて、乾季の間は砂漠の中のオアシスのように見える。土地は半ば木が生えていたり、高い草が覆っていたりする。しばしば湿地があり、1月の終わりに、まだ所々湿り気がある。最も頻繁に目につく木々は、フタバガキ属(dipterocarpus)の様々な種類で、カンボジア人はティエル、クローン、トバエン、トラーチと呼んでいる。これらの種類とプチェックは、先に叙述した地と同様にここでも、最もありふれた木々である。もう1つよく見かけるもので、どのような方法でも利用されていないが、この地区の平原にはうじゃうじゃと生えているものがある。それはロヴィエン(アンナム語のラ・ニューエン <là-nghuen>)で、高さ4メートル、棘があり、その木材を燃やすとたえられないような臭いを出す。

コムプーンは30軒ほどの小屋の村で、ポーサットから3時間である。同じ距離を隔てて、粘土質の土壌の寂しい未耕地の中にトラメアクがある。

道沿いの植物をなぎ払うために現地人たちが数日前に放った火が、草ややぶを飲み込んでいた。焦げた木々の枝にはまだ乾いた葉がついており、時々そよ風が立つと、地面を覆う灰や黒い小枝が舞い上がっては顔に降りかかってくる。

道程の3分の2でオー・プテア・クラ(小川、トラの家)、同じくクナート・ロミエスとも呼ばれる川が、道を断ち切っている。これらは完全に乾いている。その岸の力強い植物は、黒くなった田野にくっきりと線を引いている。この小さな河川について案内人から得ることができた情報は、それがストウン・ポーサットの支流で直接湖に向かうということだけだった。この川はワット・ルオン(王のパゴダ)とチュルウの村を通る。

トラメアクはコムプーンほど大きくない。何本かのココナツの木が、小屋の屋根の上に突き出している。多くの小屋の中では、すでに語ったように、唇に塗るロウを作るソムラオン(sterculia)の実をいっぱい詰めた袋が、壁にもたせかけられている。それらはスバウと呼ばれる、一種の糞で作られている。スバウは通常小屋を覆うのに用いられ、周辺の耕されていない平原からたくさん取り出してくることができる。

コムポン・クデイの小川はその端に、同じ名前の集落の7~8軒の小屋が建っているが、すでに水がなくなっていた。粘土質の土壌の上、道沿いに点々と並んでいる沼の水もまた、間もなく消え去ろうとしていた。毎日水牛が泥だらけになり、涉禽類の群が最後に残った魚を求めてかき乱す、水とも泥ともつかぬようなもので、ゾウたちは飲む決心がつかず、腹を浸すだけで我慢していた。

一年のこの時期（2月）、この役立つ動物にとっては旅が困難になり始める。

現地政府が街道に無関心なところでは、ゾウが最も単純な交通手段である。ゾウたちは、いたるところで荷車の接近を阻んでいるような障害物のほとんどを乗り越えていくことができるのである。他の交通手段に比べて多くの利点があるが、とりわけ体高が高いおかげで、旅人は道の埃から護られ、踏査する土地を見渡すことができる。歩みが規則正しいので、距離を見積もるのにも大変に役立つ。

その荷鞍は、クメールの大遺跡の浅浮き彫りにも見られるような古風なやり方で作られているが、おそらくそれが最も都合の良い形なのであろう。どうしても必要ならば、その屋根の下には2人が座ることができる。屋根は籐か竹で作られたそこそこ洗練されたもので、閉じるためというよりは飾りとして、赤い布のカーテンがついている。

荷鞍、そして屋根は、トロバエク（グアヴァ）、クルオン、ダイ・クラ（トラの脚、*wrightia mollissima*）のような、軽くて彫刻しやすい木で作られている。技術を伝承している人々が注文を受けて、自分たちの村からやって来ては作るのである。とりわけ、コムボン・チナンの近くのクレ集落の住民たちが、この仕事に熟練しているとされている。

特に洗練された屋根もいくつかある。銀、螺鈿、象牙を用いて、他と比べようもないような好みで装飾された荷鞍もあれば、野暮ったく金が塗られたものなどもある・・・

人が座ったり寝そべったりする部分を、カンボジア人はベッド（クレ）と呼んでいる。彼らは猥褻な観念をゾウに当てはめてもおかしくはないと思っている。妻と一緒にこの動物に乗って旅をすると、夫はやがて夫婦間の問題を抱えることになるというのである。

ゾウたちは適度の休憩を取りながらだと、疲労しきることなく、1か月歩き続けることもできる。しかしながら乾季が進むと、より長い労働には弱くなる。その頃の熱暑、質の悪い水、そして餌がいつも充分というわけにはいかないために弱り、目に見えてやせていく。ときにはカンボジア人がチュルオツ（急流）と呼んでいる下痢にかかって、倒れてしまう。

出発のときに哀れな獣が前脚をつき、立ち上がる力すらないようなことがあれば、乱暴なゾウ使いは、自分が散々に虐待を加えたり、窮乏を堪え忍ばせたりしたせいで死んだことにされはしないかという考えに震えながら、神に祈ったり捧げものをしたりし、厚皮動物の前に穴を掘り、そこに足を差し込ませて立ちあがるのを手助けする。たいていは数日間の休憩で回復する。もしゾウが死ぬと、ゾウ使いは象牙と尾を取り、前者を王に、後者を持ち主にわたす。

ゾウ使いは現地の言葉でトラメアクと呼ばれており、ほぼ全員が奴隷で、一般的には世襲の奴隷である。この不幸な者たちは全く野獣のようで〈原語 brute〉で、最も哀れなクメール族の代表である。同じ姿形をした人間たちとはなく、自分たちが世話をしている獣たちと一緒に生活している。目に余る残虐さを持って獣たちを虐待し、当然の帰結として、時に獣を死に至らしめてしまうことがある。

昔はかなり多数の馴ゾウがカンボジアにいたが、シヤムとの戦争で数が減り、大いにバンコクに利することとなった。4年前には疫病で何百頭も死んだ。今日ゾウの数は以下のようにになっている。

王は71頭持っているが、うち30頭は年齢のために使える状態にない。二王は大層大がかりな狩をしてゾウを捕らえるのが好きで、40頭以上持っており、必要なときはそのうちの25頭が行列する。王太后あるいは王子たちに属するのは32頭である。大官人たちは百50頭を持っている。地方の知事たちおよび地方の人々が、290頭持っている。合計で583頭だが、うち半数は、何かことがあればかなり容易に集めることができ、重要な任務に就けることができる。

陸運の大臣、プロソー・ソーリヴォンに属する1官人が、最後の2カテゴリーに属するゾウたちを管理している。このゾウたちは、王への奉仕に使うために徴集することができるのである。

ゾウの価値はその体格で決まる。クデーあたり何ドルもする。雄の方が雌より高い。6～8個の銀棒(90～120ピアストル)以下で、良いゾウを見つけるのは困難である。持ち主たちは疲れる行程で期間の短い旅、プノム・ペンからコムポートあるいはポーサットに行つてすぐ戻るような場合には、通常1日当たり1ピアストルで貸与する。ゆっくりとした旅、あるいは目的地で長く滞在して動物に休息を与える場合には、価格が安い。乾季の終わりには、長い道中で滅多に水が見つからないことが予想されるので、彼らはしぶしぶながらゾウたちを委ねるのである。

タメアクから2時間、スヴァイ・ドーン・カエウ(カエウ爺さんのマンゴー)の村で、同じ名前のストウンに出会う。幅は25～30メートルである。この川については後にストウン・ドントレイのところでは取り上げるが、スヴァイ・ドーン・カエウから先はストウン・コムボン・ブラックという名で知られており、1月末でもまだ4～5ピエの深さがある。流れはなく、低い水位は湖と同じである。1か月後になると貧弱な糸のような水が、辛うじてその川床を湿らせているだけになる。この川を遡って人が住んでいる最後の地点は、次

のような名である。コムボン・プレイ・クローン（岸、クローンの森）（木の名）、ペイト・アンサー、カッサン・プヌウ（2つの果樹の名）である。

両岸にはシヤム側にもカンボジア側にも、混血の中国人が住む 15～20 軒の小屋の集まりがある。彼らは漁業を生業としており、魚をスノコの上に広げて日に干していた。彼らはまた、内陸の少数のカンボジア人たちと交易もしている。

カンボジア人 2 人が乗った 1 艘の丸木舟が、ちょうど土手の草の茂みにもやってあった。

彼らはアンナム人がディン〈dinh〉と呼ぶ野生牛の一種、クティーンクティーンの皮と角を売りに来ているのであった。1 発の弾丸でその獣を打ち倒したという古い火打ち石銃が、舟の底の皮の上に投げ出してあり、そのバッテリーは古いボロ切れで包んであった。狩人たちは買い手を待っていた。何人かの野次馬が彼らの周りに集まって、手柄話をさせていた。なぜならここでは、そのような狩は大変なことだからである。

このクティーンは、クティーン・ポー（蛇の牛）という名で呼ばれている種類で、現地人たちから恐れられているトラと同様に奇妙な噂があった。蛇を餌にしているというのである。それによると、その鋭く尖った角を器用に地面に突き刺して、蛇が穴に入り込もうとする瞬間に尾を捕らえる。毛皮からでも中毒するというので、頭にわずかでも咬み傷を負わないように、蛇を見かけると唾液を吐きかけて木から落とす。クティーンクティーンに追われた人間が樹上に逃げても、同じやり方で地面にたたきつけられてしまう。その角で作った指輪を指に嵌めていると、蛇の咬傷から守ってくれるという。

例年、1～数メートルの深さの水面が、湖と広大な平原を結びつける。この平原ははるか西方、ストウン・コムボン・ブラックあるいはスヴァイ・ドーン・カエウから、ストウン・ルセイあるいはドントレイまで広がっている。中の道の一部分も浸水する。そのおかげで、水上に浮かび上がったわずかな高台、あるいは2つの川の岸の上に建てられた村から村へと舟で走り回ることができる。

浸水が引くとき、低いところに泥のような液体の平原が残り、そこにペリカンが点々と長い列をなしてやって来る。朝に夕に独特の羽ばたきが、まるで起床ラッパと帰営ラッパのように鳴り響き、曙と黄昏時を告げながら村の上を通り過ぎていく。

スヴァイ・ドーン・カエウの周囲では、地面はむき出しである。水田は主に左岸にあって、相当な空間を占めている。続いてそよ風に波打つ高い草が現れ、それが長くなるにつれて道は狭くなり、草はゾウの高さにまで届き、朝にぐっしょりとおりた露をゾウ使いの上に振り落とす。地面はまだ湿っていて、草はあまりにも緑で、うまく火を放つことがで

きないのである。草の大洋は視界の果てまで広がり、かすかに島のように木の葉が見える。その下にチョピエの集落が隠れている。

この村は、ほとんど感じられないほどの高台の上であり、バナナの木の帯の後ろに、10軒の小屋があるだけである。バナナの木の幹は、遠目からは生け垣のように見える。村の中に井戸はなく、沼の水があるだけである。朝、水牛がかき乱す前に女性たちが汲みに行ったにせよ、なかなかそれを飲む気にはなれない。

陸生の貝は、もう長い間、地表から姿を消していた。地面の中に潜り込み、休眠して、最初の雨が降った後でないと出てこない。それらが蘇る季節にこの平原が浸水したりすると、根こそぎ失われてしまう。一方川に棲むものはといえば、残骸以外は見られないが、ampullaire、paludineなどの種が道を覆っている。それらもまた、隠れてしまっているのである。かわいい *Hemisinus baudonianus* はまだ水たまりの中において、遅刻者たちの中に多数混じっている。

チョピエに着くには2時間必要であり、そこからモーンに着くにはさらに2倍の時間が必要であった。道程の中で植物は少しだけ変わり、平原の中に木々が散らばり、時には森のような様相になる。

先に、ストウン・スヴァイ・ドーン・カエウあるいはコムボン・ブラックがカンボジアとシャム人の所有地を分断しており、この川の左岸の領域はバット・ドムボーン地方に属していると述べた。この地方の広がりはいはデイ（土地）というカンボジア王国の5大臣の采地、すなわちカンボジアの5大領土区分に匹敵する。バット・ドムボーンはデイと同じように、一定数の小地方あるいは郡に分割されている。国境を越えて以来踏破してきた土地はルセイという小地方に属し、その主邑がモーンである。

この分割については、順次、現れてくる都度話していくことにする。数は6で、名前は以下の通りである。ルセイ、ドントレイ、サンケーあるいはバット・ドムボーン、レアン・ヴェアンあるいはトナオト、モンコル・ボレイとトゥック・チャーである。トゥック・チャーは少し前に、スヴァイ・チェークと合体した。

モーンはストウン・ルセイの右岸に位置している。その水田は、チュレイ (*ficus* の一種)の小集落を越えた少し後に始まる。少なくともポーサットに匹敵するセンターである。その家々は皆ストウンの岸の上であり、小さな集まりをなして遠くまで続いていく。

家は皆通常の様式通り柱の上に建てられているが、そのうちかなりの数に、米の貯蔵庫になっている粗壁土の仕切り壁がある。大水のときに船がやってきて、米を積んでいくの

である。

知事の住居から数百メートルの所、村の西端に、中国人商人の家族が住んでいる。その店には、現地人が森林産物や自分たちの耕地の作物と交換する商品がそろっている。小屋や水田の間には1本の道が走っており、多くの徒歩の者、騎馬の者、荷車で賑わっている。荷車の幾つかはスバウの束を積んでいる。ポーサットから先では、よそで使われているチャクヤシの葉と完全に取って代わって、このイネ科植物で小屋を覆うようになる。

ルセイあるいはドントレイの川は、1本はプノム・プレイ・スランから、もう1本はプノム・プレイ・トラーチから来る、2本の急流から形成されている。これらの山々はムチと呼ばれており、同じクラヴァンの群の一部を構成する。川はほとんどすぐに2つの支流に分かれ、北東に向かう。

最も南を流れるのはストウン・カッサン・プヌウという名で、右岸に位置する村から命名されている。この村を高い道が通っている。

もう1本はストウン・クレペン・ピーという名で、川沿いの山の名である。

ストウン・カッサン・プヌウは境界線をなしている。カッサン・プヌウを過ぎた後、2本の支流に分かれる。1本はペイト・アンサーの近くで、この村を中心とする丘々で生まれた急流を集めて大きくなり、まずストウン・コムボン・プレイ・クローン、渡河地点ではストウン・スヴァイ・ドーン・カエウと次々と名前を変え、最後にはストウン・コムボン・ブラックとなる。もう1本はカッサン・プヌウから15キロほどの地点、プートの村の近くで、ストウン・クレペン・ピーに合流する。

ストウン・クレペン・ピーはそこからドントレイまで、ストウン・ルセイという名前になる。

ルセイ（竹）はモーンの西3~4マイルにある重要なセンターで、ストウンの岸にはないが、ストウン・コーン・カアエク（子供、カラス）という左から流れ込む小さな支流の河口近くの土手の上であり、かつては郡の主邑だった。そこにはまだ、今世紀初めに遡る昔の土の砦跡がある。

ドントレイはモーンの北東12キロほどにあるもう1つの大きな村で、ルセイとサンケーの間、湖と国境の間にある、同じ名前の地区の主邑である。

いずれにせよ北東、トンレ・サーブに程近いアンロン・プロヴェーク（淵、コガモ）の村の近くで、ストウン・コムボン・ブラックがストウン・ドントレイに合流する。

水位の高いときにストウンは、アンロン・プロヴェークで湖岸から12~15メートルの

深さになる。この地点からモーソとプートとの中間にある大きな村、トノムまで平均で 6～7 メートル、幅は 20～30 メートルを維持している。これ以降はしばしば巨大な枯れ木が障害物となり、不可能ではないまでも、航行を極端に困難にする。

左岸の、トゥオル・プロムに到達するまでに横断する平原は、先の平原と同じく全くの無人の地で、全くの裸であった。水田のある部分には、そこそこに何軒かの放棄された小屋があった。種まきや収穫の時に守人が泊まるのであろう。

トゥオル・プロムには 30～40 軒の小屋があり、モーソから 10 キロの所にある。

ここからオー・チャークまでは遠くない。オー・チャークは、先の 2 本の川の後ではこの地区で最も重要な水の流れであり、少し上流に遡った所にある大きな村の名前から名づけられている。プノム・トゥック・ポルを発する急流が形成するいくつかの沼を水源とし、直接湖に注ぐ。

コムボン・プレア（聖なる岸）は、トゥオル・プロムから 25 キロである。この 2 地点の間の土地は、雨が降ると舟が走り回れる程度に浸水するのだが、すでに乾燥の影響を受けていた。水が引くなり荷車が縦横に溝をつけ、ゾウや水牛が踏み固めた。今日では泥が固くなり、深い足跡が太陽に焼かれて、街道はまるで石ころだらけのようで、人にとっても獣にとっても非常に骨が折れる。

道は狭く、チョピエのものよりも倍以上も丈高いイネ科植物の新しい海の中を走っている。チョピエと様相が違っていたのは、乾燥して黄色くなった塊が、風がないのでゆっくりと 20 か所で焼かれていたことだ。

その輝きはゾウたちをおびえさせた。そこを越えるために、ゾウ使いたちの皮肉な賞讃を浴びながら、ゾウたちは足早に歩いた。ブン・トーチ（小さい沼）、ブン・トム（大きい）、ブン・リエス（貝の一種の名）という名の 3 つの沼が、左右に続き、旅人のためにわずかな水を湛えている。

草の茂った平原では休憩しないように気をつける。食事を準備するための薪が見つからないだけでなく、夜になると虫の雲の襲撃を身をもって体験することになる。この季節には蚊帳は他の地域では役に立たないが、ここでは不可欠である。

西には煙の柱の後ろに、2 つの小さな山、プノム・テプデイとプノム・コーイ（税関）が姿を現している。互いに 1 キロ離れていて、中の道がその間を通っている。かつて両者を結んでいた 1 つの土城壁の痕跡がまだ見えている。

この山々を覆い、西に延びている森の中に、カンボジア語では一般的に、チュリーク(?)

と呼ばれる木がある。その美しい木材は、高級家具を製作するために、バンコクでは大変人気がある。シャム政府はこの町の辺りで毎年大変な費用をかけ、50～60本をバンコクへと運ばせていたのだろう。

テプデイとコーイを通り過ぎるとすぐ、これらの小さな峰とバノンの丘の間、といってもバノンにより近いそのほとんど麓に、ストウン・サンケーが流れているのが見える。この川はプノム・クラヴァンを発し、50年前には2本の支流から湖に注いでいた。その1本がオー・ドムボーンあるいはバット・ドムボーンであるが、埋まってしまった。

草の平原を区切っているオー・サダの後、コムポン・プレアまで、田野には発育不良の木々が散らばっている。この村の30軒の家々は、小さな高みの上に積み重なっており、一部は粗壁土で建てられている。住民たちはスバウ（藁）の取引をし、バット・ドムボーンに送る準備ができたものが巨大な山になっている。バット・ドムボーンではこの草が100束当たり半ピアストルで売れる。

コムポン・プレアから少し離れたところに、カンとムニの集落がある。その小屋は全体が水田に耕された巨大な平原の中央に散らばっており、両側には別の村が見えている。この時期には乾いている同じ名前の小川は、雨が降るとオー・ドムボーン（棒の小川）と同じ方向に流れる。

案内人は手を伸ばし、地平線右手、埋まった川の岸の上、昔日のバット・ドムボーンが在った場所を示した。そして正面遠く、果てしない果樹のカーテンがサンケーの家々を半ば隠している、今日のバット・ドムボーンを指し示した。

7. バット・ドムボーン

今世紀初め、そこには互いに近接した2つの町があった。地方の首都、バット・ドムボーンはオー・ドムボーンの岸にあって、バセットの遺跡の近くに積み重なるようにして小屋が建ち並んでいた。サンケーは規模が小さく、同じ名前のストウンの両岸に小屋が散らばっていた。

1835年以来、バット・ドムボーンはもはや存在しない。サンケーがこの地の行政センターになり、消滅した町の人口を吸収して拡大した。

この出来事は外部からはほとんど気づかれなかった。直接に関係がある近隣地域を除いて、主邑はバット・ドムボーンという名前呼び続けられた。

このほとんど知られていない過去について調べることは、それなりに興味深い。

1833年の軍事作戦でチャウ・クンは、期待していたような成果をあげられなかった。彼がカンボジアから去るとアンナム人たちは、以前よりも強固な基盤をカンボジアに打ち立てた。チャウ・クンは、自分の敗北がアンナム人たちを利することがないようにするためと、雪辱の準備を整えるため、バンコクに戻る前にしばらくバット・ドムボーンに滞在した。

バット・ドムボーンは戦争によって手痛い打撃を受けた。ここを通過する軍隊は、賦役ととほうもない徴発を要求した。その上商業はほぼ皆無となり、完全に麻痺させられた。中国人たちは、良心というものを持ち合わせていない兵士たちの目から、自分たちの商品を隠した。精力的なシャム人たちは、人々を屈服させるために、日々厳格な態度をとり、この地に一種の恐怖を与えた。いまだに村々では、力尽きた水牛への慈悲をシャムの輜重隊に乞うて、即座に銃殺されたカンボジア人たちの名が語り継がれている。

アンナム人を前にしての撤退戦は、シャム人の威信を失墜させたのと同時に、アンナム人に対する好印象を現地の人々に与えた。彼らの規律が噂され、彼らの美点が誇張された。唯一の非難は、彼らは報奨を得るために戦闘で殺した敵の耳を切り取るということであった。

世評では、いずれ彼らがこの地方を奪うであろうと言われていた。ひそかに彼らの勝利が願われていた。

バンコクに発つときシャム兵は、征服されてまだ日の浅い、この地の人々の意向を知らないわけではなかった。翌年タイ政府はオー・ドムボーンを埋め、バット・ドムボーンを消滅させ、行政府をサンケーに移すよう命じた。これは明らかにシャムの将軍が、防御の観点や、反乱が成功するチャンスを奪うために不可欠だと判断した方策を、実行に移したのであった。

以下の物語は、同時代人であったカンボジア人と混血中国人が、これらの行為が現地でどのようになされたかについて語ったことだが、シャムが不満の爆発を避けるためにいかに慎重にふるまったかが分かる。

「略奪者チャウ・クンの最後の一群が消えた翌年、収穫は全くなかった。それは珍しいことではなかった。バセットの平原では相当に大規模な氾濫が起こることがあり、我々は稲がその被害を受けるのには慣れていて、しかし、悪い日々を過ごしてきた後だったので、本当に落胆してしまった。より高く、より肥沃なストウンの岸に小屋を移動しようと話しているのを聞いても、誰も驚かなかった。深さが10メートルで、乾季の真っ盛りでも小舟

が動くのに十分な水量を保っているこの川を、半ば砂に埋もれて、我々が利用するのにさえ十分な量を保っていないオー・ドムボーンと比べた。

放棄計画が興味を引いた。計画は重要性を帯び、政府がサンケーに移ると発表した時、議論がなされた。この決定が多くの人に決心させた。官人たち、商人たち、その他大勢は、急いで土地を選んだ。小屋の引っ越しが始まった。

ストウン・サンケーは大変に狭く、我々は杭を使わないで架け渡された歩道橋を渡って、対岸に行くことができた。

以下の意見はある日言い出され、すぐに皆の意見となった。オー・ドムボーンを埋めれば、ストウンの幅はきっと急速に広がり、やがて大きな商業的重要性を持つことになろうと。

賦役が招集され、オーの入口がふさがれた。そして当局はバット・ドムボーンに残った人々によそに移るよう命じ、そこに再び住み着くことができないように、以前人が住んでいた地区全体にわたって、川床に土手を落とし込んで埋め立てた。そこで育った木が今では大変に大きくなって、1人の男では抱えられないくらいになっている。

以後、バセットと大湖の間の部分をストウン・チャス（昔の川）と呼ぶようになった。」

オー・ドムボーンはサンケーとトンレ・サープの間の旅程をかなり短縮しており、あらゆる点からそれが昔の水路だったと思われる。

この川には伝説がある。年代記によれば638年に、廃位された王のドムボーン・クロニューンが、アンコールから王位篡奪者に対して棍棒を投げつけたが、この方角に外れてしまったので、それを探し出すために掘ったのだという。このことからオー・ドムボーン（棍棒の小川）とバット・ドムボーン（棍棒をなくす）、あるいはプレア・ドムボーン（聖なる棍棒）という名前が起こった。

サンケーへの移住が終わるとチャウ・クンが到着し、現在の砦を建てた。現地の人々は2年間、その建設のために働いた。

砦は南北面が900メートル、他の2面が400メートルである。濠はない。そのレンガ城壁は基部で厚さ3ピエ、頂上で1ピエ半である。高さは5メートルで銃眼を備え、幅2メートルの内側の盛り土で支えられている。それぞれの角と長辺の中央には、稜堡が建てられている。

6つの扉の後ろには古い大砲が配置されている。2台は1789年の製造年号を持ち、長さ4メートル、口径30センチである。これらをバンコクから引いてきた指揮者の精力の証左

である。

地は荒廃し、住民たちは敵意を持ち、あらゆる物資が不足している中でこの事業を完遂したことは、評価すべきである。

石灰とレンガが必要だった。ストウンから3キロ、町から15キロのプノム・トーチ（小さな山々）で石灰岩が見つかった。サンケーとバノンの間の川を縁取る村々では、すでに話したような、コムボン・チナンで使われている原始的なやり方で焼き物を焼いていた。彼は住民たちに石灰と煉瓦を焼く窯の作り方を学ばせた。やがて、これらの製品が相当量入手できるようになった。

地方の人々は村々から順番に、嫌々ながらやって来て作業に参加した。子供や老人、小屋や耕地は置き去りにされた。集落全体が、森に、山に逃げた。チャウ・クンは完成を急いでいたので、反抗者を罰するのに1つの方法しか使わなかった。彼は悪い思い出のある旧バット・ドムボーンの耕地を選んで処刑場とし、毎日そこで斬首刑を行った。時に十分な人数を仕事に連れてこなかったメー・スロック（村長）のこともあったが、たいていは噂を立てたという不運な咎人であった。逃げた家族も捕らえられると、そこで全員が処刑された。

全てが完成すると、シャムの将軍は再びバンコクへ戻った。タイ政府はサンケーに置いた地方の長のかたわらに、肩書きだけのカンボジア王子、アン・エムを配していた。プノム・ペンの王位にあったかの女王、アン・メイの叔父である。

彼らの上に不幸が重くのしかかった。

アンナム人たちに騙されたアン・エムは、クメールの王位を夢見た。彼は計画をひた隠しにし、ルセイ地区でのトラブルを鎮めるために知事が不在になるという好機が訪れると、サンケーとその周辺の全住民を連れてカンボジアへの道を進んだ。もっともその大半は、出発を強制されたのであったが（1839年）。

アンナム人たちはシャムに抑留されている王子たちの代わりに女性を王位につけただけであり、出頭すれば王にしてもらえるだろうという確信に満ちて、アン・エムは旅立った。つき従った人々にとっても、その後にやってくるのは感謝の印としてのタイトルのはずであった。期待に目がくらんで、過ぎ去った困難な日々ことは忘れてしまったのであった。

砦と町は完全に放棄された。少し後にバンコクから2人の宣教師が到着したが、そこにいたのはたった1人の子供だけだったので、またバンコクに戻っていった。

このことを知るや否や、バット・ドムボーン知事¹は逃亡者たちの追跡に取りかかったが無駄で、プノム・ペンまでの大脱出は成功した。

そこで初めて王子と人々は、自分たちが騙されていたことを確信した。アンナム人将軍張明講は命令を出し、国境を越えてからずっと彼らを歓待し続けていたのだが、彼らを戦争の捕虜として扱った。

アン・エムはある者によればフエ、またある者によればチャウドックに送られ、少し後にそこで死んだ。彼の運命を信じていた者たちも、コーチシナの諸地方に分散させられた。何人かは今日では老い、ビン・トゥアンからストゥン・サンケーの畔に戻ってきて、自分たちの興味深い思い出を最初の段から語ってくれた。

1841年にチャウ・クンが最後のクメール王国侵攻を行った。彼は王位に据えるべく、カンボジア王子アン・ドゥオンを伴っていた。アン・ドゥオンはかつてスムナートと呼ばれ、シャムの将軍がモンコル・ボレイ²と改名した一地方で、バット・ドムボーンにおける兄のアン・エムと同じ立場に置かれていた。

戦争が続いた5年間に、町には少しずつまた人が住み始めたが、ほとんどがカンボジアを逃れてきた人たちだった。町はその後、急速に繁栄した。

オー・ドムボーンはふさがれ、ストゥン・サンケーは飛躍的に拡大した。今日ではバット・ドムボーンおよびその周辺で幅が4倍にもなったが、それにともなって砂で埋まり、深さは10メートルから6~7メートルに減じた。

住民たちは川水だけを使っており、いずれの岸にも井戸は1つもない。

かつてのストゥン・サンケーを見たことがある者は、乾季の終わりが来ると無念の言葉を禁じ得ない。砂の上には貧弱な水面が広がるばかり、しかも岸の家々よりもはるかに多くの場所で、暑い時間には水牛たちが水を汚してしまっているのである。

乾季の間でも、水源まで行く途中にある最後の村、トランまでは丸木舟で遡ることができる。小さな早瀬が距離を置いて散らばっているが、現地人にとっては大した困難ではない。

ここからサンケーまでに流れ込む支流はない。後に、町と湖の間で支流と出会った時に取り上げることにする。

¹ サンケーは、国外ではバット・ドムボーンとのみ呼ばれており、ここでは以後、後者の名前で示すことにする。

² しばしば誤って、アンコール・ボレイと書かれる。

船で水の流れをたどっていくと、4～5キロの間、兩岸は船がいっぱいで、住居に覆われている。現在のバット・ドムボーンである。想像通りの活気、魅力に満ちた景色が目の前に続き、うっとり眺めて飽きない。

「砦は遠いのか？」という疑問に、漕ぎ手の1人が答える。「あの、左の、あそこにそびえている巨大なマンゴーの木が、川の曲がり角で、右手に見えてきます。それが最初に見えた方向に戻ると、砦が見えてきます。」

湾曲部に来るたびに、目を驚かせるような、より魅力的な絵画が見えてくる。ココヤシ、ナツメ、オレンジなどが、あちらこちらで、カンボジア人の素敵な小屋に陰を落とし、道の上に丸天井を架けている。道は川の兩岸にあり、川の曲折に沿って走っている。家々は道と耕地に面して開いており、大木やサボテンあるいは竹の生け垣に隠れているので、さらに後ろにも建築物が続いているように思わせ、異邦人に町の規模を過大視するようにしむける。

バット・ドムボーンはこの地区の商業の集散地であるので、日々著しく発展している。近いうちに、プノム・ペンからバンコクへの電信線によって、この2つの首都に結びつけられ、商取引がより便利になることだろう。特にコーチシナとの商取引はすでに莫大で、1879年末から定期的に蒸気船がやって来て、貨物を取りに来るようになっている。

人口は10,000～12,000人のカンボジア人、中国人あるいはアンナム人と推計される。カンボジア人はストウンの兩岸で、巨大な水田の平原を耕作している。アンナム人は大部分が漁民である。商業は中国人の手中にある。

地方で収穫される相当量の米と大湖の魚が基盤である。他に供給できる産物は、次の通りである。木材、牛や水牛やシカの角と皮、木の油、樹脂、わずかなガンボージ、ムレアク漆、漆である。そして大量の蜜蝋、クラヴァン山で採集されるカルダモンなど。女性たちが織る絹布は、カンボジアとシャムでゆるぎない評判を得ている。輸入の大部分を占めるのは石油である。

馬はラオスから来て、1頭が銀棒2本で売られている。早足牛は15～20ピアストルで、雌牛はわずか2～3ピアストル、水牛が1対で30ピアストルする。

知事は12頭のゾウを持っている。官人たちと人々があわせて同じくらい持っている。

かつてチャウ・クンがプノム・トーチに建てさせた石灰窯は、それ以来ずっと手入れされてきて、石灰岩はほぼ恒常的に採掘されている。石灰岩は地面の上に集積しており、掘る必要はない。最も大きな窯では一度に500ピクルを焼くことができる。最も小さなもの

でも 100 ピクルは焼く。丘の麓までの土地を覆う氾濫を避けて、乾季の間にしか製造しない。石灰は荷車でストゥンまで (3 キロ) 輸送し、そこで船に積み込む。バット・ドムボーンでは、ピクル当たり 2~3 フランである。

同じ時期には、焼き物とレンガも窯の中で焼かれている。大部分は非常に小規模で、やっと 40~50 個の鍋を収めることができるくらいだが、数は非常に多い。小屋の後ろの庭に窯があるのをよく見かける。甕はコムポン・チナンのもものよりも良く焼けており、形もより洗練されている。荷車あるいは舟で大量に、非常な長距離を運ぶ。レンガは現地でパゴダや家の建設にも使われており、おかげで藁小屋が少しずつ消えて行っている。

この地の産物の大部分はコーチシナに向かい、残りがバンコクに向かう。かさの大きな商品は、たいていコーチシナに向かう。シャムの領域を出る時に関税を支払い、カンボジアでまた支払う。バンコクに向かうものには、支払うべき税はない。

水位の低い時期には、バット・ドムボーンとモンコル・ボレイの間に広がる巨大な平原が渴き、収穫が終わり、人と動物の手が空くと隊商が組まれて、シャムの首都へと向かう。

商人たちは旅の長さに応じて、水牛車を 1 台あたり御者込み 20~25 ピアストルで借りる。彼らはそこに商品 (カルダモン、米、皮、角など) を積み上げ、隊列が充分大規模になるのを待って出発する。この時期になると、シャム人やラオ人が運試しに盗賊団を構成するので、その攻撃を恐れてのことである。持ち主たちは通常ゾウで旅をする。旅に出ている期間は 2~3 か月間である。

最初に出発する隊列は大きい。15~20 台以下の車両の隊商はあえて出発しようとはしない。彼らはあらゆる種類の品物を積んで戻ってくるが、かなりの部分がヨーロッパから来たものである。

バット・ドムボーンはチャンタブンとも連絡している。それはシャム湾から 2 時間の、プノム・クラヴァンの西斜面から発する小さな川の両岸に位置する港である。

両者の間は徒歩で 6~7 日離れている。この旅程はおそらく全シーズン、様々な道を通って踏破することができる。毎年多くの隊列が、両地の産物を交換に行く。

チャンタブンには一部分にアンナム人が住んでおり、たいていがナマコ漁に携わっている。船舶が頻繁にやってきて、その海岸から出る通常の荷物の他に、その周囲で収穫される 10,000 ピクルほどのコショウを積み込んでいく。何年も前からビルマ人たちが恒常的に行き来し始めたので、規模が拡大している。彼らはバット・ドムボーンまでの途中に位置する宝石鉱山を採掘している。

彼らが必需品を補給しに来るのは、基本的にバット・ドムボーンの町である。自分たちの採掘現場である森の中でみるみるうちに失ってしまった健康を取り戻すため、バット・ドムボーンに赴く者も大勢いる。

道を行けば一歩進むごとに、人々の間にまぎれこんでいるビルマ人が目に入る。人々は彼らの短剣やサーベルを無関心に眺めている。彼らが健康を、そしてしばしば命さえも犠牲にしてまで探している無価値な宝石に対して向けるのと同じような無関心さである。休息の家々は、熱病にさいなまれたビルマ人の病人で混み合っている。

砦の前の空き地が、鉱山から来た隊商の宿営地に取ってある。その部隊の1つが行列しているところは、非常に好奇心をそそる。

50～60頭の牛が1列になって歩き、それぞれが2つの籐の籠を積んでいる。それらはだいたい円筒形で、荷鞍の形に結びつけられ、1ピクルの米か魚を入れることができるようになっている。牛を率いる男たち自身も、1本の棒の両端に取り付けられた重荷を担いでいる。縦隊の前後や側面には、頭目や若者たち、老人たちが、サーベルと同じくらい悪いピストルや銃で武装して、行軍を指揮し、隊列を守っている。

バット・ドムボーン地方は1人の知事、一種の副王が統治しており、彼が貨幣を铸造し、上級下級の裁判権を持っている。現在の役人の祖父や父も、同じ重要な地位を占めていた。しかしながら世襲ではなく、シャムの王が決めるのである。

バット・ドムボーンで打ち出された貨幣は、この地方の中とシエム・リエプ地方で流通している。しかしながら田舎では見つけることが難しいので、田舎を踏破したい旅人はあらかじめ準備しておくのがよい。

銀メッキした銅で、1つの面にはプレア・ドムボーン（聖なる棍棒）という言葉が、もう1つの面にはガルダ像が刻まれている。馬銭子と同じようにスラエンと呼ばれている。それを小さくした形をしているからである。かつては古い方法で铸造されていた。1880年以来、1人のインド人が铸造を請け負っている。彼の工房ではヨーロッパから来た機械が使われている。銀貨は作っていない。流通している銀貨はシャムのものと、メキシコ・ピアストルである。

さようならと言いながら、宿主は付け加えた。「もし私の妻が今週湖を渡るのでなければ、私が数日あなたを案内したのですが。」

そして通じていないことを見て取ると、

「カンボジアではお産の危険を、湖を渡る危険にたとえるのです。私の妻がお産をする

ので、私は彼女のそばにいなければなりません。」

8. バット・ドムボーンからトゥック・チョーへ

スヴァイ・ドーン・カエウからこちら、低い道沿いに高い草の平原を歩いてきたが、この平原はバット・ドムボーンから先でも、はるかシソポンやモンコル・ボレイの方に続いていく。その終点は40キロ北方、モンコル・ボレイの町の名前を冠するストウンである。

木はなく、やぶもなく、あたかもかつてそこにあった海の模造品のようなものである。乾季の末に出発すると、地平線のいたるところで煙が立ち上っており、磁石が役に立つ。

バット・ドムボーンからまっすぐシエム・リエブに向かうためには、平原の一部分を横断しなければならないが、そこはまた、湖の氾濫によって例年2〜3メートルの水で覆われる部分でもあり、荷車で目的地に到達するには、場所によっては乾季の真っ盛りでも、泥濘が十分に固まっていないところがある。現地の人々はあえて危険をおかすことなく、大湖を経由して2つの町を連絡している。いずれにせよ、関係は極めて限られたものではあるのだが。

それでも陸路を踏破したいと望む旅人は、ゾウの背に乗ってトゥック・チョーを目指し、北に歩んでもよい。トゥック・チョーはこの地方の一郡の主邑で、この地域の中でも最も興味深い地点である。そこからストウン・スラエンを渡り、対岸にあるもう1つの主邑、クラランに達すれば、バット・ドムボーンからシエム・リエブへの道程を容易に達成することができる。

今回採用したこの道程は、特にその最初の部分は2月、3月、4月、5月でないといほとんど不可能であるのだが、ここで簡単に詳細を述べることにする。

1 晩目は大平原の中で過ごす。2 晩目はストウン・モンコル・ボレイの少し向こう側の村、コムバオで過ごす。トゥック・チョーが3日目の夕方になる。

この3日目にクラランでストウン・スラエンを越え、バット・ドムボーン地方を離れてシエム・リエブ地方に入る。すると人通りの多い街道になる。プラン、モック・ペン、プオクといった重要な村々では、休息の家が旅人のために用意されている。

合計で5日間の道程である。

浅く広大な沼と小規模な多数の小川の他に、3本の河川、ストウン・ペハ、ストウン・モンコル・ボレイ、ストウン・プランが道をさえぎっている。バンティエイ・ニエンとサン・クバルの小さな峰々が最初に目に入ってくる。続いてコムバオ、リエブ、トロロク、

ソムプウツ、ソムバットの峰々が島のように孤立して、より近くに現れる。

バット・ドムボーンを出ると、モハー・テープの小川を渡り、ワット・アエクの古代寺院の遺跡を右手、ほんのわずかな距離の所で通り過ぎる。町から8キロに渡って平原を覆っている水田は、ストウン・ペハで終わる。

この川の水源は、バノンの丘の北西にある丘、プノム・ターゲンにある。ここではストウンは幅60メートルで、3ピエの水があり、土手は3メートルである。この川はここに着く前に、2回名前を変えている。ブン・クルオス（砂利の池）の上流では規模が小さい。ブン・クルオスは広い沼で、川はその中央を流れている。

より下流で2つの支流に分かれる。1本はストウン・サンケーに向かい、合流点ではコントレイ（ハサミ）と呼ばれている。もう1本はストウン・モンコル・ボレイの方に流れ、ストウン・モンコル・ボレイとバット・ドムボーンの川の合流点の少し手前、ピエム・カンチャー（奴隷の河口）で、ストウン・モンコル・ボレイに到達する。

ピエム・カンチャーという名の由来として、この地ではこのような物語が語られている。中国から来た1艘のジャンクが商品を積んで川を遡っていたが、ここで想像を絶するような大きさのワニに転覆させられた。乗り組んでいた人々は悲惨な状況に追い込まれ、岸に着くと、生きるのびるために奴隷に身を落とさねばならなかった。

ストウン・ペハは極めて魚が多い。毎年バット・ドムボーンの知事はここに、漁を目的とした小旅行をする。大湖の水位とともに水が下がり、十分に引くと、彼は家族や楽士、踊り子、お気に入りの役人の家族を連れてここにやって来る。2〜3日の間、網や籠を魚でいっぱいにして、皆で先を争って泥水の中を転げ回るのである。

ストウンの向こうでは、15キロ以上の距離に渡って沼が連続する。ゾウは巧みにゾウ使いに導かれて、あるいは避け、あるいは渡って歩いていく。荷車ではここから出られないであろう。

泥の上のあちこちに、巨大なカメの痕跡が見える。イノシシの群が大きな草を揺り動かしながら逃げていく。枯れ草や小さな乾いた植物が堆積したものが、草をたわめるほどの重さもないので草の上に乗ったまま、そこに残っている水の中に沈みこんでいきながら泡を発し、巨大な緑の平面に大きな黄色い染みをつけている。乾季の終わりが近づくと、この緑は火に飲み込まれるのである。

4月末から5月中にかけて、最初の雨がようやく植物に生命を蘇らせる。それまでは雨に溶けた灰の下から、何本かの茎が突き出ているだけであった。平原は裸で、沼の中にあ

って炎を免れた緑にひかれて集まってきた野獣の群が、最後に残った水たまりの岸に姿をさらしている。

クメールの寂しい場所に生息しており、カンボジア人がカダン、プラー、ロマン（ダマシカ、シカ、オオシカ）と呼んでいる種類のシカが、まさにこの時期に角の生え替わりを迎え、生えてきたばかりの角では身を守れなくなっている。

バット・ドムボーンの人々にとっては、大狩猟の時機の到来である。

狩りは興味深いもので、野原で頻繁に出会う馬たちは狩りのためによく訓練されていて、太った獲物たちを追いかけて逃げられないようにし、その喉を掻き切るためにクメールの小さな刀で武装した狩人たちを、疲れきって跪いた獲物の足元まで運ぶ。

この大競馬には、大胆な騎手が必要である。最初のわか雨が平原の焼けた地面を湿らせ、その表面を滑りやすくする。罌のように目に見えない、危険な障害物があたりに散らばっている。ここに一別の季節に一シカを待ち伏せするために掘られた穴があるかと思えば、別のところには、見た目では分からないものの土がまだ泥状で、そこに馬が飛び込むといきなり腹まで埋まってしまう場所がある。

狩人の腕の見せ所は、危険物がある場所で止まるのではなく、危険物を避けて馬を猛然と走らせたまま、足跡を追い続けていくことにある。例年事故が続く。遺体を持ち帰ることも珍しくない。クメールの田舎には接骨師がないので、狩人たちは腕が折れたり、脚を脱臼したりすれば、生涯不具の身で過ごすことが分かっている。

この危ない遊びで全員が危険をおかすわけではない。カンボジア人たちは十分に抜け目なく、自分たちのやり方で乗馬を選び、鐙なしで乗る。しかし一般的に、狩に参加する者たちは、若いときから波瀾に慣れてきた奴隷たちである。他は何人かのまれなアマチュアを除いて、職業的な狩人である。

彼らは借りた馬の代わりに、喉を掻き切った獣の肉を渡し、皮は確保して、足の筋や角は日用の商品と交換に、捨て値で中国人行商人に引き渡す。

筋は中国人の食糧となり、角は彼らの薬に使われる。両方とも、商人たちがプノム・ペンやチョロンに送る。筋はバット・ドムボーンでピクル当たり 12～14 ピアストルである。プラー（シカ）の角は、若く大変に柔らかいときには、バット・ドムボーンで1対あたり銀棒1本もの値段になる。その他の価格は、ピクル当たり 5～6 ピアストルを越えることはほとんどない。

大規模な狩の準備が行われているときには、主催者たちは殺した動物を持ち帰るために、

ゾウたちを連れてくる。しばしば近隣の人々が大勢、野次馬としてついてくることがある。

黎明、目当ての群がまだ草をはんでいる間に、騎手は散開し、1列に広がって出発する。静かな群衆が彼らを目で追う。狩りに気づいて逆上した野獣が逃げ出す。騎手たちがギヤロップを加速し、一瞬手綱を手放し、腕を空中に突き上げながらわめくと、群衆は足音を轟かせ、一斉に奇妙な裏声で、喉から叫び声を絞り出す。カンボジア人たちは、この種の喚声に長けている。

一年の他の時期には普通、待ち伏せで狩をする。時には、水に取り巻かれた群をまだ乾いている土地に追いつめたりする。

住民たちは獲物が減っていると言っている。しかしながら毎年8,000~10,000枚の皮が、バット・ドムボンでの取引に出される。この数字には、比較的限られた数ではあるが、家畜あるいは野生の牛や水牛の皮も含まれている。

よそではクメールの地方のバ・プノムで、同じやり方でシカを追う。違いは乗物が水牛であることぐらいである。それも家畜の群に生まれたものではなく、若いうちに野生の状態で捕らえられ、大型の野獣を追うのに必要な敏捷性を残している水牛である。

この先の道中で渡ることになる沼の中で、最も大きなものはブン・ヴェーン（長い沼）、ブン・チャン、ブン・トゥークという。なぜこれらの沼には、鳥たちを養えるだけの魚が生息しているのだろうか？鳥たちは毎日大群をなして、その泥水に襲いかかってくるのに。貝の残骸、たいていは ampullaire が、固くなった泥に容易に潰されてしてしまうような所に積み重なっており、彼らの食糧に軟体動物が大きく貢献していることを示している。特筆すべきは、軟体動物の中に、いずれにせよ数は少ないが、プレーク・コムポン・サオムの水の中に生息していた種が再び見いだされることである。

ブン・チャンと最初に出会う村、ソムブオ（木の名）を隔てる旅程の間、西にバンティエイ・ニエンとサン・クバルの小さな山々が見える。南北に並んで互いに孤立しており、同じくらいの長さがある。サン・クバルは最も北であると同時に、最も西の山でもある。

バンティエイ・ニエンの周辺では、大きな草を火が飲み込んでおり、ゆえに人が住んでいると推測できる。これらの山の名、そしてこれらが1日歩いたところにあるということは全て、案内人の言による。煙がこの山々を包み込んでいるので、ぼんやりとしか見えない。

ソムブオはストウン・モンコル・ボレイの岸にある。木の生えた湿地がオー・ニョーを縁取っているために、ソムブオに至るまでの道筋は途方もないものになっている。オー・

ニョーは水がなく、泥が一杯の小川で、サン・クバルあたりの沼々を水源としている。

このオーは少し先で、オー・クローチという名になって再度現れる。ストウン・モンコル・ボレイとの合流点まで、オー・クローチという名のままである。

氾濫が起ると、兩岸のみならず、背後の平原のほとんどが浸水する。兩岸に生えている木々は、大湖の周辺にありふれた、価値の無い種類に属した全く使えないもので、カンボジア人がラン・モアト・トンレー（湖の岸のラン）、ステイ、クトム、プラブークと呼ぶものなどである。3~4メートルのやぶが木々を結び、錯綜した茂みを形成している。ゾウたちのためには、集落まで斧で切り開いて行かなければならない。

田舎の人々はそれらの木々の1つ、ラン・モアト・トンレーの皮を使って、キジバトを捕る。カンボジアでは最上の種類の1つであるラン・プノム（山のラン）と、この木とを混同してはならない。キジバトはあまりにも人に慣れていて、倉庫まで米を食べに来る。

この方法を用いてキジバトを狩る者は言う、「あらかじめランの皮と一緒に茹でておいた米を餌にして、彼らをおびき寄せます。鳥は満腹する前にふらふらになって倒れ、水を飲む暇がなければ死んでしまいます。水には毒を消す効果があるのです。他の鳥はこのようにした米を食べても何ともありません。」

ソムブオの村の主な生業は漁業である。

その 25 軒の小屋の周りには日陰が全くなく、果樹がない。よそでは果樹のおかげで、遠くから居住地のありかが分かる。それぞれの小屋の前や脇にある編垣には魚が広げられており、太陽が必要なのである。

小屋は右に傾き、左に傾きしながら、3メートルの柱の上に不安定にとまっている。それらは長さの割には脆弱に見えるが、堅固で、氾濫から小屋を守ってくれる。小屋の藁は半ば失われていて、惨めな光景である。悪い季節を耐え忍んできたためだが、持ち主たちはあまりに忙しくて、最初の雨の前に修繕することができないのである。

魚の屑があちこちに無造作に投げ出されており、大半の漁村がそうであるように、その臭いが不快な印象を総仕上げしている。だからヨーロッパ人の旅人は、他のどのような設備よりも、野天でキャンプすることを好むのである。

いずれにせよ川の岸は、キャンプには素晴らしく好適であり、そこでは村にはない大木がひしめき合っている。大木の葉の下では、太陽は露ほどに厄介ではない。

ストウン・モンコル・ボレイの水源はクラヴァン山塊の北端にあり、その東斜面はストウン・ポーサットの3番目の支流であるストウン・ドントレイと、ストウン・サンケーを

誕生させている。ストウン・モンコル・ボレイは枯れ木にふさがれた小石だらけの土の上を長い間流れ、ボアでは舟で越えられない早瀬となり、数世紀を経た森に覆われた土地を流れる。そこではビルマ人たちがサファイアを探し、川床で宝石を洗っている。

ここでは川幅 35 メートル、土手は 4~5 メートルの高さで、(2 月末に)、ひどく濁り、ほとんどよどんだ 6 ピエの水が残っている。魚が豊富である。その一種トレイ・ラッ (アンナム語のコン・カー・ロック) がとりわけ多く、大量にとれる。現場ではピクル当たり、3 ピアストルをわずかに切れる価格である。

魚は基本的に交換される。ソムブオやその周辺のストウンには、だいたい常に 1 艘あるいはそれ以上、ピエム・セイマーのアンナム人の舟がいる。それらは塩、アレカ、綿布などを積んでおり、小分けにして川魚と交換する。

ストウンはバック・プレアッ (壊れた大包丁) に向かい、かなり長く流れた後でストウン・サンケーに合流し、川幅を倍にする。バット・ドムボーンに商品を探しに来るコーチシナの蒸気船は、ストウン・サンケーを合流点まで遡る。その上流は川が無数に曲折しており、幅が狭いため、汽艇では全く近づけないのである。

この地区の産物の一部は、モンコル・ボレイの川を通過してバット・ドムボーンに下る。ソムブオのように、氾濫と土壌の性質のために荷車が使えない多くの居住地にとっては、川が唯一の交通路なのである。バック・プレアッは小さな漁村で、半ば湖上にある。数年前に 2 つの河川の合流点に形成され、それがゆえに毎年重要性を増している。

もう 1 つの村スラエ・プレイ (森の水田) が、ソムブオのすぐ近くにある。いくらかのタバコ畑がその小屋を取り囲んでいる。この村に生きる者たちもまた、漁を生業としている。

スラエ・プレイとソムブオは、2 つともモンコル・ボレイ郡である。

オー・クローチから始まって、トゥック・チョーの辺りまで広がる地全体で、カンボジア人たちがセラニエー (seranhé) と呼ぶ野生の稲が、栽培することなしにひとりで生え、広大な面積をなしている。遠くで、大規模な洪水の起こる土地に共通の樹種である低木の混ざり合った木のカーテンが、その境界をなしている。

これらの黄金色の平原には、カンボジア人によってそれぞれ名前がつけられているが、その様子は旅人にとって真の驚きである。一年のこの時期には、いくつかの平原で一様に刈り取りが行われ、長さ 2 メートルの稲の茎に覆われた土地に、倒木でできた粗末な囲いによってゾウやシカなどの侵入から守られている、巨大な水田の外観を与えている。これ

は例外で、大部分は近隣の住民から放置されて明らかに荒涼としており、森の住民たちの痕跡の方が無傷の稲よりも多い。彼らが見逃した穂は、実って茎を曲げて地面に長く垂れ下がり、太陽に照りつけられている。

ゾウたちは水が引くと、この恵まれた地に御馳走をたらふく食べにやって来る。しばしばその群れに遭遇するが、時に30頭を超していることもある。

野生稲の茎は、水位が上るのにつれて成長する。常に穂が水面の上になっているので、しばしばその高さは3メートルを超えることがある。

農地のものよりも粒が小さいにもかかわらず、カンボジア人たちはかなり気に入っている。が、比較的少量しか収穫しない。「茎が長すぎる」、と彼らは言う、「水が引く前に実ったものを集めた方がいい、丸木舟に乗って刈り取ることができる。」

コーチナでは、バット・ドムボーンの中国人たちがこの地域の農民たちから収穫物を買取り、野生米を混ぜていると言われている。もし米が混ぜられているとすれば、それはスラウ・ヴィエ（這ったあるいは寝た稲）と呼ばれる質の劣ったものであろう。大平原でとれる少量のセラニューは採集した者が消費する。売りに出せば、現地人たちの言うところでは、最上級の米と同じ値になる。

スラウ・ヴィエは、氾濫する平原に野生稲と同じ状況で生えるが、人が播いているという違いがある。野生稲と同じように、その穂には長いヒゲが生えており、水位の上昇とともに成長する。粒は通常の大きさであり、赤く、時に白い。白い場合には固く、煮えにくいと言われている。

プノム・ダンレークに発する小さな河川、ストウン・コムボン・カッサンとの合流点でストウン・モンコル・ボレイを渡り、川から離れる。プノム・ダンレークについては後で取り上げる。

通り道には人が住んでおらず、1つの漁場の杭が数百歩下流に浮き出ている。ソムブオと同じように泥だらけの水には流れがなく、身体の小さなワニが多数、頭を水面に出している。「赤い鼻面を見ませんでしたか？」案内人はゾウ使いに言い、漁師に丸木舟を貸してもらいに行くのではなく、ワニがすぐに消えたストウンの水に肩まで入った。「ここでは黒い鼻面は恐くありません」、出てきながら言った。「私たちの村では1件も事故があったという記憶はありません。魚がたくさんいますから！」

左岸では土壌は砂質になり、少し高くなるが、同じくほとんど裸である。

プノム・コムバオ（石灰の山）は、この地方ではよく知られているが採掘されていない

石灰岩の塊で、高さは50メートル、北方にわずかに離れたところに現れる。山の方角から来てそのすぐ近くを沿って流れるストウンが、同じ名前の村と山を隔てている。村は15～20軒の小屋の集まりで、岸の大きなヤシの木の陰に建っている。

ここが休憩場所である。休息の家はない。通過する者は極めてまれである。好奇心に駆られて旅人に近づいてきた人々は、最初に呼びかけるとすぐに、夜を過ごすための仮小屋を作った。なぜならカンボジアには、見知らぬ者に対して家の扉を開ける習慣はないからである。

コムバオの北にリエプ（木の名）、トロロク、ソンプウツの丘が現れる。低く、互いに切り離されているようで、中腹の所々に耕地があり、垣根のように果樹や小屋に取り囲まれており（ソンプウツは別で、不毛で、その周辺は無人である）、平原の醜いまでの単調さを打ち破っている。

右岸の草の生えた寂しい土地とこちら側とは、絶対的に異なっている。ここはいくらかのタバコ畑を別にして、水田に耕されている。コムバオの耕地は山の周囲に散らばった村々の耕地と入り混じっており、トゥック・チョーの耕地と接している。ココヤシや砂糖の木の巨大なカーテンのうねりで、遠目からでも、間もなく到達するストウン・スラエンの蛇行が分かる。

丘の麓で生まれた沼地のような小川、オー・クロチャープが雨でふくらんで、ストウン・コムボン・カッサンに水を導いている。この川が道を断ち切った後、土地は一層高くなる。ここまではまだ、湖の氾濫が大きな影響を与えている。そこから先はストウン・スラエンの氾濫を別にして、例年15日間ほどしかトンレ・サープの水には覆われない。ここでは水位が1メートルを越すことはまれである。

1本の道がコムバオから始まって、丘の間を通っている。左手にリエプ、右手にトロロク、次いでソンプウツが現れる。砂だらけのリボンのような道が、視界の届く限り、水田の真ん中をトゥック・チョーまで続いている。

トゥック・チョーはコムバオが所属し、スヴァイ・チェーク（マンゴー、バナナ）郡と合体した郡の主邑である。1つの町などではなく、トゥック・チョーという名で知られている地に散らばる村々の中で最も大きなものであるということだけである。

その家々は150～200軒ほどで、ストウン・スラエンの右岸に続き、下流に続いてスヌオル・ロオー（美しいスヌオル、figus）の50軒ほどの家々につながっている。

この時期には倉庫の中に、大量の米の蓄えが積み上げてある。水位が上がるとそれらは、

バット・ドムボーンあるいはプノム・ペンに向けて下ることになっている。その倉庫には、粗壁土の壁の上に浮き彫りで大雑把な模様を施してあるものがあり、ネズミやスズメを寄せつけないように囲ってある。小屋と同じように長い柱の上に持ち上げてあるが、はるかに手入れがなされている。

小人数の中国人たちがこの地に住んでいる。少数派であるが、農民もいる。他は商人で、田舎を経巡っては産物を買いつけている。

例年多くの馬の群が、バット・ドムボーンを目指す。しばしばポーサットの向こうまで連れて行って、売ることもある。

牛が多く群になっているところも、バット・ドムボーン以来初めてである。牛は水田のあちこちで草をはんでいる。水によって平原から追われても、丘が残っている。

この地では、それらをシャムの牛と呼んでいる。小さく醜い種で、クメールの田舎にはありふれていて、コーチシナの肉屋に供給されている。カンボジアの牛と呼ばれている極めてすばらしい獣たちとは対照的に、先祖代々の敵の名で呼ばれているのである。

シャムの牛は様々な仕事に使われ、12～20年生きる。ストウン・スラエンの岸では、最も良いものは15ピアストルで売られている。

カンボジアの牛は、農民たちの言うことを信じると、40～50歳まで生きる。値段はつけられない。持ち主はどうしても売らざるを得ないときにしか売らない。僧侶や豊かな官人の牽引獣である。カンボジアの牛2頭を奉納することを、若い雄ゾウを奉納するのと同じように誇りにしている村もある。

エレガントな気質、繊細さ、頭を飾る角のプロポーションなどは、1つの傑作である。車を引くときにはか細い脚でトロットで進み、駿馬のように美しく、皆の視線をひきつける。

カンボジア人たちは大変に上手に、獣につける堅い木の鈴を一刀彫する。クメールの牛を幾ら飾ってもあきたらず、この極めて美しい動物の首には、芸術品のような飾りが下がっていることがしばしばある。

彼らはこの種の牛はもともと森から来たもので、森に住む牛が時々訪れて来るので、平原の群が絶えないのだと言う。

9. リエチコルの物語（海水の後退）

興味深い場所を訪ねるために、旅の途中でほんのしばらく寄り道をするのは、とても楽

しみである。

トゥック・チョーの住民たちが一度見ておくべきだと勧めてくれたのは、プノム・コムパート（平たい山）であった。

この山に登ろうと思ったとき、土地の賢者である1人の老人が案内を申し出てくれた。

「上りは100メートルもありません」、彼は言った、「登ると、今までに通り過ぎてきた奇妙な地が、眼下に広がっているのが見えます。草の大海原、その中の小島、その岸！ 天気が良ければ、はるか遠くまで見通せます。このあたりにはこれ以上に魅力的な散策地はありません。」

この峰は村の正面、対岸にある。この平原にあるあらゆる高みがそうであるように、沖積土の中に完全に孤立している。登攀は容易である。頂上に着くと案内人は、自身の言葉のすべてが貴重なものであると確信している様子で、次のように述べた。

「北の峰々は、プノム・ダンレークです。プノム・ヴェーン（長い山）とも呼びます。その見かけの方向がそろっているので、シャム人のようにボントアト（ものさし）と呼ぶ者も大勢います。

ダンレークというのはしなやかな棒のことで、その両端に荷物を下げ、肩で支えて運びます。カンボジア人たちがその棒のカーブと山脈の頂上のカーブが似ていると感じたので、そう名づけられることになったのです。

この山脈は他の山々とは違っています。頂上にたどり着くと、広大な高原が北方に広がっています。そこは集落や大きな村々で覆われ、河川によって寸断されていますが、そのいくつかは塩辛く、また誰も探検しようとしないうような深い森が点々と散らばっているのです。

その麓に生きている、あるいはまさにそこに住んでいる様々な人々、ラオ、クメール、クイにとって、それはカオ・ヴォン（輪の山）なのです。この言葉は高原が全体として、丸い形をしていることを表しているのです。

もしそれらを目にしていなければ、これらの異なる名前が証明するでしょう。

過去のことを知る土地の人々は山々を眺めながら、時々知らず知らずのうちに、この言葉を口にしてしまうことがあります。チュラン・スロモット（海岸）。

南へ伸びているプノム・クラヴァンに着くと、トモー・アンキエンと名づけられた山群の1つが、ちょうど私たちと向き合って、他の山々の上に突き出しています。

丘や小さな高みがそこここに隆起していて、それらを結び付けているようですが、いくつかを除いて全く見えません。

あちらの、ちょうど真南にある現在のボムノンの岩々の上で隠遁生活を送っていた1人の聖者の威力によって、すべてがめっちゃめっちゃになってしまったのです。

それは長いお話です。私は書かれたものを見たことがあります。そのタイトルはリエチコルで、皆に知られています。本はめったに見なくなっていますので、お聞き頂けるのであれば、私があなたに要約をして差し上げましょう。

リエチコルの両親は王の血を引く、トモー・アンキエン³の豊かな商人で、とある有名な隠者のもとに自分たちの息子を連れて行き、思慮と学識をもって育てあげてもらい、早くから独り立ちをさせようとしていました。

導師の隠遁所には、ニエン・ロムサイ・ソック（解き髪の娘）がいました。隠者は彼女がまだ幼いときに、開いたばかりのハスの花の上にいるところを見つけ、庇護して育てていたのです。

教育が終わって故郷に戻るとき、弟子のリエチコルはロムサイ・ソックを連れ帰りました。老人が彼女を妻として与え、その長い髪を留めるために素晴らしい宝石を贈ったのです。

少し後に、リエチコルは両親と伴侶のもとを離れ、コーラート⁴の岸に向かいました。父親が船に乗せ、積み荷を売りに行かせたのです。

コーラートに上陸したとたん彼は、老いた王の末娘、ニエン・ミカ⁵が水浴びしているところを見て恋に落ちてしまいました。

彼女の方も若い旅人に気づいていましたが、さほど怒りは感じなかったのです。ある夜、彼は衛兵の目を盗んで王宮の壁を越え、眠っている侍女たちの側を歩いて彼女の寝床まで侵入し、恋を囁きました。

結婚した後になってようやく、リエチコルは彼女に、故郷に1人の妻が居ることを告白しました。もっとも彼女のことは完全に忘れきっていたのですが。

彼らはそれでも3年間、幸せに過ごしました。娘は母になり、夫が子供に富を与えるた

³ トモー・アンキエンは、石、城壁。

⁴ コーラート、プノム・ダンレークの上の国。

⁵ ニエンは、女性や娘に対する丁寧な呼称。

めに東の海岸に行って大船いっぱいの商品を交換してくると言うので、それに賛成しました。

やがて、荷を積んだ船が出発しました。ミカは食糧を積み込むことと、最後の愛撫、最後のお別れにすっかり気を取られていたので、錨が上がってやっと、彼に裏切られたのかも知れないと思ひ当たりました。

彼女は突然、息苦しいほどの不安にしめつけられました。そして高樓に向かつて走り出しました。そこからならば、海のはるか遠くまでを見下ろすことができたのです。彼女が頂上に着いたのは、まさしくリエチコルが見られているとも思わず、東から向きを変えて帆をいっばいに揚げ、家族とサイ・ソックが彼の帰りを待ちわびている故郷に向かおうとしていた瞬間でした。

大粒の涙が彼女の目から、乳が張った裸の胸に落ちました。今や、将来の幸福な夢は全て砕け散ってしまったのです！

子供のことを考えると荒々しい怒りがこみ上げてきて、理性をかき乱しました。

もちろん、彼女の人生をめちゃくちゃにした男が、彼女が苦しんでいるというのに喜びを得るなんて許せません。

「アー・トン」、それは子供の頃から彼女が飼っていたワニでした。彼ならば人よりも素早く、そしてうまく復讐を果たすことでしょう。

即座に彼女は叫びました。「行け、追え、捕まえろ、むさぼり食ってしまえ、もう 1 人の妻のために、私を幼子とともに置き去りにしたリエチコルを」

リエチコルが長く留守にしていた間、トモー・アンキエンの家は陰鬱に沈んでいました。ロムサイ・ソックだけは、波が夫を奪ってしまったとは思っていませんでした。幼い頃からの遊び相手は戻ってくる、老いゆくまでともにいる、彼女はそう確信していました。

毎日彼女は、別れの場所であった砂浜に水浴びに行き、熱心に水平線を見つめ、夢中になって立ち続けていました。一胸騒ぎがしました—遠くに白く見える帆が、近づいてきました。

それはとても天気の良い日のことでした。空気は澄み、風は涼しく、彼女は興奮して叫びました。「ほら。船が見えませんか。あのほっそりした輪郭は間違いないわ。」

彼女の喜びの叫び声が響き渡り、人が駆けつけてきました。

「おお！ 確かに彼だわ。後ろを見て！ なぜ水夫たちはあんな風に動揺しているの？ なぜこの素晴らしい天気にも、帆柱によじ登ったりまた降りてきたり、気が狂ったように左

右に走り回っているの？ 何か危険が船に迫っているの？ さっきまではうれしかったのに怖くなってきたわ。とても怖いわ。

ボートを後ろに捨てたわ。水の中に雌鶏やアヒルの籠を捨てたわ。

心配で心配で、胸が張り裂けそう。船が立てる波の中に化け物が見える。だから動揺しているのね。幸せが来たと思ったのに、死だったのね。」

アー・トンが現れると、リエチコルは叫びました。「追うのはやめろ、アー・トン。自分の主人の夫が分からないのか？」

「私は自分の飼い主に従う、あの人しか知らない。」

リエチコルは理解しました。速度をあげるために小舟を放し、トカゲめが喰っている間に時間が稼げるのではないかと期待して、雌鶏をいれた籠を投げ、アヒルの籠を投げました。

逃げようとするリエチコルの努力は、アー・トンを激昂させました。あと1跳ねで船に届くところまで来ました。リエチコルはサイ・ソックを見分けて岸に向き直りながら、観念して、妻への最後の別れの手を振りました。

彼女は絶望して、無意識に武器を探しました。髪を肩にマントのように崩しながら、宝石やダイヤモンドが重たくついた金のかんざしをむしり取りました。それは老隠者の贈り物でした。涙ながらに養父の加護を祈ると、化け物に向かってその貴重な宝物を投げつけました。

彼女から20歩の所で、かんざしは海に落ちました。

すると奇跡が起きました！ 底に沈んだかんざしの先が砂にふれるや否や、地面が水を割って持ち上がり、トモー・アンキエンからダンレークまでがむき出しになって現れたのです。

同時に、岸に集まった群衆には、リエチコルがサイ・ソックに向かって走ってくるのが見えました。船は大きな岩の塊の上に乗上げていました。

そこから程近いもう1つの小山の上では、アー・トンが叫びながら息絶えようとしていました。「御主人様、私は死にます。仇を討ってください！」

ニエン・ミカは多数の兵を召集しました。自らその先頭に立ち、コーラートからプノム・

クラヴァンへの中途、海から出現した巨大な平原の中、バンティエイ・ニエン⁶と呼ばれる岩のところで自分の軍旗を立てて立て籠もり、サイ・ソックに宛てた果たし状を持った使いをリエチコルのもとに出しました。

サイ・ソックは挑戦を受けて立ち、大勢の戦士を集めました。リエチコルはこう言って彼女を行かせました。「さようなら、そして武運を。」

老いてはいるものの精力的な軍人であるター・ムーン⁷が先に進んで、ミカの兵力と位置を探りました。

ミカは警戒していました。彼女はター・ムーンを追い払い、後をつけ、サイ・ソックの野営地が見えてくるとようやく止まりました。

緒戦ではトモー・アンキエンの軍が不利でした。もう1人の優れた指揮者、ター・クライ⁸が毅然とした態度で戦いを指揮しました。

これを見ながら、ロムサイ・ソックは隠者を思い出したのです。「私に勝たせてください」、彼女は叫びました、「山の上に寺院を建てることを約束します！」

そして宝石を身につけ、ミカと同じように美しい馬に乗り、侍女たちが差し伸べる手から素晴らしい武器、サーベルと槍を取ると、恋敵と立ち会うために乱戦の中に身を投じました。

戦士たちがどれほど勇敢であっても、2人の婦人の軍旗のもとでは本気になって戦うことができませんでした。彼女たちが戦い始めるとほとんど全員が、自分たちの指揮者が不利になったら逃げようと考えて、そこから離れていきました。

彼女たちは見つめ合い（そして、リエチコルがそれぞれに、もう1人のことを醜いと言ってあったので、お互いの美しさに驚きました）、想像を絶する打ち合い、罵り合いを演じました。

サイ・ソックは全く疲れを知らないように見えました。これを見た人々は、彼女は不死身だと言いました。ミカは反対に傷つき、力がつきるのを感じました。もし自分の兵たちが再び戦いに加わって、少しの間でも援護してくれたら、ちょっとだけ休んで勝てるのではないかと彼女は考えました。

彼女は密かに、指揮者や兵たちに視線を送りました。そして彼らのためらいを見抜いて、

⁶ バンティエイ・ニエンは娘の砦。

⁷ ター・ムーンは、おじいさん、10,000。

⁸ ター・クライは、おじいさん、1000,000。

呼びかけました。ところが彼らは、彼女を守って盾になるどころか、逃げ出したのです。防御できる宿営地に退いたのではなく、クモの子を散らすように。

敗者ミカは、あらかじめ知らなかったとしても、サイ・ソックの残忍な勝利の叫び声によって、哀れみを期待しようもないことが分かったでしょう。

敗れ、まさに死なんとしているときに、ミカは祖父のもとに残してきた子供のことを考えました。彼女は子供に再び会いたいと望みました。武器を投げ出し、追われながら、彼女は馬を早足で駆けさせて山に向かったのです。

この新しい、植物も生えてきたばかりの国で身を隠すことは困難でした。ロムサイ・ソックはヴィエル・ニエン・ヨム（泣いている娘の平原）で敵を捕らえました。

彼女はミカを鎖につないで自分の野営地に連れて行き、心ゆくまで拷問を加え、次いで彼女の頭を落とさせ、長い竹の先に刺して、近くの山の頂上に掲げました。ゆえにこの山の名前をサン・クバル⁹というようになったのです。

続いて自ら手を下して、遺体の腹から内臓を引きちぎり、男たちに細かく刻ませて、遠く地上に投げ捨てました。

国に凱旋してみると、王は子供を残さずして死に、リエチコルが王位に就いていました。

きらびやかに2人そろって老いた隠者のもとを訪れ、危険が迫ったときにした約束を果たすために、丘の上に9つの塔を持つ素晴らしい寺院を建てました。以来この丘は、ボムノン（祈願）と呼ばれるようになりました。

この事件以来ミカという名は、カンボジアでは妾と同義語になりました。

座っているのに疲れたように、老いた案内人は立ち上がった。視線を地平線に向け、ゆっくりと巡らせた。

「指で指してみましよう。」彼は言った。「私がお話した、はるか昔から名前を知られてきた場所をたどってみましよう。」

トモー・アンキエンからほとんど真っ直ぐトゥック・チョーに遡りながら、彼はボムノンとその廢墟となった寺院、隠者がハスの上から子供を取り上げた場所であるプノム・サイ・ソックを次々と指し示した。「あそこに、ボムノンから続くあの丘の上に、もはや採掘

⁹ サン・クバルは頭を持ち上げる。

していない金鉾山があると言われていました。」

アー・トンと船が残ったところは、プノム・サムプウ（船の山）とプノム・クロプウ（ワニの山）と名を挙げるのみにして、サン・クバルの北東端、コムピエの前で指を止め、さらに続けて言った。「この円い丘の上に建てられた2つの塔は、ニエン・ミカの息子が作ったものだという後日談があります。大きくなって王になり、祖父からミカの身に起こった不幸を聞かされて、ここに来ておごそかに葬式を行ったのです。

彼は自分の母の遺骸をシソポンの山々の中央の峰に見つけることができたと言われていました。そのために、その峰はニエン・ミカという名を冠しているのです。

しかしこの墓所の主を、私は誰とも断言しようとは思いません。なぜならシャムの本によるとサイ・ソックは、恋敵の脚をカー・ニエン（女性の脚）に、下あごをバン・カン（顎の岸）に持って行かせ、胴体はペート・リウ（8つの輪切り）で8つの断片に切り分けさせたと言っているからです。

これらのうち最後の3地点は全部、今日シャムが支配している地にあるのですが、サンサオ地方の1つの町です。他の2つはペキムから少し離れた所にある村です。そこに住んでいる人たちは、明白な証拠として、形見を掌中に持っていると言っています。

あまり重要でない地名を挙げたりして、あなたの記憶に負担をかけたくなかったのも、他にも私がわざと言わなかった場所が多くあるのですが、バンティエイ・ニエンは知っていて欲しいと思います。サン・クバルと我々の間にある小さな岩で、ミカが立て籠もった所です。そこをクレー・ニエン（娘のベッド）とも呼びます。彼女が岩のくぼみを寝床としたからです。

そこには1つの碑文がありますが、ぜひ見に行くべきです。あなたの国の賢者なら、恐らく読むことができるでしょう。

奇妙ではありませんか？ その上で腸を切り刻んだという、キエラム・プオツ¹⁰の石は、動き回り、放浪するのです（包丁が残した跡が、かなりはっきり識別できる）。我々の中のある者が湖あるいは沼の近くで見かけたかと思うと、翌日には別の者が道の上、あるいは山の上でそれを見かけるのです。」

10. バンティエイ・ニエンの碑文

¹⁰ 切り刻んだ腹。

バンティエイ・ニエンは貝殻の石灰岩の隆起で、1 つに結びついた 2 つの岩塊から形成されている。一方はもう片方より半分ほど高いが、せいぜい 20~30 メートルの高さである。何本かの大木が上にのっており、基部も木々に囲まれているので、裸の平原の中では実際よりも大きく見える。

周辺の風景は全く魅力に欠けている。成長する泥土の層が砂を覆い、かつての海を隠している。岩に近づくまでは、細かいほこりを白くかぶったやぶや、大きな草が地面を覆っているだけである。

南側の基部に同じ名前の集落が 1 つあり、その小屋は庭園の中に建っている。乾季には泥だらけの 1 本の大きな小川が、雨季には集落とモンコル・ボレイのストゥンを結びつけている。

3~4 人の仏教の僧侶が、小さい方の頂上にあばら屋を構えている。そこは深い亀裂や大変に幅の広い裂け目、クレバスがあり、大きい方の頂上もそうなのだが、腐植土がその 4 分の 3 を満たして、蔓や小さな植物が芽生えている。

細かい砂岩の塊があちこちに横たわっており、彫刻が施されたものも、ただ磨かれただけのものもある。僧侶たちの小屋の側には若いマンゴーの木があり、まだそこでぐらぐらしている廢墟の場所を占領しているが、彼らの言うところでは、久しい以前からあるわけではない。

岩の上部を構成し、最初の高みを越えて切り立っている壁には、大変に狭い洞窟がある。好奇心をひく外見ではなく、数メートル落ち込んでいる。そこまで登ってみないと、岩のくぼみがあることに気付かない。それがクレー・ニエンで、案内人が概略を話してくれた物語に出てくるベッドである。

地面の上には、手足がもげた 12 個ほどの木や砂岩の小立像があり、石灰岩のしみ出しで光っている岩壁にもたれかからせてある。くぼみや割れ目には、ふたのない鉢が大量に置かれている。それらは半ば、黒こげになった骸骨や灰で一杯になっている。集落の死者たちである。

中央、立像から離れたところには、平らに切られて地面の上に水平におかれた大きな石の上に、細かい砂岩のステラが建てられ、小石で支えられている。

その前にはいくつもの小さなロウソクの残骸があって、土台を汚している。その表面の 1 つには、反対の面は裸なのだが、浮き彫り像があり、以下の碑文がそれを囲んでいる。

siddhi svasti (原注 1)

1. namostu parāmāthaya.
vyomānallaya yo dardho.
dharmmasambodhi nirmmānā.
kāyārthe lekya muktaye.
2. bhāti lokeśvaro mūrdhnā.
yo mitā bhangi nandadhe.
mita raśmi prakāśānām.
arkendvor darśanā diva.
3. jñā pāramittratākhyāye.
bhagavatye namostu te.
yasya sametya sarvajnas.
sarvajnā tvamūpeyupaḥ.
4. asti tribhūvanavajro.
yogī vinaya viśrutaḥ.
darsanīyo mahā nago.
nitya dānopinirmmedaḥ.
5. yasyāmātāmaher bhatrac.
śtrī nāmā śrī indravarmanaḥ.
tithi nāmnī dadau dāsī.
śreyortha jagadiśvare.
6. priyāye somavajrākhyā.
syālo lokśvarandadau.
yasya sīsthapya pātresminca.
hivyomanavaiikite.
7. tena pūrwa pratishthāpya.
gotrasya jagadiśvaram.
munīndrajanani bhrtyaḥ.
sthāpitāgaviyadvilaiḥ.
8. purwa wattatra deveput.
utvā gotrasya kalyanā.

----- (原注 2)

完全なる幸福

1. 天空を支え飾る者に栄光あれ。彼は法学の守護者、保持者であり、創造者である。彼は彼が解放したいと望む存在にするしをつけた。
2. 彼の前で輝き、水で潤し我々を喜ばせる密雲において、彼はその広さを測る。そして蒼穹の扉において、彼の顔前で輝く星の光の輝きの境界をなし、我々に空を見えるままにする。
3. 徳の恩恵を熟知するバガヴァット（の名声）に栄光あれ。バガヴァットあなたは全知であり、あなたが付き合う者は全知となりあなたと共にある。
4. ヨーギー（苦行者）のトリブヴァラヴァジュラあり。戒律にしたがって経験を積み、尊敬すべき高官で、常に寄進に専心していた。
5. 彼の母方の祖父は、シュリーと名づけられ、シュリー・インドラヴァルマンのしもべであり、ジャガッディシュヴァラに傑出した奴隷を贈った。
6. 同じく彼の愛しい義兄弟ソーマヴァジュラは、**908**年にローケーシュヴァラを奉納し、その台座の上に置いて捧げた。
7. 彼の家族は、かつてジャガッディシュヴァラを建立し、彼（トリブヴァナヴァジュラ）は**907**年にムニンドラジャナニを建立した。
8. 最初の誕生において彼はデーヴェープト（王子）であり、名高い家族の出身であった。

原注1：この碑文の翻訳は在シャム・フランス人宣教師のシュミット氏による。

原注2：最後の節を終わらせるにあたり2行の詩句が欠けている。それらはほぼ完全に消失している。

碑文翻訳者の注：この碑文はサンスクリット語で書かれている。完全に正しく、この詩は見事な腕前で書かれ、詩情に満ちている。韻律はアヌシュトゥプ（1行8音節、4行で1詩節）である。

由来はおそらく寺院の建立に因るものであり、王女はインドラに捧げるこれらの詩を刻ませた。碑文全体が神、ヴァジュラ、ソーマ酒、インドラの信徒でシュリー・インドラヴァルマナという名をもつ祖父を表していると思われる。

11. トウック・チョーからシエム・リエプへ

ストウン・スラエンはダンレークの高原の中央部分に発する、1本の巨大な急流と一群の小川から形成されている。

幅はトウック・チョーで25～30メートル、深さは6メートルである。

ストウン・サンケーに向かって流れ、湖からバット・ドムボーンまでの距離の3分の1、すなわちピエム・セイマーの正面のピエム・スロルに達するまではサン・ケアクの地を横切り、左岸のシエム・リエプ地方と、チョン・カル地方、プノム・スロック地方、バット・ドムボーン地方とを隔てている。

しばしばストウン・トウック・チョーと呼ばれたり、その下流部を指す場合にはストウン・スロルと呼ばれたりする。しかし、ストウン・スラエンあるいはストウン・スピエン・スラエンという呼称の方が、より広く知られている。

トウック・チョーでは、岸に人が住んでいる場所で最も高みに近いところを、カントロク・カン（クイの言葉で仔牛）と言っている。

ストウンを下っていくと、下流にはポンロー・プロン、チョン・カル、チューン・テーン（松明）、スピエン・クメーン（子供の橋）といった村々が、右側、最初に現れてくる。カントロク・カンはチョン・カル地方に属する。

主邑のチョン・カルを別にして、これらの村々はきわめて小規模である。地方自体が重要性に乏しい。地方の名は主邑の名からつけられたのであるが、伝説的な過去の王（プロム・ケル）の名が訛ったものらしい。その領域には遺跡があることが知られている。何人かの中国人がチョン・カルに定着して、商業を行っている。

スラエン・ナリン、チュローイ・ニエン・グオン、スラエン・タヴェート、ポイ・スヴァイが左岸に続き、シエム・リエプ地方のクララン郡に属している。

対岸では、ルーク、スピレン・スラエン、ヨーク・ポンローが、プノム・スロック地方の一部をなしている。ルークは、ロムピエ、チュラーブ、ラムトーといった、岸から遠い3つの村々と、耕地や小屋で接しており、その出口となっている。

プノム・スロックの地は大変に小さいが、興味深い場所ではいっぱいである。多く見ても、15～20の村しかない。偉大な過去の名残がいたるところにある。シャムがバット・ドムボーンを手に入れたとき、プノム・スロックはこの大地方の1小郡であった。それをコーラートのあるお大尽がバット・ドムボーンから切り離して手に入れ、知事に任命されたのである。この地の行政は今日でも、この一族の掌中にある。

コーク・ポンローを出ると集落が連続し、左岸はクラランに、右岸はトゥック・チョーに属する。この町より手前では、チャーとその下流アンロン・ソーの2つのアンナム人の町が興味深い。チャーは右岸にあり、アンロン・ソーは両岸にまたがっている。これらはまだ誕生したばかりで、規模を拡大している最中であるが、すでに1,000人以上の住民がいる。

合流点、左岸にあるピエム・スロルは取るに足らない村である。その名前は、その周辺の岸ではありふれているがよそでは珍しい、木の一種に由来する。この木はかつて、特に輿を作るのに使われていた。今日ではたいてい鎌の柄にする。

ストウンの真の集散地はピエム・セイマーで、たいていの住民が中国人の商人とアンナム人の漁民である。かなりの人口密集地域であり、ストウン・サンケーの合流点両岸にまたがっている。コーチシナの蒸気船はピエム・セイマーを通り過ぎて、バット・ドムボーンの川を遡る。

ストウン・スラエンはスピエン・スラエンまで、雨季には大型の船が、小型の船ならあらゆる季節に航行可能である。毎年両岸の平原が水に覆われる期間は、平原を航行する方が好まれるようである。原因は水流だけではなく、旅程を短縮するためでもある。ストウンでは木々の枝や竹が邪魔になり、高い水位に達したときには、あまり大きくないジャンクですら通行不能になるためでもある。ストウン・スラエンを渡るとシエム・リエブ地方に入る。シエム・リエブ地方は3つの郡に分かれており、主邑はクララン、シエム・リエブとロールオスである。

クラランはストウンの流路を下って、トゥック・チョーから半時間の対岸にある。見てきたように、シエム・リエブ地方の西部をなす郡の主邑で、大きく豊かな村である。果樹に囲まれた、土手の上に建つ小屋のそれぞれ扉のすぐ近くには、粗壁土の米倉がある。その耕地は遠くまで、平原の中に広がっている。

スヌオル・ロオー（美しいスヌオル、*ficus* の一種）は道の途中にあり、その最初の小屋々の上に陰を投げかけている木が名前の由来である。右岸にある大きな集落だが、特別な重要性はなく、非常に近接した2つの主邑を結び、事実上1つの小さな町を形成し、地区の商業センターとなっている。それを南の人々はトゥック・チョーと呼び、東の人々はクラランと呼んでいるのである。

川が水量を増すとすぐ、大きな船がこの3地点の間の流路沿いにやって来て、蓄えられていた米の輸送を始める。コーチシナの蒸気船が活動を始めていたらピエム・セ

イマーでそれらに引き渡すか、あるいは直接プノム・ペンまで運んでしまう。バット・ドムボーンから来た船も手伝うが、充分ではない。倉庫はストウンを遡ってはるか先まで満杯である。

先に挙げたアンナム人の大きな村、アンロン・ソーは兩岸の上であり、大部分がクララン郡に属する。この地区の長の小屋の周辺では、その住民の誰彼に出会わない方が珍しい。

彼らは富を夢見ている、あるいは単に金で買えない耕地を探している新参者か、あるいはストウンを遡り、森を荒廃させに行くための書類を請求しに来た材木商である。疲れを知らない樵である大湖の元漁民たちは、抜け目なく巨木の情報を得ることに長けている。森の端に住む現地人たちは、迷信による恐れでなければ命令によって、これらの巨木には触れようとはしない。

巨木はそこで筏に組まれる。

1人のフランス人が通ったので、彼らは大喜びした。彼らは荷物の上で跳び上がり、休息の小屋を整え、料理を手伝い、旅人を落ち着かせるためにやって来たカンボジア人たちを、野次馬と一緒に遠慮無く追い払った。その時こう言ったようだった。「彼が私たちの国から来たのが分からないんですか？ 彼への奉仕は、私たちの仕事です。離れていてください。」

そしてしゃがんだり、座ったりしてくつろいだ。「私はサデークから来ました。彼らは私の友達です。彼らはカントーから来ました。アンナム語はわかりますか？ 私たちは少しだけ、カンボジア語を話します。この国は私たちのものになりました。私たちはあなたに会えて大変に満足していますし、あなたにご奉仕するのはこの上なく幸せです。

我々は先の季節に、ストウンの上流から筏を1つ下ろしました。それ以来ここに留まっています。次の増水で木材を運ぶためには納付金を支払うか、多数の丸太を引き渡さねばなりません。我々には銀はありませんし、もう少し安ければ支払いたいと思います。助けていただけませんか？

その代価に、この白い玉と爪を受け取ってください。材木を切っていたときに殺したクマの遺骸から取ったものです。

奴は酔っぱらっていました。多分、巣まるごとの蜜を食べたのでしょう。我々は大層驚きました。いつもなら逃げていくのに、我々に襲いかかってきたのですから。

玉は時々この獣の頭の中にできるのです。めったに見つかりません。大変に貴重なものです。それを懐にしている者は、戦争の時、銃を恐れなくても良いのです。それだけでなく、盗賊の銃もです。ご覧なさい、白くて象牙のように木目模様が浮いているでしょう。どちらかというともあまり丸くありませんが、それは以前にあなた方の猟銃の弾丸で傷ついたためです。」

クラランの水田を離れてからプランまでの間の地は、もはや耕作されておらず、人の居住もなくなる。地面は所々裸で、たいていは大きな草で覆われ、価値のない木や竹、やぶが散らばっている。天気のいい季節の間は、乾いた砂地であるので、荷車の通行に適している。水位が上がる季節には、軽い浸水のために、丸木舟が便利になる。25キロ移動する間に、一またぎするような小川もなく、一年の半分はたまに沼の泥がある以外、駄獣が涼を取るための水はない。

長らく待ち焦がれた挙句、両岸に生えている木々が目に入ってきて、1筋の河川が現れたと分かるのである。アレカ、ココヤシ、砂糖の木が他のものより多いと、川の存在を保証すると同時に、その岸に何人かの人が住んでいることが分かる。ストウン・プランの緑のカーテンは南北の地平線に消えてゆく。その大木の陰には一連の村々や集落が隠れているのである。

ストウン・プランはクララン郡とシエム・リエブ郡を隔てている。

ストウン・スラエンと同様に、その源はプノム・ダンレークにある。また同じように、ストウン・サンケーに流れ込む支流である。合流点はその両岸、湖からわずかな距離の所に位置しているドーン・オクの村である。

ドーン・オクから遡って、チェ（右岸）、プレサート（左岸）、プットリエ（右岸）、プラン（右岸）、コーク・チャス（右岸）、トメイ（左岸）、ター・チェ（右岸）、ター・セン（右岸）、ドーン・メオ（右岸）、スロック・バート（左岸）などの村々がある。

ドーン・メオとスロック・バートの間で、雨季に航行可能な一種の水路、オー・トマートが生まれ、ストウン・プランの水の一部をストウン・スラエンに導いている。この川との合流点は先に取り上げた村、ルークとスピエン・スラエンの間にある。

ストウン・プランは平均幅が10～15メートルで、深さは5メートルである。雨がやんでから再び降り出すまでの間、その砂底はわずかばかりの水面が湿らす程度になる。

宿泊予定地の4キロ手前で、川沿いの、全て水田に耕作された完全に裸の耕地に入ると、よりいっそうよくプランが見えてくる。村は右岸にある。人口は300～400人で

あり、ストウンの岸では最大の人口密集地である。

いくつかのタバコ、落花生、ベテルのプランテーション、野菜園を混血中国人〈原語 *métis chinois*〉が手入れしている。15 人ほどが小屋と土手の間の土地の一部、半ば乾いた川床までを占有している。

休息の家は 3 年前に建てられ、それ以来手入れされてはいなかったが、まだ立派である。通常この種の建築は、機能を満たしてさえいれば良いとされるのだが、これは対照的に優美である。実際それは通行人を泊めるために作られたのではないものを、流用しているのである。

その小屋は、反乱を起こしたカンボジアの王子、シー・ヴァッターを追跡してシャム政府が軍隊を派遣したとき、住民たちが受入のために準備した一種の仮宿営を保存してきたもので、その小軍隊の指揮者にあてられたものだった。

その指揮者、ピヤ・キエロンは、身近にフランス人宣教師、ルソー氏を置いていた。バンチャン（シャム）のコレージュの前校長である。

遠征はシエム・リエプを越えただけでなく、全部で 6 か月間臨戦態勢にあった。兵士は 600 人、それがさらに 300~400 人の召使いで膨れ上がり、荷物を運ぶために 90 頭のゾウとおびただしい数の荷車がいた。

この反乱、この軍事作戦の歴史は面白いだろうし、確かに有益である。我々は通常、フランスの軍隊が参加した結末についてしか知らない。

シャムの遠征軍の構成を聞かれて、現地の人々がこう答えたときは驚いた。「兵士はアンナム人、ラオ人、カンボジア人で、戦争の捕虜か、その子孫が従軍させられていました。シャム兵はいなかったと言ってもよいでしょう。」

プランからモック・ペンまでの距離は 14 キロで、その間の土地はストウン以前と同じように平らで、ほとんど木が生えておらず、木よりもやぶや竹が多く、中途にあるスヴァー・フルの集落を形成する 3~4 家族の 4~5 の耕地を除いて、全く耕作されていない。

お分かりであろうが、これらの休憩地間の距離は大変に不規則である。クラランからプランまでは 25 キロ、プランからモック・ペンまでは 14 キロ。続くプオクはモック・ペンから 15 キロで、さらにシエム・リエプまでは 18 キロである。政府の業務のために、宿駅（荷車と歩行者）が組織されている。

モック・ペンは川の近くにも、小川の岸にもない。小さな池に、乾季の終わりまで

村の需要を満たすだけのかなり澄んだ水が蓄えられている。

内陸に居住する集団が、水の流れに沿った立地のものほどゆとりのある外見をしていることは滅多にない。モック・ペンもわずかな水田があるだけで、30軒ほどの荒れ果てた小屋があちらこちら、それ自身の耕地のそばに建っているので、大変に貧しいと思うかも知れない。悪路による輸送の困難が土地の産物の価値を減ずるので、たいていの場合、必要最低限のものを求めるだけで我慢することになるのである。

モック・ペンではプランと同じように、現在の休息の家はピヤ・キエロンの通過に由来するものである。池から100メートル、村からは200メートルの所にあり、道に面している。何本かの木で村の小屋からは見えなくなっているので、ひどく孤立している感じがする。

今日の静寂とは対照的に、いつもは騒がしい。家々はほとんど常にいっぱい、現地人の旅人たちは食事を取るとすぐに眠ったりはせず、少なくとも夜半過ぎまではおしゃべりをし、短い物語をし、伝説を語る。それは少しばかりは楽しみのためだが、ほとんどは荷物や獣を見張るためである。

案内人は火の近くで、話をするきっかけを探しているようだった。屋根のヤモリが大きな音をたてた機会をとらえて、彼は話し始めた。

「奴は自分と同じく、小屋の屋根に住んでいる蛇を呼んでいるのです。私たちはその蛇をポス・トッカエ〈トッケー〉(ヤモリの蛇)と呼んでいます。喉にできたイボを取る時が来た、蛇があんまり遅いと死んでしまうと伝えているのです。」そして聞いているかどうかを見て、「時に1週間以上も待ちます。」と付け加えた。「蛇はいつもそこにいるとは限りません。蛇が来るとヤモリは下あごを開き、口を大きく開けます。蛇はそこに頭を入れて、イボを取って食べると立ち去るのです。」

「私たちは自分たちの住まいから、この無害な動物を追い払ったりはしません。人々は奴らの呼び声を数えて、その数で、良いとか悪いとかを占うことがよくあります。その肉を馬の傷の治療薬に使う人もいます。大変に細かく刻んだヤモリを米に混ぜて、患畜に食べさせるのです。必ず治ります。」

200年前に1人の旅人が、カンボジア人たちが信じているといていたものに近い¹¹ 考え方である。

「2種類の非常に危険な虫がいる。」彼は、シャム王国について語りながら書いてい

¹¹ Histoire naturelle et politique du royaume de Siam.、1687年、コロネリによる。

る。「百足、本当に100本の足があるので、このように呼ばれている。黒く、長さは1ピエである。その毒は少なくともサソリと同じくらい激しいが、トッケー（ヤモリ）ほど恐ろしくはない。トッケーは夜間はっきりと繰り返し何回もトッケー、トッケーと鳴くので、このように呼ばれている。この言葉はその喉の中でハミングのようにして出されるが、大変に不愉快なものである。その咬み傷は致命的で、咬みつかれた身体の一部をすぐさま切り取る処置をしなければならない。」

モック・ペンとプオク間の地については、ほとんど言うことはない。寂しく、先の土地と何ら変わりはない。単調さゆえに醜く見える景色が、道沿いにずっと続いている。湖に近づく。その氾濫ゆえに、雨季の終わりには多くの地点で、道程がむやみに困難になる。

この地区の中ではプオクの村そのものだけではなく、それを取り囲むソムラオン、テー・トーチ、クナートなどの名の小村のグループも、プオクという名で認識されている。その住民たちは、ただ1人の長に従っている。そのうえ、それらの耕地は互いに隣接しており、小屋は入り交じっている。

ストウン・テー・トーチおよびストウン・プオクと名付けられた小さな水の流れは、シエム・リエプの川の支流で、全く航行できない。それらは大きめの小川である。あちこち、家の近くや岸の上に丸木舟が乗り上げており、ひどい氾濫ではないが、雨季に湖が木の囲いを越えてプオクまで届いた時に使われる。

乾季の終わりなのに、唐突に、数日前から土砂降りでもあったかのように、これらの小さなストウンの縁まで水が流れている。最初の収穫は終わっており、人々は至る所で田をストウンの澄んだ水で潤し、遅い稲を植えつけるのに忙しい。このことは、これまで通ってきた地方を見た後では驚きである。眼前の真の豊饒の地には、たやすく注意をひきつけられる。

常に水が豊富に流れているシエム・リエプ川の中の堰のおかげで、小さな支流のプオクやテー・トーチでもこの水位があるのである。

豊かな場所、こぎれいな小郡。そこでは年に2回、米の収穫がある。最初のモンスーンを待つ間に、人々は北方、森に向かう。一森はかなり近いのだ—その産物を求めて。ロウ、樹脂、油、材木。2番目が実るあいだに、ヤシ砂糖を作る。

耕作された土地を過ぎると、平原は再び無人になる。少し湿り気が残っている。オオヅルが注意深くそこを歩いている。これらの首が赤くて大きな灰色の鳥が、人に見

られた途端に逃げるのを見るのは愉快である。

続いて森が現れる。しかしそれはダンレークから南下し、プオクから半ば見えている大きな森の力強い植物ではない。その外側の土壌はたいがい砂であるが、道沿いに見事なチュレイが散らばっているところを見ると、かなり大きな腐植土層を覆っていると想定される。これらの大木の樹液は利用されていなかったが、それを別にする、道すがら、価値のある種類の木々は全く目につかなかった。しかしながら、先の木の生えた地区同様、カンドルは見つけることができた。その樹皮はカンボジアとシヤムで、ほとんど何の下ごしらえもしないまま、ゾウの背と荷鞍の間の大変に分厚い敷物として使われている。

さらに小さいいくつかの小川が、ストウン・シエム・リエプから分かれて、町の入口にある2つの村に水を与えている。その人々もまた、2度目の収穫に専念している。その上興味深いことに、これらの村々は、クライとテチャスという名だが、プオクと全く同様、称賛を受けるに値する。最初の村を見れば、全てを得ることを非常によく心得ている。

後者を離れると、シエム・リエプが現れる。

大きな重要性を持つ行政中心地、シエム・リエプは、本来の意味での町とはいえない。人口は限られており、その大半が役人とその下僕で、かなりの空間を置いてストウン沿いに散らばっている。ヨーロッパ人の旅行者にはバット・ドムボーンよりもよく知られているが、それはその他に比類ない遺跡群のおかげであり、商業的な見地からは、バット・ドムボーンにははるかに及ばない。

カンボジア人の優美な建築と川岸の庭園に飾られた、オレンジやアレカに隠れた小屋のうっとりするような連続。しかし市場さえない。

バット・ドムボーンと同じように現地の人たちはカンボジア人で、行政は完全にクメール人の手中にある。大勢の中国人やアナム人がそこに定着しているが、シヤム人はいない。

シエム・リエプは今世紀初め、バット・ドムボーンの領域の一部であった。バット・ドムボーン地方をシヤムに引き渡したのと同じ知事が、同じようにもう1つの地方を引き渡し、それらを統治したのであった。彼についてはすでに多くを語ったが、シヤムの将軍チャオ・クン・ボディンが1848年に、賢明にもその知事の勢力を削ぐべきだ

と判断し、彼からプノム・スロック¹²とシソポン¹³を取り上げたように、シエム・リエブを取り上げたのであった。

カンボジアの地方であったところをシャムが最終的に手に入れ、メコンの岸（プレイ・サット、トンレ・ルプウ、モルー・プレイ、ストウン・トラエン）に接合しようとしたのである。それらがカンボジアから奪われたのは、1814年のことに過ぎない。1847年にタイ政府は、これらの地方を支配していたコムポン・スヴァイ知事に割譲に関する文書を作らせるほうがよいと考えた。アンナムとの戦争は終結しており、ボディン¹⁴は出発していた。おそらくその帰還を心配したのだろう。弱さゆえか裏切りか、知事は書きつけの下部に自分の官印を押した。スリン、ソー・カム、サン・キエなど、他の併合に関しては情報が欠けている。

シエム・リエブには現れなかったとはいえ、シャム人の長については鮮やかな記憶が残っている。彼はシエム・リエブに代官の1人を送って、要塞化した囲いを築いた。その中には、現在の知事とその人員が住んでいる。バット・ドムボーン¹⁵の城砦よりは規模が小さいが、シエム・リエブの砦もバット・ドムボーンのものと同じように、アンナム人の侵略を防ぐために築かれたのであった。

カンボジア王子アン・エムとバット・ドムボーンの人々の逃亡後（1839年）、ボディンが戻ってきて、アンナム人たちに対する軍事活動を再開した。この地では彼の命令によって、すでに数多く定着していたアンナム人たちに対する大虐殺が行われた。

その結果この地のアンナム人は完全に消滅し、1856年に1人のヨーロッパ人が船でシエム・リエブに到着したときには、アンナム人の漕ぎ手たちが先に地面に降りてきたのを見て、人々は恐慌に陥ったのであった。攻撃だと思っていったんは逃げ出したものの、人数が少なく武装もしていないのを見て、村の男たちは彼らに飛びかかり、生命に危害を加えようとした。旅人が姿を現して、誤解を解いた。

虐殺を免れた家族は、コムポン・スヴァイ地方の方に逃げた。そちら側でも同じように追いつめられた彼らは、ラオスとメコン沿岸に向かって歩き、そこに住み着いた。ラグレのミッションは彼らの村が繁栄しているを見た。

ボディンはコレラで1849年に死んだ。カビンからシソポンへの道、バンコクからバン・カナートへの運河は、彼によるものである。アンナム人との戦争のために連絡及

¹² X 頁を見よ。

¹³ バット・ドムボーンの北西にある小さな地方。

び輸送の便を図ることを意図した道であったが、彼の死後はもはや手入れされる対象ではなくなっていた。

彼はシンという名であった。しかしシヤムではカンボジアと同じように、タイトルを与えられている人物を指し示すのに固有の名前を使うことは、礼儀に適うやりかたではない。また、伝説となったシヤム人戦士の思い出に恐れおののく臆病な田舎者から、それを引き出すのは容易ではなかった。

シエム・リエプの川は、直接大湖に向かう。この川はストウン・スラエンやストウン・プランと同じ、ダンレークの高原で生まれている。

流れの上流部では、特にストウン・プレイ・サットと呼ぶ。それが最初に横切ってくる地方の名前である。現地の人々は、その主な水源の水はプラ・クパー（口をすすぐ仏陀）、巨大な仏陀の口を通して、岩から出てくるのだと言っている。

氾濫はシエム・リエプには届かない。しかし雨季には年に2～3回、川はその両岸を20～30センチの水で覆う。

他の季節には、湖から主邑までは非常に小さい船、さらにその先は丸木舟しか使えない。

しかしながら、その水は比較的豊富である。乾季の一番ひどい時期でも、シエム・リエプで3メートルの高い土手の間を早瀬となって流れ、川幅は35～40メートルで、砂床の上には1ピエの大変に澄んだ水が広がっている。

川筋の人々は自分たちのプランテーションを維持するために、興味深い方法で豊富な流量と流れの速さを利用している。すでに、プオク以来の村々が自分たちの水田を維持するために、いかに水を引き出しているかを見た。ここでは土手の高さゆえに、自然に手を加える必要がある。

雨が終わるとすぐ、ストウンはその通常の水位を取り戻し、裕福な持ち主はそれぞれ自分の土地の前の土手のすぐ近くの川床に、少しばかり我々の水車に似た、直径4～5メートルの車輪のようなものを設置する。水掻き板の1つ1つに容器、竹などの管が、動かないように固定されている。下に下がると容器が満たされ、上に上がると空になる。車輪の動きに従って、容器が軸の頂上にきて、下り始めるまさしくその瞬間、その開口部が傾き始め、水が流れ出し、一種の樋の中に落ちる。この樋は車輪の動きを妨げないよう、なおかつそこから放り出された水が届くよう、十分な距離を取って置かれている。このようにして集められた水は導管を通して、庭園、プランテー

ション、あるいは水田に導かれるのである。

この灌漑システムは、流れが少ないとか、水量が不十分だとか、土手の高さだとかの理由で、あらゆる場所で実用的なものではない。今まで叙述してきた装置は、カンボジアでは、いくつかのストウンの岸、なかんずくプノム・ペンの近くのプレーク・トナオト、ウドンのストウン・チュルウなどでしか使われていない。

川の近くにある小屋にとって、川が役立つのはこれだけではない。大湖に近いせいで非常に魚が多い。流れの末端に数多く設けられた漁場の他にも、シエム・リエプでは闇夜の晩に、土手の間に活気がある。女たち、娘たち、子供たちが、一方の手に松明を持ち、反対の手に長いフォークのようなものを持って膝まで水に浸かり、大騒ぎしながら、流れが透明なのでたくさんの魚をとっている。

河口ではアンナム人たちが先月、全く種類の違う興味深い漁をした。新しい漁場の杭をうつために泥の中を探っていたところ、精巧な細工の青銅で全体を覆ったクロニューン¹⁴の木の床が、それは一彼らの言うところでは一王の寝床であったが、泥の中から見つかって、地方の知事に献上された。知事はそれを、首都で準備されていた博覧会¹⁵で展示するために、バンコクに送ったところであった。

12. シエム・リエプからコムボン・レーンへ

ムオ以来しばしば語られてきたアンコール遺跡には、驚きと称賛の念が抱かれている。コムボン・スヴァイ郡の主邑であるコムボン・トムを通過して、メコンに面したストウン・トランに到達することを目的とするならば、ソートニコム郡（シャム）、チクラエン郡、ストーン郡、コムボン・スヴァイ郡（カンボジア）を横切って荷車とゾウで行く陸路と、湖を横切る路がある。

後者のルートを別として、乾季に定期蒸気船を考えることは無駄である。定期蒸気船は他の季節になら、トンレサップを行き交っている。水位があまりにも低く、特にヴィエル・ポックの水路では、汽艇ですら往来することができない。コムボン・ハウはコムボン・レーン郡、ニエン・カンレイ山の麓にある。湖の横断は単調で面白くないと思わない限り、旅人は左岸の支流のいくつかの下流域を遡り、そこにある規模の大きな村々で舟を乗り換えて行くことを好まないの、直接コムボン・ハウに向か

¹⁴ クロニューン(Dalbergia)、アンナム語のチャック。

¹⁵ 1882年の博覧会。

う船に乗るべきである。これらの村々は湖岸からさほど離れておらず、シヤムあるいはカンボジア政府の業務のための通常の宿駅となっており、かつ漁民たちの補給基地で、そこでは容易に、小さいボートやクーリー、食糧を見つけることができる。

川を遡ったり下ったりするために費やされる時間は、頻繁に漕ぎ手を取り替えることによって夜でも泊まらなくてよくなるため、大幅に取り戻すことができる。

ヨーロッパ人の訪問者は、一年のうち乾季にはほとんどアンコールに行かない。旅の困難がより大きいと考えられるし、極めて不便な物質状況の中であまりにも多くの時間を過ごさなければならないためである。

シエム・リエプから川の河口近くの大きな村、コムボン・スダムまでの道程は、なるべくなら荷車かゾウで行く。このような輸送手段なら、クラオム山の遺跡への遠足もより容易である。クラオム山は不毛な丘で、その高みからは、湖の隅々が箱庭のように一目で俯瞰できる。

コムボン・スダムからコムボン・ハウ（コムボン・レーン郡）までは、例えば2本オールの船で、岸沿いではなく、湖で想定されるような危険をあえておかして、端から端まで一直線に航行した場合、ボートの交換やクーリーの召集などに要する停泊時間を差し引いて50時間の行程である。

これがその詳細である。コムボン・スダムからコムボン・ブロックまで5時間。そこからコムボン・チャームまで6時間。続いてコムボン・ストウン・チュルウまで12時間。ストウン・サエン河口の村々まで17時間、さらにコムボン・ハウまで10時間。コムボン・チナンはコムボン・ハウの正面である。漁期の間はプノム・ペンに戻りたいならば、コムボン・チナンで汽艇を見つけるチャンスがあるだろう。週に何回も小さな蒸気船の商船が、この町に立ち寄っている。

コムボン・スダム（右の岸）は普段には何の変哲もない村だが、漁期には大きくなる。漁期には一種の野営地に変身する。漁によってのみ存在する村である。毎年氾濫が引き、土がむき出しになると小屋を建て直す。他の月には、そこで生活している何家族かは自分たちの船に寝泊まりするが、住民の大部分は他の場所に行き住む。同じような状況で形成される数多くのセンターの大部分がそうである。いくつか稀な例外もあるが、コムボン・ブロック（象牙の岸）もその1つである。

コムボン・ブロックはストウン・ロールオス河口から15分に位置しており、その小屋は3メートル50センチ～4メートルの柱の上に立っている。その柱は大変にか細い

ので、氾濫の間、どうやって最初の突風にたえているのか疑問である。梯子や床の役割を果たしている編垣が大変にひどい状態なので、カンボジア人の漁師の家に上がり込んで屋根の下に座ろうとは思わない。彼らはそこで大変にくつろいでいるが。

ストウン・ロールオスはストウン・サセットとも呼ばれており、ダンレーク高原から切り離された支脈、プノム・クーレーンで生まれる。あまり重要な川ではなく、この時期にはほとんど水はない。この川がソートニコム郡とシエム・リエブ郡を隔てている。ロールオスは現在の知事の居所で、地区の最も重要なセンターであり、この川を2時間遡った所にある。その岸や内陸にはかなり村が多いのであろう。この地は良く耕されていると言われており、かなり大量の米を商業に出す。

コムボン・チャームの川は、はるかに重要である。その下流域は、現在のカンボジア王国とシャム王国の境界となっている。その河口や土手の上に作られた数多くの漁民の野営地以外で最初に出会う村は、大きな村のコムボン・クレーンである。湖から1時間、右岸（シャム側）にあり、その小屋の背後には巨大な水田の平原がある。少し前から河川が少し浅くなり始めたので、住民たちは漁の準備をしていた。湖でも川でも、漁はまだ行われていない（3月初旬）。

コムボン・クレーンを出るとストウンは広がり、コムボン・チャームに着く前に、複数のか所で100メートル近くに達する。川は大変に活気づいている。始終、かなり大きな船を追い越したり、すれ違ったりする。ほとんどいつも乗り込んでいるのは中国人で、塩や綿布、簡単に売れるような品物を積んでいるが、全てカンボジア人の村々で米や魚と交換するためのものである。

コムボン・チャームはコムボン・クレーンの1時間先で、左岸にあり、従ってカンボジアに属し、チクラエン郡に所属している。かなり大きなセンターである。半ダースほどのジャンクが土手の上で建造されている。ストウンの流れはここでは目立つようになっており、相当量の流量があると想定できる。大湖のこの岸の他の支流の大部分同様、その上流部に関する情報が欠けている。わずかに存在する情報からは、米の豊かな地に見える。水位の高い時期に内陸から粳をプノム・ペンに運んでくる大きなボートの多くが、コムボン・チャームから来る。コーチシナの蒸気船も何度も川の入口に停泊したことがあるが、運賃が不十分であるとか、商人たちとのあらかじめの交渉が不十分であるとかして、儲かる積み荷は見つからなかった。

同じ道を通って大湖に戻る。すなわちストウンを下る。12時間先にある同じくらい

の規模の村、コムボン・ストウン・チュルウでは、往復で経路が違っていた。この村は同じ郡の同じ名前の川の岸にあるが、プレーク・モアト・クラ、プレーク・モハット、プレーク・チョン・キエル・クラ、プレーク・ブン・ヴェーンなど、数多くの小さな川の河口を次々と通り過ぎた後、その入口を見つけることができた。

プレーク・ストーンとプレーク・ベアンがストウン・コムボン・チュルウの次に来る。これらの流路は平行している。

ストウン・コムボン・チュルウは一種の天然の水路を介して、プレーク・ストーンに結びつけられている。プレーク・ストーンはトンレ・チマーという名の池に注ぐ。この池はプレーク・ベアンと、先のものと同じような水路で結ばれている。コムボン・チュルウを出て道なりに進むと、プレーク・ベアン経由で湖に到着する。

プレーク・ストーンは3本の中で最も大きい。自らが潤している地方の名前の由来となっている。池の中の河口近くに、漁民が集まったピエム・ランの村がある。

トンレ・チマーは直径4~5キロである。それを取り囲む地とともに、森に半ば征服されており、大湖のように土手がない。池を取り囲んでいる大木は3月でもまだ、根元を水に浸している。

ストウン・コムボン・チュルウとプレーク・ベアンの道の他に、トンレ・サープには4本の水路、プレーク・チャー・クレート、プレーク・バック・ダオ、プレーク・ピエム・ブン、プレーク・クラッが通じている。

その晩の池の光景は風変わりで、好奇心をそそるものであった。緑がかかったクリーム状の物質に、文字通り覆われていた。この物質は乾季の間、海の方に押し流されてゆき、非常にしばしば、湖の河と後江に染みをつけて汚してしまう。その表面はまぶしい月の光に照らされて、奇妙な光を反射している。岸の大木の影が限りなく引き延ばされて映っているのが川の入口に似ていて、半分寝ぼけている漕ぎ手を騙すので、出口を見つけるためには日の出を待たねばならない。

しかしながら湖の岸の人々は、自分たちを養ってくれる耕地を見事に知っており、我々が知らない目印を持っている。チュローイと呼ばれる岬を形成する木々の突出部のそれぞれに、それがどれほど小さくても、個別の名前を与えている。チューンと呼ばれる取るに足りない小湾をなす陥入部のそれぞれもまた、個別の名前を持っている。

プレーク・ベアンの入口からまっすぐにストウン・サエンの入口に進むよう、漕ぎ手に決心させるのは難しい。「この丸木舟では」、彼らは言う、「風が起ったら、沈没

してしまう。」しかしながら水深は2メートルそこそこで、深さは一定なのである。

ストウン・サエンはトンレ・サープの大きな支流の1つである。コムポン・スヴァイの地を流れており、後にそこで再び出会うことになる。河口が3つあり、それぞれの岸に大きな村がある。

それらはパット・ソン・ダイ、サエンとミエンという名である。一年のこの時期には異常な活気があり、人口は3倍以上になる。大勢の漁民たちが、小屋もなく、船もなく、群になって、小島や乾いた大きな土手の上で野営している。

そしてヴィエル・ポック（泥の平原）に入る。ここでは水深はより浅く、漁が真っ盛りで、泥は多くの場所でむき出しになっている。何週間かすると、ほとんど液状の泥の上を、ボートか丸木舟で滑って行き来しなくてはならないだろう。

次の到着点で終点でもあるコムポン・ハウは、コムポン・レーン郡では最も大きな人口密集地である。湖の河の岸にあり、ヴィエル・ポックのほとんど入口近くにあつて、そこの人々もまた、主に漁を生業としている。

ニエン・カンレイの山から近距離にあり、この山と同じく、この地では歴史を持つ地名（呼び声の岸）である。そもそもコムポン・レーン（放棄の岸）も、通常とは対照的に居住地を示すのではなく、水の畔、山の麓から地区の境界までを指す名である。

これら3つの地名は、奇妙な伝説と関連している。

カンボジアの伝承では、リエチコルの物語で見たように、カンボジアのこの地域にあった海の水の後退、最終的な消滅を、プノム・ダンレークとプノム・クラヴァンの間の土地の隆起で説明している。これと同じように湖の形成は、より新しい時代に起こった沈降で説明されているのである。

13. ロッティ・サエンの物語（大湖の形成）

以下に、その出来事に関連する伝説を、短くまとめて述べることにする。

前半のタイトルはニエン・ピードンドップ（12人の若い娘）である。親指太郎の童話と酷似しており、起源を同じくするのではないかと思うほどである。

1人の貧しい樵に2人ずつ双子の12人の娘がいた。あまりにも貧しかったために、彼はやむなくこう言って妻を説得した。「これ以上子供たちが飢餓に苦しむところを見ていられない。あの子たちを森に置いて来れば、きっと精霊たちが我々の祈りを聞き

とげて、あの子たちを庇護してくれるだろう。」

そして数日後、妻が折れたので、彼は枯れ木を探しに行くと言って娘たちを森に連れて行き、捨ててきた。

しかし彼女たちは、末娘のニエン・プウの先導で道を見つけ出し、小屋に戻ってきた。父親は再び彼女らを捨ててに行った。

ヤック〈夜叉〉の女王が、彼女らが死にかけているところを通りかかり、彼女らを王宮に連れて行って庇護した。(ヤックとは伝説上の人物で、人肉を喰らう。)

この女王はサントミエといった。彼女は寡婦で、まだほんの小さな娘が1人いた。彼女は自分が連れてきた人間たちを世話するよう命じた。近くで見張りながら、しばらく手厚く世話をした後、御馳走にしておもうと思ったのである。

しばらくするとニエン・ピードンドップたちは成長し、素晴らしい娘たちになった。サントミエは長女の喉をかき切って殺すよう命じ、お腹を減らしておいて美味しく食べようと、ゾウに乗って散歩に出かけた。

城の城壁の下に穴を掘っている1匹の白ネズミが12姉妹にその運命を警告し、人食い鬼が大門を過ぎた瞬間に彼女らを逃がして、安全な道を教えた。

戻ってきたサントミエは衛兵たちをたたきのめし、手下たちに樵の子供たちを追わせたが無駄だった。

やがてサントミエは、ニエン・ピードンドップたちの行方を知った。ある朝泉に水を汲みに来たアンコールの王の奴隷たちが、彼女たちが1本の大木の枝に眠っているところを見つけた。彼女たちは疲れきって、そこで夜を過ごしていたのであった。これを知らされた王は、彼女たちの美しさの虜となり、自分のハーレムに迎え入れた。彼女たちは王の寵姫になった。

ヤックの女王は子供を手下に託し、絢爛たる王女に化けて、同じ泉の畔に座っていた。(ヤックたちは意のままに変身できる能力を持っているのである。)

ニエン・ピードンドップたちと同じように王子の前に連れて行かれたサントミエは、やすやすとお人好しの寵姫たちにとって代わり、移り気な帝王に、打ち捨てられた雨水溜めの中に彼女たちを押し込めてしまうことを約束させた。

サントミエは王には内緒で、ニエン・ピードンドップたちを穴倉に降ろす任務を負

った衛兵たちに、その前に彼女らの目をえぐり出してしまうよう命じた。

彼女たちは墓穴の中で盲いて暮らした。彼女たちは全員、妊娠していた。サントミエは彼女たちに十分な食事を与えないようにしていた。彼女たちは産褥期にある間もずっと食事を禁じられていたので、産み落とす端から子供たちをむさぼり食った。

ニエン・プゥだけは自分の子供を助けることができた。彼女は死産だったと言い、証拠として、取りのけておいた腐敗した遺骸を飢えた姉妹たちに与えた。

死刑執行人の策略か失念か、ニエン・プゥには右目が残っていた。彼女はなにくれとなく、盲いた姉妹たちの世話をした。わずかな糧が届くと、一サントミエはおそらく子供たちを始末したと思っていたのだろう一、大喜びで全て子供に与えた。今や姉妹たちも、子供の存在を知らされていた。

彼女たちは子供にロッティ・サエンと名付けた。彼は少年になると1人で穴倉を離れ、人に見られずに戻ってくるができるようになった。

彼は他の子供たちと遊びながら稼いで、素晴らしい闘鶏を手に入れた。その鶏は常に勝ったので、彼は夕方になると食糧を背負って帰ることができた。

憎むべき獄の中でも豊かに暮らすことができるようになってしばらく経ったある日、闘鶏に集まった群衆の騒ぎ声にひかれて窓に近づいたサントミエは、ロッティ・サエンをじっと見て、その面ざしに不審を抱いた。そこで彼の後をつけさせ、翌朝王宮に呼び寄せた。

彼女は彼に言った。遠くまで届けなければならない重要な手紙があるので、お前を使いに選んだのだと。もし首尾良く行けば、たくさんの褒美を与えると。

彼は王侯のような衣装を着せられ、馬に乗ってたった1人で出かけた。

ある日くたびれたロッティ・サエンは、1本の木の下で眠っていた。1人の隠者が通りかかり、彼に近づいて、馬の首から手紙の入った竹筒を取り、封印を破って中身を読んだ。

ヤックの女王から娘に宛てて、わずかこれだけの言葉が書かれていた。

「この若者が着いたら、殺せ。」

隠者は手紙を破り、代わりにこう書いた。

「この王子が着いたら、夫とせよ。」

そして巧みに封印を戻し、立ち去った。

ニエン・カンレイは母親の王宮で、ヤックたちに守られていた。実にかわいい子供で、庭園の中に閉じ籠もって暮らしていた。

彼女はロッティ・サエンが扉のところで入門を断られて騒ぎとなり、彼女の目の前に引き出されてきた朝、大変な困惑を感じた。

彼の方も彼女を見て、口がきけないほど狼狽した。馬から下り、挨拶をして、差し出された盆の上に手紙を置き、案内に従って大広間に向かった。

互いに向き合って座ると彼らは大変に心を乱され、1人の老いた召使いが手紙の中身を読もうとしても、ほとんど耳に入らなかった。

読み終わるや否や、歓喜の大騒ぎが起こった。たちまち娘にならって、王宮中が新しい主人の足下にひれ伏した。

長い長い儀式が終わると、優雅なカップルはそっと出て行き、大木の下に消えた。ニエン・カンレイは夫に、巨大な庭園やその泉水、あちこちに散らばっている無数の大建造物を見せようとした。

最後にロッティ・サエンの妻は、大変不安そうに迷いながら、小さな離れの閉じた扉の前で立ち止まった。

「最後に母がここを私に見せたとき、こう言いました。『この屋根の下に隠された秘密を明かしたとき、我々に不幸と死が降りかかってくる。』」

彼女の手の中で鍵がふるえていた。ロッティ・サエンは彼女をなだめた。「開けないで。この家に隠されているものの話をしてくれればいから。もし君のお母さんが出て行ったときに僕がここにいたなら、きっと僕にもお守りを任せたいと思うよ。」

彼女は彼に近づいた。「テーブルの上に金箔を貼った銀の甕があって、その中に12人の女の人の眼球がごちゃまぜになって入っています。脇の小瓶には、それらをよみがえらせて、元の眼窩に納めるための薬が入っています。」

甕と小瓶の間には私の母の魔法の杖があって、眼球と薬を隔てているのです。」

ロッティ・サエンの顔には、急に涙があふれ出してきた。「どうしました、旦那様」、彼女は言った、「言わない方がよかったですのでしょうか？」

彼は自制心を取り戻し、彼女を連れて立ち去った。

その夜彼は食事の時に、彼女を酔わせ、眠らせて、鍵を奪った。眼球と薬と杖を手に入れると、サントミエ女王の無邪気な娘の額に口づけてから逃げ出した。

目覚めたニエン・カンレイは馬に乗り、手下の群を引き連れて、夫の後を追った。

逃げ出したロッティ・サエンは1人の隠者に出会った。ロッティ・サエン自身は気づいていなかったのだが、その隠者はかつて彼に会ったことがあり、彼に興味を持っていたのであった。

「目的地に向かえ」、隠者は言った、「もし妻が追いついてきたら、サントミエの杖で、距離を開くことができるのを思い出せ。もし追っ手を足止めした方が良いと思っただら、この小枝を投げよ。」

若い妻は大急ぎで追いかけて、やがてロッティ・サエンに追いついた。

彼はそれを見て、右手の杖を取った。馬を宙に躍り上がらせ、止めて向きを変え、忘れ去ろうと思っている女に最後の別れを告げた。

ニエン・カンレイは引き裂くような叫び声を上げ、連れて行ってくれるよう哀願した。もし断ってもついて行くと。

ロッティ・サエンは答えず、再び進み始めた。目は潤み、心は張り裂けながら、地に隠者の小枝を落とした。

その瞬間、若い妻の足下まで地面が広く沈み込んだ。一瞬で無数の川の水が湖を作り出したのである。

ロッティ・サエンは父王の王宮に着き、名乗りを上げ、魔法の杖でヤックの女王の仮面をはぎ、元の姿に戻して殺した。

そして直ちに12姉妹の目が見えるようにし、彼女たちを連れてハーレムに凱旋した。彼女たちはかつての寵愛を取り戻した。

王は一人息子を留めようと様々な懇願をしたが、無駄だった。彼は全てを捨てて出家した。

ニエン・カンレイは夫に気づいて、湖の畔から呼びかけた。彼の姿が完全に地平線の彼方に隠れたとき、彼女は手下たちを帰し、岸にあった1本の木の下に横たわって息絶えた。

14. コムボン・レーンから大河まで

ポーはプノム・ニエン・カンレイの北麓にある重要な村で、コムボン・レーン郡の

長の居所である。

コムポン・ハウから牛車で2時間である。この2地点の間の平原は、増水期にはひどく浸水する。高い草に覆われており、ポー・アンダエトから先は全く耕されていない。ポー・アンダエトは出発点から15分くらいの集落で、1つのパゴダの周囲に集まっており、浸水を避けて2メートル以上の盛り土の上に置かれている。

コムポン・ハウからコムポン・スヴァイ郡の主邑コムポン・トムに向かう際に判断できたことと、得た情報によると、ポーはこの地区の人が住んでいる部分のセンターのようなものである。菩提樹〈*figus religiosa*〉と同じ名前だが、それはこの地区全体において大変にありふれた木である。ポーの周囲の土地はタバコ、トウモロコシなどの畑に耕作されており、ニエン・カンレイの延長である小さな丘々の下部まで続く。

そこからコムポン・トムに着くまでは、2日間歩かなくてはならない。

街道の前半はまず、所々石で覆われた、耕されていない土の上を通っている。一般的にプノム・コムポン・レーンと呼ばれている丘の間に行く。そこにはプノム・ニエン・カンレイの他に、トラン、ボン、ポンレイ、キエイタート、ルミエ、トゥーク・ミエスなどの峰々が含まれている。

これらの山々は概して大変に低い。現地の人が山の小グループそれぞれの中に、数えるのにも長くかかるであろうほど、何の変哲もない頂を相当数見分けられるのは、そこに多数ある「大時代」の遺跡、あるいはそれにまつわる伝説のためである。

山々の中央を通る道程は大変に興味深いものである。時々案内人が左右の峰の上に、崩壊した塔や、逆さまになった祭壇があるのを指し示す。かなり保存状態の良い塔が1つ、プノム・トゥーク・ミエスの先端に立っているのが特に目をひく。

この地の街道である隘路を抜けると、再び土地は耕されているようになり、キエノック、プーム・カンダール、テロ・トムの3つの村が相次いで現れる。

ストウン・サエンとストウン・サエンから同程度にかなりの距離のあるこれらの河川については、後で述べる。3つの村は水の流れに面していないにしても、ゆったりとしていて、村の周りでは割合大規模な耕作が行われているという特殊性がある。

右手のブン・トム（大きな沼）が、異なる土地の始まりである。ここでは氾濫の影響が感じられる。通ってきた土地は氾濫と大河の間にあり、これらの山々が1つの島をなして、コムポン・トムを越えるまで北に広がる。

村々の最後、テロ・トムから22キロにある、もう1つの大きな沼ブン・スダオはほ

とんど乾ききっており、その岸にはいくつかの漁場が放棄されているのがまだ見える。道程には1つの集落も現れない。この無人の地は、時々わずかに木が生えているが、たいていは大きな草に覆われており、スヴァイ・ドーン・カエウからバット・ドムボンへの平原に似ている。

ブン・スタオはこの場所で、コムボン・レーンをコムボン・スヴァイから切り離している。

沼からコムボン・トム（約10キロ）までの中途にあるスタオが、東に延びている一連の集落や大村の最初である。それらを結んだ線が、コムボン・トムからメコンに到達する街道である。

コムボン・トム（大きな岸）はストウン・サエンの左岸にある。ポーからそこまでのあいだでは、河川を横切ることはない。コムボン・トムの小屋が大草原の終わりである。

先のシー・ヴァッター王子の反乱の間に建てられた、1辺が100メートルより少し大きな柵の囲いの中に、知事とその部下たちの家がある。しかし彼らは大勢の住民たちと同じように、川の上の大きな船に住んでいる。村は裸で、平原のように全く木がない。正面あるいはその続きにある対岸の集落の方が、はるかに魅力的である。

ストウン・サエンはストウン・コムボン・スヴァイとも呼ばれているが、大きな河で、プノム・ダンレークを発し、3つの河口からヴィエル・ポックに向かう。河口はすでに見たように、ピエム・パット・ソン・ダイ、ピエム・サエン、ピエム・ミエンと名づけられている。

ここでは幅が80~100メートルである。3月半ばでも幅20~30メートル、深さ1ピエの水面が残り、砂の上を速く流れている。

土手は高さ6~7メートルである。川床の内側の斜面は、切り立っていないところでは、タバコのプランテーションや、長く伸びた小庭に覆われている。住居となっている船は、砂の土手の上に乗っている。

コムボン・トムは一定の重要性を持つ行政センターであるが、それ以外の点では、センターに関する一般的な観念に当てはまらない。一年のある時期には砲艦も航行できる素晴らしい河川のことを考えると、それはコムボン・トムをトンレ・サープに結びつけ、プノム・ペンと連絡し、そしてとりわけ現地人が採掘している鉄鉱山の近隣にある。そこでは明らかに、比類ない富が今日まで無駄にされてきたものである。

市場はなく、内陸の産物を出口まで持って行くことができるだけの資本を持つ中国人や現地人の商人もいない。しかしながらこの地は、鉱山以外でも興味深い。とりわけ北方の森の中では、かなり大量のガンボーシが採集される。ストウン・トランからやってきた中国人が、それらと綿布などを交換する。彼らは買い付けが終わると、再びメコンの路に戻る。

プノム・ダエク（鉄の山）はストウン・サエンの右側、かなり離れたところにあり、その開発を計画するならば、輸送のための道が必要となる。川から最も近い丘でも30キロはあるからだ。ガルスリー氏は1875年にここで鉱石を採集し、国立工芸院の一般化学事務室と、リア（ピレネー・オリアンタル）の溶鉱炉および製鉄所に送り、技師のブーランジェ氏がその結果を、『エクスキュルシオン・エ・ルコネッサンス』10号で公刊した。

コムポン・トムからストウン・トランまでの街道はほとんど直線で、その経路上にある数多くの村々に立ち寄るためにも、ほとんど道から外れる必要がない。

コムポン・スヴァイ郡、バライ郡、ストウン・トラン郡によって均等に分割されている土地を、4日間歩く。

唯一の重要な河川がストウン・チニットで、その左岸でも右岸でも、これから出会うストウンのほとんど全てはそこに流れ込む支流である。

道はまず、スダオのすぐ近くまで行く。コムポン・トムに着く前に見えた最後の村である。まずその水田を、そして次々と、ソムラオン、セヤオ、プーム・ユークの水田を横切っていく。右手、プレーク・コムポン・トモーの岸にあるきれいな住居の群である。

プレーク・コムポン・トモーは、乾季の初めの月から乾いている。幅は8~10メートル、深さは2~3メートルで、ストウン・チニットに向かって流れる。その水の一部は東側に見え始めたプノム・セン・トゥークから来ており、一部はストウン・サエンあるいはそれが形作る沼から来る。

クレコー、セン・トゥーク、チュロープが街道沿いに、互いに等間隔にある。それぞれが25~30軒の小屋を持ち、その農地は水田で、家のそばに大変に小さな菜園がある以外、他の作物は全くない。

チュロープでは、土壌が大変に湿っている。セン・トゥークの丘々から来る小さな小川のせいで、ここでは遅い稲を作ることができる。

プノム・セン・トゥークは左手、東西に延びており、その麓はチュローブからわずかに1,000~1,500メートルのところにある。それらは大変に低く、均整が取れていて、豊かな植物に覆われ、北方には延びていないように見える。

チュローブと通常最初の夜を過ごすことになる大きな村、コムポン・カッサンの間には、文字通り耕されていない平原が広がり、数キロに渡って、より発育がよいとはいえ、香りも見かけもタイムに似た、小さな植物が覆っている。カンボジア人はこれを、ムレチ・トンサーイ、ウサギのコショウと呼んでいる。プノム・ペン以来、街道沿いでこの植物を見かけたのは、このただ一度だけであった。トラン・カッサンは同じ名前のストウンの左岸に、100軒ほどの小屋がある。

この川はストウン・チニットに流れ込む支流で、プノム・セン・トゥークから来る。幅は12~15メートルで、まだ半ピエの水があった。漕ぎ手たちが砂の上で、2~3艘の小さな船を押して、川の下手を目指していた。ゆえに少し離れたところでは深さが増し、航行可能なのだと分かる。

プーム・プラサートは素晴らしく耕された地にあり、トラン・カッサンから3キロである。そこでは全ての小屋が孤立している。

この村の名前の由来は、1つの彫刻を施されたレンガの塔である。その保存状態は完全で、この塔を背にして、土地の僧侶たちがパゴダを建てている。

この遺構は高さが12メートルほどである。その扉は巧みに直角に切られた、肌理の細かい砂岩のブロック3個からできており、外側の表面は浮き彫りで飾られている。

笠石には繊細な装飾が施されている。右の柱の上には、剣を手にした1人の王子が彫られている。左側には、ハスの花を持った王女が彫られている。この2つの浮き彫りは高さが1メートル30センチで、笠石とともに完全に無傷である。

門の中には、右側の柱に1つの碑文があるが、その文字の大部分は消えている。

プラサートを出て右手に、耕された土地を離れて少し木の生えた平原の中を進むと、ブン・モーンがある。大きな沼であるが、水は最も低いところにある。これを通り過ぎるとすぐに、景色が変化する。

ストウン・チニットは、巨大な水田の平原の端を流れている。その両岸は通り過ぎてきた大きなストウン同様、果樹に覆われており、近接して大変多くの村々がある。ここに到達する前には1つもなかったような、広大な人口密集地である。

スピエン・チェイとモーンは2つの大きな村で、この平原の入口に、ほとんど向き

合うようにして位置している。スピエン・チェイが道の左に、モーンが右にある。通常、素晴らしい村であるコムポン・トモーで川を渡る。

ストウン・チニットは、そこでは幅 35～40 メートルである。乾季が進んでいたにもかかわらず、まだ 6 ピエの澄んだ水があった。その土手は立派な腐植土で、高さは 6～7 メートルある。

この川はモルー・プレイ地方から来て、最初はストウン・ダーツ、ストウン・バルーンという名である。アルマン医師とガルスリー氏の旅によって、その上流部については分かっている。プノム・ペンの北方 45 マイルで湖の支流に注ぎ、河口から 27 キロのソムラオン・サエンでは兩岸に貝の地層があり、現地人が石灰を作るために利用しているが、とりわけヨーロッパ人には、大量の磨製石器と青銅器が発掘¹⁶によって発見されたことで有名である。

コムポン・トモーでは、カンボジア全体でそうであるように橋がなく、船で渡河している。しかしここでは土手の高さゆえに、例えば対岸に米の荷車を渡すような場合には、あまり便利な手段ではない。もっともこの地の産物はほぼ全部がストウンを下っている。

この川はコムポン・スヴァイ郡の境界である。左岸はバライ地区に属する。バライは街道が通る重要な地ではあるが、ほとんど知られていない。

その主邑、ドーン・ドゥオンは、ストウン・チニットから約 7 キロである。そこに到着するまでに、トゥオル・サーラー、チャムボックとコーンの村々を過ぎる。耕作された地であるが、進むにつれて貧しくなっていくように見える。

ドーン・ドゥオンはやっと半マイルほど、森の始まりを過ぎたところにあり、かろうじてその名に値する程度の木が生えている。

住民たちが数日前に草を焼いたので、土地は裸である。葉は落ちるか黄色くなり、地面は半ば赤みを帯びた砂岩の砂利に隠れ、所々道の上まで、巨大な岩塊が現れていた。

木々はすでに挙げたような、カンボジア人たちがクローン、トラーチ、トバエン、ティエルなどと呼ぶ、Dipterocarpus に属する。

¹⁶ 『エクスキュルシオン・エ・ルコネッサンス』一号、コル医師、「ソムラオン・サエン（カンボジア）で発見された、磨製石器と青銅器の時代の遺物に関する報告 Rapport sur les objets de l'âge de la pierre polie et du bronze recueillis à Somrong-sen (Cambodge).」。

一年のこの時期の耐え難い暑さでは、このような土地を歩くことは、人にとっても動物にとっても骨の折れることである。ドーン・ドゥオンからコムポン・スヴァイとストウン・トランの間の2番目の宿泊地であるチャムカー・アンロンまでの10キロの旅程の間、小川も沼もない。

湖の支流以来旅してきた沖積土壌が突然入れ替わるのは、驚かずにいられないものだったが、予告されていなければチャムカー・アンロンの土地が与えたであろう驚愕には、はるかに及ばない。

チャムカー・アンロンに着く数百メートル手前に、干上がった、深く切り立った1本の小川がある。これは北方わずかに離れたところで生まれ、雨が降るとストウン・チニットに流れ込む。

その右岸の土壌は黄色っぽい粘土で、砂が混じっている。左岸の土は濃い血の赤で、ねばねばしている。右岸の植物は貧弱で、左岸は素晴らしい。

村には40軒ほどの小屋があり、森の真ん中の狭い空間に、互いに押し合いへし合いしている。村の住民たちは自分たちに必要な水を得るために、8~10ピエの井戸を持っている。水は土色である。静止させておいても、湖の水よりも濁っている。

チャムカー・アンロン（深い庭園）は森に由来する名前である。うまく名づけたもので、旅の中では最も豊かな森であった。15キロの間、一瞬たりとも変わらないこの森の陰を行く。

他の2つの村、アン・チューンとロヴィエが道の近くにある。これらはチャムカー・アンロンと似た状況で、それぞれ重要性がある。

現地人が小屋を建てたときに周囲に植えたココヤシ、オレンジ、ジャックフルーツなどの果樹によって、いくつもの場所で、放棄された集落の跡地が分かる。これらの果樹は早速空き地に進出してきた森の木々と、枝を交えている。

森の巨木は、素晴らしいコーキー(Hopea)(?)、ティエル(Dipterocarpus)、プディエク(Anisoptera)、巨大なチュレイ(?), トロバエク・プレイ(?)などである。トロバエク・プレイという名は、カンボジア語で野生のグアヴァを意味する。その幹は皮がすべすべしていて、巨大な帆布にドレープを付けたような襞や縮れのせいで、船のマストにかかった帆が甲板の上に垂れ下がって引きずられているように見える。

様々な種類の籐、小さな種類の野生バナナ、現地人がその実をアレカの代わりにしている様々な種類のヤシがかなり広まっている。

一般的な貝の1つは、Cyclostoma の一種である。その口の珧瑯質は、地面の赤い色をしている。

森の住民たちは大いに熱病に苦しめられている。しばしばそれにかかって死亡する。このことは、小屋を建てた土地が頻繁に放棄される主な原因の1つである。住民たちはより好都合で、より清潔な場所を探すのだが、そこもおそらく3、4年後には離れなくてはならなくなる。

疲れた通りすがりのヨーロッパ人は、この森の悪霊によって死ななくてはならなくても驚かない。現地人はヨーロッパ人が病気になるのを見ることを別の流儀で心配する。—もしヨーロッパ人が村へ行って不幸が起きたら、どんな面倒なことになるであろう—この場合、ガイド、牛車、あるいは運搬人を雇うために長くかける必要はない。

森はチュロークで終わる。沼の近くに20軒の家がある。

この沼を渡らなくてはならないが、水は脚の中程までである。幅は半キロである。沼を形成しているのはオー・ロムナチで、幅4メートル、深さ3ピエの小川である。ストウン・チニットに向かって、岸いっぱいに流れている。

あちこちで遅い稲が植えられており、チュロークを離れるとすぐに村々が姿を現す。それらは岸や川の近くにある。ストウン・トラン郡の長の居所、スプーで、この川を渡る。

オー・ロムナチはストウン・トランとバライを隔てている。

スプーはかなり大きなセンターで、ほぼチャーム人だけが住んでいる。

チャーム人は左岸のあらゆる方向に見える村々にも住んでいる。彼らはかなり大量の米を収穫し、牛を育て、森の木々を伐採する。

このスプーで、北方で採集されたガンボージの大部分が売られている。中国人の買い手たちはより安い価で買うために、4月末や3月中〈原文のまま〉に行商人が到着するよりも前にここまでやってくる。

メコンの右岸の森のガンボージは、シヤム湾岸のもの（もっぱらくメールの郡であるコムポート、コムボン・サオム、トポーン、およびシヤムの地方であるコッ・コンとクラートで採集される）よりも質が劣る。それらはプノム・ペンでピクル当たり45ピアストルする。市場にもたらされる量は、カンボジアの政府に税として引き渡されるもの以外でも数百ピクルある。

1人のヨーロッパ人仲買人が1881年に、ガンボージを買いに現地にやってきたが、

中国人との競合のために、3週間で12,000フラン分ほどしか買い求められなかった。

スプーからソピエまでは、季節にもかかわらず、多くの場所で湿っていた。この特性は指摘しておく価値がある。おそらく遠くない将来、この土地の価値を利用することになるだろう。現時点では不十分な数の人々が、いわば最低限必要なものしか生産する気もなく、やっと掘り返しているに過ぎないが。

道沿いの村々の名は以下の通りである。アンティエイ・チェイ、トラペアン・ルセイ、アンサー・チュレイ、トラペアン・トラ。それぞれ極々小規模である。アンティエイ・チェイとトラペアン・ルセイの間には、オー・トラペアン・ルセイが流れている。幅8メートル、12～15ピエの岸の間には、まだ豊富な水が流れている。川底はここでは石ころだらけである。南に少し離れたところにある高みから発し、北に流れて、ストゥン・チニットに合流する。

ソピエはスプーと同じくらい大きな村で、24キロ離れたところにある。この村からブン・クナイルまでは、大きな沼が街道をふさぎ、プレーク・コツという名の小さな水路からメコンに注いでいる。この地では水田耕作だけがなされており、2つの美しい村、ロヴィエ・チュロムとトゥオル・ペ克蘭がある。

2つとも、大河の氾濫の範囲内にある。ここからその流域に入るのである。例年2メートル近くの河水が、トゥオル・ペ克蘭の耕地を覆う。小屋は大変に軽微な高台の上にある。

カンボジア人たちが組織した一種の渡し船が、ブン・クナイルを渡るのに用いられる。それは竹の筏で、荷車や動物の運搬用として、かなりよくできている。

幅100メートルほど、深さは8～10ピエである。メコンとはわずか数キロの隔たりであるが、現在、水位の差は何メートルもある。水はプレーク・コツからメコンに注いでいるが、傾斜が急で、岸から岸へと川床を横切るように大量の枯れ木が倒れ込んでいるので、水位が高いときでも航行することができない。

おそらく北に見えるストゥン・トランの丘々から流れてくる小川が、沼に水を供給している。この丘の麓まで沼は広がっている。小さな川の入口やブンの他のいくつもの地点に、アンナム人の漁場が設置されている。

メコンまでの道程は、盛んに開発されている森を抜けていく。開発の結果、森の中では高級な樹種はまれになっている。

木々に氾濫の痕跡が残っている。

街道と交叉する大変な悪路を一步進むごとに、切ったばかりの大きな柱に繋がれた、2頭あるいは4頭立ての水牛がいる。小屋の杭にするような小さな柱が、ずっしりと荷車に積み込まれている。そのどちらもが岸に向かって進んでいく。

非常にたくさんの孔雀がいるが、人に追い回されたことがほとんどないので、恐れる様子もなく木の枝にとまっている。

樵の斧で地面に切り倒された木々からは、昼は幹に掘った穴の中で寝ている、様々な種類の滑空する樹上性哺乳類が逃げ出していた。この美しい動物は見るのも珍しく、捕まえるのは困難だが、彼らの優雅な飛翔に魅惑されて、旅人はつい追いかけてたくなる。捕らえたいというよりも、それらの風変わりな逃げ方を長く楽しみたいのである。

この地域では、ヒョウやトラは珍しくない。彼らは野獣だけでなく、川沿いの家畜にもひき寄せられてくる。

時々、カンボジアの他地域と同じように、林檎の半分ほどの大きさに、白くて簡単に砕け、石灰の一片のように細かい粉になる物質でできた、強いアンモニア臭がする小さな塊が地面の上にあることがある。

これは現地人たちの言うところでは、乾いたトラの乳である。

彼らによると、子供が死んだかあるいは別の原因で、乳が張って不快になった雌のトラが、乳房を荒々しく地面に押しつけて乳を捨てたのだということである。地面に残されたかぎ爪の跡によって、現地人はそれが本物であると認める。

同じく旅行中にこれらを見たアルマン医師は、分析の結果、現地人たちの言うことは是認できると認めた。

乳は大変に濃厚であり、急速に乾く。

カンボジア人たちは様々な病気の治療薬として、そして何よりも失った力を取り戻すためとして、これをアルコールで溶いて飲む。

これは大層高く売れる。トラの乳は、カンボジア人が唯一利用するものである。

アンナム人たちは眼病を治すのにこれを使う。

ストゥン・トランの住民たちのプランテーションが森を少しずつ浸食し、毎日火や斧で、新しい開墾地が作られている。大河の両岸のいたるところに見られるプランテーションと同じように、様々な種類が植えられている。綿、桑、藍、タバコ、トウモロコシ、サトウキビなどである。土手沿いの狭い道の端に多数建てられた小屋まで、プランテーションは続いている。

岸に到着するまさにその瞬間まで、メコンの青い水は、巨大な果樹の葉にさえぎられて見えなかった。

.....
.....

ストウン・トランの前に停泊し、コーチシナに戻る準備をしていた砲艦アルポン号¹⁷の船長の心遣いのお陰で、この船に乗ってプノム・ペンまでの旅を完遂することができた。

¹⁷ 海軍大尉ボノー氏が、大河で一つの任務を終えた。その報告は、『エクスキュルシオン・エ・ルコネッサンス』第9分冊にある。

(付1) 「バンテアイ・ネアン碑文解題」

松浦史明

バンテアイ・ネアン小丘は、現在のカンボジア、バンテアイ・ミアンチェイ州モンコル・ボレイ郡にあり、モンコル・ボレイの町から南に3km程のところに位置する。この小丘からは3つの碑文が発見されており、その内の一つが今回の碑文である。

19世紀後半に発見されたこの碑文は、石版の形をしており（高さ54cm、幅35cm、奥行き8cm）、その両面に文字が刻まれている。表面にはサンスクリット語が20行と、基部にあたる部分にも同じくサンスクリット語が1行刻まれている。裏面には20行刻まれており、6行目の途中までがサンスクリット語であり、残りは古クメール語である。サンスクリット語で書かれた部分は韻文であり、韻律はŚloka（第1-9偈）、Vasantatilakā（第10偈）からなる。

さらに表面上部には、花卉に縁取られ、蓮弁の上に半跏趺坐して合掌する坐像が表現されている。この坐像には、ムクタ（宝冠）やディアデム（冠帯）、耳飾りなども確認でき、美術様式としては、やや粗雑でバランスを欠いているが、滑らかな肉取りであることなどから、クレアン様式（10世紀後半～11世紀前半）に近いといえる。

この碑文の存在は早くから知られており、1882年にアベル・ベルゲーニュにより紹介され〔Bergaigne 1882: 178〕、1902年に刊行されたエティエンヌ・エイモニエ著『カンボジア』第2巻にはヘンドリック・ケルンによる詳注が掲載されている〔Aymonier 1902: 305-318〕。カンボジアの碑文を集大成したジョルジュ・セデス著『カンボジア碑文』では、目録番号 K.214 を付され、原文のローマ字化および訳注が掲載されている〔Cœdès 1942: 202-206〕。

現在はプノンペン国立博物館に収蔵されており、2008年9月現在、博物館の一隅に展示されている〔Dalsheimer 2001: 206-207〕。なお、2005年に開かれた展覧会『大アンコールワット展』で、日本でも公開されたことがある〔石澤監修 2005: 72〕。

上掲のシュミットによる翻訳であるが、碑文現物やセデスの訳注と比べてみると、ローマ字化の段階でかなりの間違いが見受けられる。シュミットがどのような形でこの碑文を見たのかは定かではないが、現在では十分判別可能な第8偈の後半以降を「完全に消失している」としていることなどから、かなり不鮮明なものを見たのではと推察される。

よって当然のことながら翻訳に関しても多くの間違いがあり、問題である。

そこで以下に、主にセデスによるローマ字化及び翻訳を参照しつつ、適宜改めながら訳出する。

・サンスクリット語文

[表面 1-20 行、裏面 1-6 行]

siddhi svasti

1. namo stu paramārthāya dharmasāmbhoginirmmāṇa-	vyomatulyāya yo dadhau kāyān trailokyamuktaye
2. bhāti lokesvaro mūrdhnā mitaraśmiprakāsānām	yo `mitābhañ jinan dadhau arkkendvor darśanād iva
3. prajñāpāramitākhyāyai yasyāṃ sametya sarvvajñās	bhagavatyai namo stu te sarvvajñatvam upeyuṣaḥ
4. asti tribhūvanavajro dakṣiṇiyo mahānāgo	yogī vinayaviśrutaḥ nityadāno `pi nirmmadaḥ
5. yasya mātāmaho bhr̥tyas tīrthīnāmnīm dadau dāsīm	śrīnāmā śrīndravarmmaṇaḥ śreyorthī jagadīśvare
6. priyāyai somavajrākhyas yasya saṃsthāpya pātre `smin	syālo lokesvaran dadau vahnivyomanavāñkīte
7. tena pūrvvapratīṣṭhāpya munīndrajananī bhūyaḥ	gotrasya jagadīśvaram sthāpitāgniviyadvilaiḥ
8. pūrvvat tatra deveṣu dāsīdāsahiraṇyādi	kṛtvā gotrasya kalpanām dravyaṃ so dād viśeṣataḥ
9. tebhyo laghutarās santi lobhāt prasahya lumpanti	pañcānantaryyakāriṇaḥ ye `smākaṃ kalpanām iha
10. kṣetrādikiṅkarasunartakaturyyakānām kedāratnakanakābharaṇādiddattam ye yajvanātmadhanamātravinaśaluvdhāḥ lumpanti ye nirayam ugrabhayaṃ prayānti	

完全なる幸福

1. 天に等しい最高の真理¹に帰依する。それは三界の解放のために法・享受・変化の身体²を帯びた。
2. 光輝たるローケーシュヴァラ³は、実に太陽と月が限りある輝きであることを知り、頭にジナ・アミターバ（阿弥陀仏）⁴を置いた。

¹ 最高の真理（paramārtha）は、言葉によって捉えられない究極の真理のことで、真諦、勝義などと訳される。

² 仏教用語にいう三身（法身、報身、応身）のこと。

³ シヴァ神の別名であり、世自在と訳される。

⁴ アミターバ（阿弥陀）の原義は「無限の光明をもつもの」である。

3. プラジュニャーパーラミター(般若波羅蜜)と名づけられた尊い者、あなたに帰依する。全知であるものたちがあなたのもとに集まり全知を得る。
4. トリブヴァナヴァジュラ (という者) あり。その戒律 (礼儀正しさ) で有名なヨーガ行者であり、尊敬されるべき者であり、マハーナーガ⁵であり、絶えず寄進を行なうが慢心しない。
5. 彼の母方の祖父は、シュリーという名で、シュリー・インドラヴァルマンの召使 (大臣) であり、安寧を欲し、ジャガッディーシュヴァラにティールティという名の女奴隷を寄進した。
6. 彼の義兄弟はソーマヴァジュラという名で、彼の妻のためにローケーシュヴァラを寄進した。それは9、空 (= 0)、火 (= 3) で数えられる (年) に⁶容器の中に置かれるべきである。
7. そこでかつて彼の家族に委託されたジャガッディーシュヴァラに、新たに牟尼の母 (仏母)⁷を間隙 (= 9)、空 (= 0)、火 (= 3) (で数えられる年)⁸に安置した。
8. このように彼の家族の神々のために寄進を行い、さらに特別に女の奴隷、男の奴隷、黄金 (貴金属) などの財物を捧げた。
9. 五無間罪 (五逆罪) を犯すことは、貪欲により無理やりに我々のこの寄進を強奪することよりも些細なことである。
10. 奉納された領土、舞踊者、楽師、田野、金や貴石の装飾などの如何なるもの、敬虔なる自我の施物に他ならないものを破壊しようと欲し、強奪する者は、恐ろしい危険の地獄に行く。

⁵ mahānāga は大龍、大象の意で、摩訶那伽と音写される。仏教混淆サンスクリットにおいては、門弟、仏弟子を意味する śrāvaka と同様の意味で使われる [Edgerton 1953]。

⁶ シャカ暦 903 年すなわち西暦 981/982 年を指す。なお、シュミットの翻訳では 908 年 hivyomanava (<ahi (蛇=8) vyoma (空=0) nava (9)) となっているが、最初の字は ahi ではなく agni (火=3) が正しい。ベルゲーニューも同じ間違いをしており [Bergaigne 1882: 178]、エイモニエ著『カンボジア』第 2 巻の中でケルンが指摘している [Aymonier 1902: 309]。

⁷ munīndrajanāni とは、仏 (牟尼) の母の意味であり、さとのの本質を表す。智慧 (プラジュニャー) を擬人化した呼び名である。第 3 偈に出てくるプラジュニャーパーラミター (般若波羅蜜) との関連を思わせる。

⁸ この年代に関し、シュミットによる翻訳では、agaviyadvilaiḥ (<aga (山=7) viyad (空=0) vila (穴、間隙=9)) つまり 907 年としているが、最初の字は aga ではなく agni (火=3) であり正しくは 903 年を表す。前注 6 も参照されたい。

[表面基部]

yo bho[gaṃ] lopayati devadravya[m] te

神々の財物を盗む者たちは・・・。

・古クメール語文

[裏面 6-20 行]

903 śaka daśamī ket mārḡgaśīra vṛhaspativāra nu ācāryya tribhuvanavajra samakṣa nu kule
phoṅ pajvan khñum ta vraḥ kamrateṅ añ trailokyavijayāgīśvarī | gho dharmma si aṅgāra si
khñu si sudāsa si kaṃvai si saṃvār si caṃlau tai paroṅ tai kandeṅ tai kaṃprvat tai kansom
tai paroṅ sot tai kaṃvai | svok vaudi padigaḥ qval thm[u]r krapī qval | sre dakṣiṇāgneya
sthalā lvoḥ vraī dan ār jaṃhvat vyar sre kvan tarāñ ti duñ ta me mau pi jvan ta vraḥ
kamrateṅ añ trailokyavijayāgīśvar | vraḥ kamrateṅ añ trailokyanātha ti ācāryya
tribhūvanavajra oy ta teṅ vai ta phqvan nu loñ somavajra syaṅ ta sanme ni sthāpanā oy ta
kvan nu qnak khloñ | jvan khñum tai kanso tai sthira gho chpoṅ si kantvah si kapur sre
thpvañ tyak ti duñ ta loñ heṃ stuk cok ti samakṣa nu kule phoṅ jaṃhvat vyar aṃruñ vraḥ
bhay mvāy ti jvan ta vraḥ kamrateṅ añ śrī trailokyanātha | nau ge ta sakk kalpanā neḥ ge
svey traitriṃśanaraka yāvāt candrādhitya mān ley || o || kalpanā ta vraḥ praśasta khñum
mvāy yajña mvāy dnāl raṅka ||

シャカ暦 903 年、マールガシラ月の 10 日目、月曜日⁹、アーチャーリヤ¹⁰・トリブヴァ
ナヴァジュラは、家族とともにヴラ・カムラテーン・アン¹¹・トライローキヤヴィジャヤ
ーギーシュヴァリーに、奉仕者（gho1 人、si6 人、tai6 人¹²）、vaudi¹³、盆、唾壺、牛、
水牛を全て奉納した。さらにはずれの未開発の森に至るまでの領域の南と南東にある 2 つ
の帯状の稲田とクヴァン・タラーニュの稲田をメー・マウから、ヴラ・カムラテーン・ア
ン・シュリー・トライローキヤヴィジャヤーギーシュヴァリーに奉納するために購入した。

ヴラ・カムラテーン・アン・トライローキヤナータ¹⁴は、アーチャーリヤ・トリブヴァ
ナヴァジュラが彼の妹であるテーン・ヴァイに捧げ、同時にローニュ・ソーマヴァジュラ
が子供と妻に捧げるために共同して建立されたものである。奉仕者（tai2 人、gho1 人、si2

⁹ アウグスト・バルトによれば、この日付は西暦 982 年 11 月 26 日を指すという [Aymonier 1902: 309; Coedès 1942: 202]。

¹⁰ ācāryya はサンスクリット語からの借用語で、主に宗教上の指導的立場にいる人物を指す。

¹¹ vraḥ kamrateṅ añ は、我が主、我が神などの意で、主に神性をもつ者や聖なる場に用いられるタイトルである。

¹² gho、si、tai は、奉仕者の個人名に付けられる肩書きであり、gho、si は男性を、tai は女性を表す。gho と si の違いについてはよく分かっていない。原文ではそれぞれの個人名を列挙しているが、煩雑を避けるため省略した。

¹³ 容器の一種を指すと考えられているが、未詳。

¹⁴ trailokyanātha は三界の主という意味であり、ローケーシュヴァラの異称として用いられる。

人) を奉納し、ストック・チョークのローニュ・ヘーンから南の水田を購入し、家族の前で 20 ヴラの大きさの帯状の水田 2 つをヴラ・カムラテン・アン・トライローキヤナータに奉納した。

これらの奉納されたものを盗む者たちは、太陽と月が存在し続ける限り、33 の地獄を享受するだろう。

聖なる石碑のための寄進は、奴隷 1 人、供犠 1 つ、dnāl の精米¹⁵である。

参考文献

- Aymonier, Etienne. 1902. *Le Cambodge II, Les Provinces Siamois*, Paris.
- Bergaigne, Abel. 1882. “Les Inscriptions Sanscrites du Cambodge,” *Journal Asiatique*, 7-20, pp.138-194.
- Cœdès, George. 1942. *Inscriptions du Cambodge II*, Hanoi.
- . 1966. *Inscriptions du cambodge VIII*, Paris.
- Dalsheimer, Nadine. 2001. *Les Collections du musée national de Phnom Penh; L’art du Cambodge ancien*, École Française d’Extême-Orient.
- Edgerton, Franklin. 1953. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, 2vols, Delhi.
- Long Seam. 2000. *Dictionnaire du Khmer Ancien: D’après les inscriptions du Cambodge du VIe – VIIIe siècles*, Phnom Penh.
- Majumdar, R. C. 1953. *Inscriptions of Kambuja*, Calcutta.
- Pou, Saveros, 1992. *Dictionnaire Vieux Khmer-Français-Anglais*, Paris.
- 石澤良昭監修 2005 『プノンペン国立博物館所蔵 大アンコールワット展 壮麗なるクメール王朝の美』東映株式会社

¹⁵ dnāl は鍋の一種であると見られているが、未詳。容器に入った米ということか。

(付2) ローマ字対照表

地名 (カナ)	(ローマ字)
アウラル(ストウン・)	Aral (stung)
アウラル(プノム・)	Aral
アレンヒエム	Arenhiem
アロン	Aron
アーン(・プノム)	Ang (pnom)
アン・キー	An-Kieye
アン・クレイ	Ang-Kley
アンコール	Angcor、Angkor
アンコール・ティエ	Angkor-Tieye
アンコール・ボレイ	Angkor-Borey
アンコン(ストウン・)	Anconh
アンサー・チュレイ	Ansa-cherai
アン・チューン	Ang-choeung
アンティエイ・チェイ	Antiey-chey
アントン・クラヴィエン	Antong-kravien
アンドーン・トゥック・サーブ	Andaung-Teuc-Sap
アントン・マック・ブラン(ストウン・)	Antong-Mac-Prang
アンロン・アーレアック	Anlong-arac
アンロン・コーキー(ストウン・)	Anlong-Coki
アンロン・ソー	Anlong-saã、Anlong-sã
アンロン・トナオト(ストウン・)	Anglong-Thnott
アンロン・プロヴェーク	Anlong-provac
アンロン・マック・ブラン(ストウン・)	anlong Mac-Prang
ヴァイ(オー・)	Vai (au)
ヴァン(ストウン・)	Van
ヴェール	Véal
ヴェール・アノン	Véal-Anon
ヴェール・カンダール(オー・)	Véal-Kandal
ヴェール・スラエ・ムオイ・ローイ	Véal-Sré-Moroi
ヴェール・チェン・ヨム	Véal-Chen-Iom
ヴェール・トアブ	Véal-Tap
ヴェール・トモエ・アンカエブ	véal Thma-Angkep
ヴェール・トラペアン・プノム・バック	Véal-Trepang Pnom-Bac
ヴェール・ニエン・ヨム	Véal-néang-ioum
ヴェール・ポック	Véal-Phoc
ヴェール・ミエス	Véal-Méas
ヴェール・ミエス(プレーク・)	Véal-Méas(prec)
ヴェール・ラル	Véal-Ral
ヴェール・レーン	Véal-Reen
ヴェール・レーン(プノム・)	Véal-Reen
ヴェエン・チュレイ(オー・)	Van-Cherei
ヴィン・テ運河	Vinh-Té
ヴェアン池	Véang
ヴェアン・トメイ	Véang-Thmei
ヴェーン(プノム・)	Veng

ヴォルヴォン	Vorvong
ヴォルヴォン・ソーリヴォン (ブノム)	Vorvong-Saurivong
ウドン	Oudon
エンティオツ(ブレーク・)	Entioh
オムビル・カンドウオル(オー・)	Ompil-Canduol
オムビル・コードル(オー・)	Ompil-Caudol
カイ・タムパン	Cai-Tumpan
カエブ	Kep
カオ・ヴォン	Kao-vong
カオン(ブレーク・)	Caong、Kong
カッサン・プヌウ	Kassan-Pho
カッサン・プヌウ(ストウン・)	Kassan-Pho
カー・ニエン	Kha-néang
カビン	Kabin
カマウ	Camau
カムチャイ	Kamchay
カン	Kan
カン(オー・)	Kan
カンドール・ストウン	Kandal-Stung
カン・チョムパー・トーチ(ブノム・)	Can-Chompa-Tauch
カン・チョムパー・トム(ブノム・)	Can-Chompa-Thom
カントー	Cantho
カントローク・カン	Kantroc-kann
カン・プリエム(ストウン・)	Cang-Préam
カン・ボット	Cân-vot
カンラン(ブノム・)	Canlang
キエイタート	Kieytat
キエソック(ブノム・)	Kiésoc
キエノック	Kiênoc
キエブ(ストウン・)	Kéap
キエラム・プオツ	Kiéram-po
キダウク(ブノム・)	Kidauk
キチャス(ブノム・)	Kiechas
クサチ	Ksach
クサチ(ブノム・)	Ksach
クサム	Ksam
クダート(ブレーク・)	Kedat
クチョール(ストウン・)	Khchoul
クチョール(ブノム・)	Khchôul
クデイ・トナオト	Kedei-Thnott
クドル(ブノム・)	Kdol
クドル (ブノム・)	Khdol
クナー	Kna
クナー・チャーイ(オー・)	Kna-Chhai
クナート	Knat
クナート・ロミエス	Khnat-reméas
クバル・クマオチ(オー・)	Cabal-Khmoch
クバル・ロミエス	Kebal-Reméas

クビー	Kebie
クヘー(プノム・)	Couhéa
クポップ(プノム・)	Khpop
クラ	Kra
クライ	Krai
クラヴァン(ストウン・)	Kre vanh
クラヴァン(プノム・)	Kre vanh
クーラオ・タイ	Culao-Tay
クラオム	Krom
クラコー	Kreko
クラッ(プレーク・)	Crah
クララン	Kralanh
克蘭	Crang、Krang
克蘭(オー・)	Crang
克蘭・クローク	Krang-Khloc
克蘭・クローク(ストウン・)	Krang-Khloc
克蘭・コムラエン	Crang-Komrêng
克蘭・ソマー	Crang-Summa
克蘭・ソムナー	Crang-Sumna
克蘭・ソムラエ	Crang-Samrê
克蘭・ブラ	Crang-Pra
克蘭・ボンレイ(ストウン・)	Krang-Ponlei
克蘭・ロヴァイ	Crang-Rovai
克蘭・ロヴァイ(オー・)	Crang-Rovai
克蘭・ロミエス	Krang-Reméas
クレ	Khlee
クレイ	Khley
クレコー	Kreko
クレサット(オー・)	Kressat
クレチュ	Kreché
クレ・ニエン	Kré-néang
クレペン・ピー(ストウン・)	Krepenh-pir
クレーン(プノム・)	Coulen
クレン・アク	Khlēng-Ac
クロオーブ	Craop
クローク	Khloc
クローク	Klúc
クローク(オー・)	Khloc
クローチ(オー・)	Crauch
クロチャープ(オー・)	Krechâp
クロブウ(プノム・)	Krepeuh
クロモム・バン	Kremom-Ban
ケシオ(オー・)	Khesior
コー	Kou
コーイ(プノム・)	Coi、Koi
後江	fleuve Postérieur
コーク(プノム・)	Khoc
コーク・チャス	Kauk-chas

コーク・バンティエイ	Coc-Banteay
コーク・ボンロー	Kauk-pongro
コッ(ブレーク・)	Kah
コック	Koc、Cok、Coc
コッ・トーチ	Câh-Tauch、Cah-Tauch
コッ・トーチ(ブレーク・)	Câh-Tauch
コッ・トモー・ソー	Cah-Thma-Sâ
コッ・ノリエ	Ka-Noréa
コッ・ロン	Cah-Ron
コポック(プノム・)	Kopok
コム・セン	Kom-Sen
コム・プレーン	Kom-Preng
コムパート(プノム・)	Kombatt、Kompatt
コムバオ	Kombo
コムバオ(プノム・)	Combo、Kombo
コムバオ(ブレーク・)	Combot
コムバリエ(プノム・)	Compalea
コムピエ	Kompear
コムプーン	Kompeunh
コムポート	Kampot、Kampott
コムポート(ブレーク・)	Kampott
コムボン・アムピル	Kompong-Ampil
コムボン・カエ	Kompong-Khé
コムボン・カッサン	Kompong-Kassan
コムボン・カッサン(ストウン・)	Kompong-kassan
コムボン・カンダール	Kompong-Kandal
コムボン・クデイ(オー・)	Kompong-kedey
コムボン・クラオム	Kompong-Krom
コムボン・クルオス(ブレーク・)	Kompong-Cruos
コムボン・クルオッ(ブレーク・)	Kompong-Kruoh
コムボン・クレアン	Kompong-kléan
コムボン・サオム	Kompong-Somm、Kompong-Som
コムボン・サオム(ブレーク・)	Kompong-Som
コムボン・スヴァイ	Kompong-Swai、Compong-soai、Kompong-soai
コムボン・スヴァイ(ストウン・)	Kompong-svai
コムボン・スダム	Kompong-Sdam、Kompong-sedam
コムボン・スダム(ブレーク・)	Kompong-Sdam
コムボン・ストウン・チュルウ	Kompong-stung-cherou
コムボン・スマチ	Kompong-Smach
コムボン・スロラッ	Kompong-Srela
コムボン・タチェス	Kompong-Tachés
コムボン・チナン	Kompong-Chhnang
コムボン・チャーム	Kompong-cham
コムボン・チュヴィエ(ブレーク・)	Kompong-Chevea
コムボン・チュルウ	Kompong-cherou
コムボン・チュルウ(ストウン・)	Kompong-cherrou
コムボン・チョム	Kompong-Chom
コムボン・トゥオル	Compong-toul、Kompong-Toul

コムボン・トム	Kompong-thom
コムボン・トモー	Kompong-thma
コムボン・トモー(プレーク・)	Kompong-thma
コムボン・バーイ	Kompong-bay
コムボン・ハウ	Kompong-hao
コムボン・ブラック	Kompong-Prac
コムボン・ブラック(ストウン・)	Kompong-Prac
コムボン・ブレア	Kompong-pra
コムボン・ブレイ・クローン	Kompong-prey-khlong
コムボン・ブレイ・クローン(ストウン・)	Kompong-prey-khlong
コムボン・ブロック	Kompong-phluoc
コムボン・ユオル	Kompong-Youl
コムボン・ルオン	Kompong-Luong
コムボン・ルン	Kompong-Roun
コムボン・ルン(ストウン・)	Kompong-Roun
コムボン・レチ	Kompong-Elech
コムボン・レーン	Kompong-leng
コムボン・レーン(プノム・)	Kompong-leng
コムボン・ロカー(ストウン・)	Kompong-Roca
コムレン	Komreng
コムレン(プノム・)	Komreng
コーラート	Korat
コーン・カアエク(ストウン・)	Kôn-kaek
コン・チャー	Cong-Chha
コン・チャー(オー・)	Cong-Chha
コントレイ	Kontraï
コン・ピセイ	Kong-Pisé
サイゴン	Saigon
サイ・ソック(プノム・)	Say-sack
サエン	Sen
サエン(ストウン・)	Sen
サエン(ピエム・)	sen
ザクザー	Rachgia
サセット(ストウン・)	Sasset
サソンサオ	Sasongsao
サダ(オー・)	Sada
サデーク	Sadec
サムプウ(プノム・)	Sampou
サンカット・プレーク(プノム・)	Sangkat-Prec
サン・キエ	Sang-kéa
サン・クバル	Sang-kebal
サンケー	Sangké
サンケー(ストウン・)	Sangké、Sangkê、Sanké
サンケー(プレーク・)	Sangké (prec)
サン・ケアク	Sang-kéak
サンコイ(オー・)	Sangkoi
シウプウ	Sophou
シエム・リエブ	Siemréap

シエム・リエブ(ストウン・)	Siemréap
ジエン・タイン	Gieng-thanh, Gien-thanh
シソボン	Sysophon
シヤム湾	golfe de Siam
小湖	petit Lac
スヴァー・フル	Sva-hul
スヴァイ	Swai
スヴァイ(プレーク・)	Swai
スヴァイ・チェーク	Svai-chek
スヴァイ・ドーン・カエウ	Svai-don-kéo
スヴァイ・ドーン・カエウ(ストウン・)	Svai-don-kéo
スヴァイ・バック	Swai-Bac
スコム	Skom
スダオ	Sedao
ストウン	Stung
ストウン・ヴィエル(プレーク・)	Stung-Véal
ストウン・トラン(ストウン・)	Stung-trang
ストーン(プレーク・)	Stung
ストーン	Stung
スナー(プノム・)	Sna
スヌオル・ロオー	Snail-lâa, Snail-Lâa
スノム・アムプル(プレーク・)	Snam-Ompil
スバウ	Sebau
スバエク・クラー	Sebec Cla
スピエン(オー・)	Spéan
スピエン・クメーン	Spean-khmeng
スピエン・スラエン	Spean-sreng
スピエン・スラエン(ストウン・)	Spéan-sreng
スピエン・チェイ	Spean-chey
スピー	Speu
スマチ(プレーク・)	Smach
スマチ・トーチ	Smach-Tauch
スマチ・トム	Smach-Thom
スムナート	Sumnat
スラー(スロック・)	Sla (Sroc-)
スラエ・アムベル	Sré-Umbell
スラエ・アムベル(プレーク・)	Sré-Umbell
スラエ・クノーン	Sré-Kenong
スラエ・チャーム	Sré-Cham
スラエ・チャーム(プノム・)	Srè-Cham
スラエ・トム	Sré-Thom
スラエ・トム(プレーク・)	Sré-Thom
スラエ・ブレイ	Sré-prey, Srè-prey
スラエン(ストウン・)	Sreng
スラエン・タヴェート	Sleng-thavet
スラエン・ナリン	Sleng-narin
スラー・カエウ	Sra-kéo
スラー・コー	Sla-Kou

スラー・コー(ストウン・)	Sla-Kou、Sla-Cou
スラー・ター・アオン(プノム・)	Sla-Taonn
スラー・ター・アオン(プレーク・)	Sla-Taonn
スラック	Strack
スラー・ムニエン	Sla-Me-Néang
スラン	Srang
スラン(プノム・)	Srang
スラン・トム (ストウン・)	Srang-Thom
スリン	Suren
スルオチ(プノム・)	Srouch
スロック(プノム・)	sroc
スロル (ストウン・)	Sraul
セノック(ストウン・)	Senoc、Sénoc
セヤオ	Seyao
セン・トゥーク	Sen-touc
セン・トゥーク(プノム・)	sen-touc
ソー(プノム・)	Sâ、Sa
ソー・カム	Sou-kam
ソートニコム	Sautonikom
ソピエ	Sophéa
ソムバオ・ロヴィエン(オー・)	Sombâc-Loveng
ソムバオ・ロヴィエン (プノム・)	Sombâc-Loveng
ソムバット	Sombat
ソムプウツ	Sompeuh
ソムプオ	Sombuo
ソムラオン	Somrong
ソムラオン(プノム・)	Somrong
ソムラオン(プレーク・)	Somrong
ソムラオン・サエン	Somrong-Sên、Somrong-Sen
ソムラオン・トン	Somrong-Tong
ソムラオン・バック・チャンチエン(プレーク・)	Somrong-Bac-Enchienn
大河	Grand-Fleuve
ダウム・ケドン(プレーク・)	Dam-Kedon
タヴン	Tavounh
ダエク(プノム・)	Dèk
タエコン(プノム・)	Taecon
ター・カエウ	Ta-Kéo
タクート(プノム・)	Tacout
ターゲン(プノム・)	Tanghen
ター・セン	Tha-seng
ター・チエ	Tha-chieye
ダチ・プダオ(ストウン・)	Dach-Pedao
ダチ・プダオ(プノム・)	Dach-Pedao
ダーツ(ストウン・)	Darh
タップ・チェアン	Tap-Chéang
タップ・チェアン(プレーク・)	Tap-Chéang
タ・ドゥオン(プノム・)	Ta-Duon
タニ	Tanny、Tanih

タニ(ブレーク・)	Tanih
タパン	Tapang
タプー(オー・)	Tapou
ダム・ピア(ブノム・)	Dâm-Phea
ダムレイ・ロミエル(ブノム・バック・ヌムの)	Domrey-Romiel
タメアク	Taméac
タン・プロチ	Tang-Ploch
タン・プロチ(ストウン・)	Tang-Ploch
ダンレーク(ブノム・)	Dangrek, Dang-reck
チエ	Chieye
チエイ(ストウン・)	Cay
チエソック	Chiésoc
チエプ	Chéap
チエム・クラン(ブレーク・)	Jéam-Cranh
チェン・ヨム	Chen-Tom, Chen-Iom
チクラエン	Chakreng
チニエ(ストウン・)	Chénéa
チニット(ストウン・)	Chinit
チマー湖	lac Chhma
チャー	Char
チャウドック	Chaudoc
チャウム・ソム(ブレーク・)	Chaum-Som
チャエク・ブラック(ブレーク・)	Chec-Prac
チャーク (オー・)	Châk, Châc
チャー・クレト(ブレーク・)	Cha-kret
チャス(ストウン・)	Chas
チャムカー・アンロン	Chamkar-anlong
チャムカー・クイ(ブノム・)	Chamkar-kui
チャムパー	Champa
チャムボック	Chamboc
チャムボック(ブレーク・)	Chamboc
チャン・アン(オー・)	Chanh-Anh
チャンタブン	Chantabunn, Chantaboun
チュヴェーク(オー・)	Chvek
チュオ・ペーイ	Chour-Peey
チューク	Chouc
チューク・ソー	Chhuk-Sâ
チュー・コッ	Chhu-Cah
チュー・ティエル	Chhu-Téal
チュニエム(ブレーク・)	Chnéam
チュヌル・チュルル	Chnoul-Cheroul
チュラーブ	Cherap
チュラーブ・アン・カム(ストウン・)	Cherap-Ang-Kam, Chérap-Angkam
チュラン・スロモット	Cherang-sremot
チュルウ	Cherreo
チュルウ(ストウン・)	Cherreo
チュルウ(ブノム・)	Cherreo
チュルオット・チュニエ(オー・)	Schlo-Chnéa

チュルオツ・ドムボン	Cherro-Dombang
チュレイ	Cherei
チュレイ・バック	Cherei Bak
チュレイ・バック(ストウン・)	Chereibak, Cherei-Bac
チュローイ・ニエン・グオン	Cheroui-néang-nguon
チュローク	Cheroc
チュローブ	Cherop
チュロモー・スナー	Chirmo-Sna
チュロモー・スナーブ	Chirmo-Snop
チュロモー・スナーブ(プノム・)	Chremos-Snáp
チューン・クラー・チュローン	Choeung-Khla-Chhláng
チューン・コー	Choeung-Cô
チューン・コー(プノム・)	Choeung-Cô
チューン・コー(ブレーク・)	Choeung-Cô
チューン・テーン	Choeung-teen
チョピエ	Chopéa
チョムゴ(プノム・)	Chomngo
チョムリエン・ティエウ(ストウン・)	Chom-Léan-Téou, Chomléan-Téou
チョロン	Cholon
チョン・カル	Chong-kal
チョン・キエル・クラ(ブレーク・)	Chong-kiel-khla
テイ	Teey
ティエブ(プノム・)	Téap
ティエル(ブレーク・)	Téal
ティエン・ブレイ	Tien-Prey
デイ・クロホーム	Dei-Crahom
デイ・クロホーム(オー・)	Dei-Crahom
デイ・ソー(オー・)	Dei-sa
テチャス	Techas
テー・トーチ	Te-tauch
テー・トーチ(ストウン・)	Te-tauch
テブデイ (プノム)	Tepedey
テロ・トム	Télo-thom
トヴィエ(プノム・)	Tvéa, Thvéa
トヴィエ・ダムレイ(プノム・)	Thvéa-Domrey
トヴィエ・プレア・チョール	Thvéa-Pral-Chaul
トゥオル・サーラー	Toul-Sala
トゥオル・トラペアン・ブレイ	Tuol-Trepang-Prey
トゥオル・プロム	Tul-plom
トゥオル・ペ克蘭	Toul-pecklan
トゥーク・ミエス	Tuc-Méas
トゥーク・ミエス(プノム)	Tuk-méas
トゥック・ボル(プノム・)	Teuc-poul
トゥック・サーブ(ブレーク・)	Teuc-Sap
トゥック・チャー	Teuc-thio
トゥック・チャー(ストウン・)	Teuc-thio, Teucthio
トゥック・トラ(ブレーク・)	Teuc-Tla
トゥック・ロオク	Teuc-Laak

トゥック・ロオク(スロック)	Teuc-Laak
トゥック・ロオク(プレーク・)	Teuc-Laak
トゴン・プリット(プノム・)	Thngon-Prit
トステイエク	Tosteac, Tostéac
トタン・トンガイ	Totung-Thngay
トーチ(プノム・)	Tauch
トーチ(プレーク・)	Tauch
トック・チュレイ(オー・)	Toc-Cherei
トック・チュレイ(プノム・)	Toc-Cherei
トトウオル(プレーク・)	Totuol
トナオト	Thnot
トナオト(プレーク・)	Thnott, Thnot
トナオト・アンロン・ペー(プレーク・)	Thnott-Anlongphé
トノッ(プレーク・)	Tnoh
トノム	Thnom
トポーン	Thepong, Thppong
トマート(オー・)	Thomat
トム(オー・)	Thom
トム(プレーク・)	Thom
ドム(プノム・)	Dôm, Dom
ドムナック・トゥーク	Domnac-Touc
ドムポーン(オー・)	Dombang
ドムローン(オー・)	Damrang
トメイ	Thmey
トメイ(プレーク・)	Thmey
トモー・アンカエブ	Thma-Angkep
トモー・アンキエン	Thma-angkiang
トモー・コル	Tma-Col
トモー・ルーン(オー・)	Thma-Roung
トモー・ルーン(プノム・)	Thma-Roung
トラウ(オー・)	Trau
トラウ(プレーク・)	Trau
トラウイ・コッ	Trey-Cah
トラエン(ストウン・)	treng
トラダック・ポーン	Tadac-Pong, Tadac-Pông
トラデーウヴェチ	Tradevech
トラペアン	Trepang
トラペアン(プレーク・)	Trepang
トラペアン・キー	Trepang-Kiey
トラペアン・クチョール・ボック	Trepang-Khial-Bac
トラペアン・クレーン	Trepang-Creng
トラペアン・クロボウ	Trepang-krepeuh
トラペアン・サーラー	Trepang-Sala
トラペアン・トラー	Trepang-tla
トラペアン・プレイ	Trepang-Prey
トラペアン・ルセイ	Trepang-russey
トラペアン・ルセイ(オー・)	Trepang-russey
トラペアン・ルプゥ(プレーク・)	Trépang-Repou

トラム・コー	Tram-Kou
トラム・トラ	Tram-tra
トラメアク	Traméac
トラン	Trang
トラン	Tranh
トラン・カッサン	Trang-kassan
トリエ・ムオーム	Thléa-Moham
トリエ・ムオーム(ストウン・)	Thléa-Moâm(stung)
トリエク	Tréak
トリエク(プレーク・)	Tréak
トレアン	Treang
トレセイ	Tressey
トローク	Trok
トロソック(オー・)	Tessak(au)
トロバエク	Trebec
トロロク	Treloc
ドーン・オク	Daun-oc
トンゴ	Thngau-Tauch
トンゴ	Thngau-Thôm
ドン・スドン(プレーク・)	Don-Sdong
ドーン・ドゥオン	Don-duong
ドントレイ	Dontri
ドントレイ(ストウン・)	Dontri
ドーン・メオ	Daun-méo
トンレ・サーブ	Tonlé-Sap
トンレ・チマー	Tonlé-chhma
トンレ・ルプウ	Tonlé-repou
ナム・カー	Nam-Kar
ニエン・カンレイ	Néang Kang-rey
ニョー(オー・)	Nho
ネアク・トラン	Neac-Trang
ノリエイ(プノム・)	Noreye
バサン	Basan
バストウン	Pastung
バセット	Basset
バック(プノム・)	Bac(Phom-)
バック・カン	Bac-Cang
バック・ダオ(プレーク・)	Bac-dao
バック・チェアン(オー・)	Bac-Chéang
バック・チャンチエン(プレーク・)	Bac-Anchienn、Bac-Enchienn (prec)
バック・ドム(オー・)	Bac-Dom
バック・ヌム(プノム・)	Bac-Nim (Phom-)
バック・ブレアッ	Bac-préah
パット・ソン・ダイ(ピエム・)	Phat-son-day
パット・ドムボーン	Battambang、Bat-dombang
バティ	Bati
ハーティエン	Hatien
バート(スロック・)	bat

バノン	Banonn, Banon
バ・プノム	Baphnum
バボー	Babaur
バホー(ブレーク・)	Pahau
バボル	Bapol
バムビ	Bumbi
バライ	Barai
バラン(プノム・)	Balan (Pnom-)
バリエム	Paréam
バルーン(ストウン・)	Baroung
バン・カナート	Bang-kanat
バン・カン	Bang-kang
バンコク	Bangkok
バンチャン	Banchang
バン・チュコール	Banh-Chhcool
バン・チョール	Banh-Chhool
バンティエイ・シエム	Bunteay-Sim
バンティエイ・チャス	Bunteay-Chas
バンティエイ・ニエン	Bunteay-néang
バンティエイ・プレイ(ブレーク・)	Bunteay-Prey (prec)
バンティエイ・ミエス	Bantéay-Méas
バンティエイ・ロカー	Bunteay-Roca
バンビの円錐	cône Bunbi
ピエム	Péam
ピエム・ブン(ブレーク・)	Péam-bung
ピエム・カンチャー	Péam-kâchhas
ピエム・スロル	Péam-sraul
ピエム・セイマー	Péam-séma, Péam-sema
ピエム・チョムニーク	Péam-Chimmit
ピエム・トレアン	Péam-Treng
ピエム・ラン	Péam-rang
ピエム・ルーク	Peam-Luc
ピレネー・オリアンタル	Pyrénées orientales
ビン・トゥアン	Binh-thuân
ブ	Bu
フエ	Hué
ブオク	Puoc
ブオク(ストウン・)	Puoc
ブオン	Puon
ブガ(プノム・)	Phnga
フーコック	Phuquoc
ブサー・バボー	Phsa-Babaur
ブサー・バボー(ストウン・)	Phsa-Babaur
プットリエ	Putrea
プテア・クラア(オー・)	Phtea-khla
プティオク(プノム・)	Phtioc
プート	Pât
プネーン(プノム・)	Pneng

ブノー(ブノム・)	Phno
ブノム・スマチ(ブレーク・)	Phnom-Smach
ブノム・ペン	Pnom-penh
プーム・カンダール	Pum-kandal
プーム・チェン	Pum-Chen
プーム・バーイ	Pum-Bay
プーム・ブラン(ブレーク・)	Pum-Prang
プーム・ペイ	Poum-Pey
プーム・ユーク	Pum-iouc
ブラー(ブノム・)	Pra
ブラー(ブレーク・)	Pras
ブラカム(ブレーク・)	Pracam
ブラサート(プーム・)	pressat
ブラム・チューク(オー・)	Pram-Chhuc
ブラン	Plang
ブラン(ストウン・)	Plang
ブラン(ブレーク・)	Prang
ブレア・チョール(ブノム・)	Pra-Chaul
ブレア・ドムボーン	Préa-dombang
ブレイ・アンカン(ブレーク・)	Prey-Angkonh
ブレイ・アンデン	Prey-Andeng
ブレイ・クマエ	Prey-Khmer
ブレイ・コル	Praye-Col
ブレイ・サット	Prey-sath
ブレイ・サット(ストウン・)	Prey-sath
ブレイ・スラン(ブノム・)	Prey-srang
ブレイ・トタン・トム(ヴィエル・)	Prey-Totung-Thom
ブレイ・トメイ	Prey-Thmey
ブレイ・トラーチ(ブノム・)	Prey-trach
ブレイ・バリエム	Prey-Paream
ブレーク・スマチ(ブノム・)	prec Smach
ブレサート	Pressat
ブローン	Phlong
プーロ・コンドル	Poulo-Condore
プロビエト(ブノム・)	Probiet
プロム・プガ(ブノム・)	Prom-Phnga
ブン	Bung
ブン・ヴェーン	Bung-Veng
ブン・ヴェーン(ブレーク・)	Bung-veng
ブン・クナー	Bung-Kna
ブン・クナイル	Bung-knail
ブン・クラオム(ブノム・)	Bung-Krom
ブン・クルオス	Bung-cruoh
ブン・スヴァイ(オー・)	Bung-Swai (au)
ブン・スダオ	Bung-sedao
ブン・スラン	Bung-srang
ブン・チャン	Bung-chan
ブン・ディエブ	Bung-Diep, Bong-Diep

ブン・トゥーク	Bung-touc
ブン・トーチ	Bung-tauch
ブン・トム	Bung-thom
ブン・トラー(ブレーク・)	Bung-Tra
ブン・トラーチ(ブノム・)	Bung-Trach
ブン・トラーチ(ブレーク・)	Bung-Trach
ブン・ブラン(ブレーク・)	Bung Prang
ブン・ブロン	Bung-Phlong
ブン・ポー	Bung-Pou
ブン・ボック	Bung-Boc
ブン・モーン	bung-Moung
ブン・ラン	Bung-Rang
ブン・リエス	Bung-lies
ブン・リエト	Bung-Léat
ブン・リエト(オー・)	Bung-Léat
ベアン(ブレーク・)	Béang
ベイ(ストウン・)	Bey
ペイト・アンサー	Peit-ansa
ベキム	Pékim
ペート・リウ	Petriou
ペハ(ストウン・)	Péha
ボア	Boa
ポー・アンダエト	Pou-andett
ポイ・スヴァイ	Poy-svai
ポー	Pou
ボーク・コー(ブノム・)	Bac-Cô
ポーサット	Po thisat、Pursat
ポーサット(ストウン・)	Pursat
ポーサットの山	montagnes de Pursat
ポーティサット	Pouthisat
ポトロハイ(オー・)	Potlohai
ポニエ・ルー	Pinhalu
ポー・バン	Po-Bang
ポー・ブン	Po-Bung
ポポーク・ヴル(ブノム・)	Popok-Vi l
ポマート(オー・)	Pomat
ホム・クラヴァン(ブノム・)	hom Krevanh
ボムノン	Bam-nân
ボムバイ	Bombay
ボン	Bonn
ボン(オー・)	Pong
ボントアト	Pontatt
ボンレイ	Ponneray
ボン・レチ	Bon-Lech
ボン・ロック	Pong-Roc
ボンロー・ブロン	Pongro-prong
マック・ブラン	Mac-Prang
ミエン(ピエム・)	méang

湖の河	fleuve du Lac
ムチ	Much
ムニ	Meni
ムニ(オー・)	Meni
メコン	Mékong
モアト・クラ(プレーク・)	Mât-khla
モーン	Moung
モック・ペン	Muk-pen、Muk-penh、Muk-penn
モハット(プレーク・)	Mohat
モハー・テーブ	Maha-tep
モルー(プノム・)	MeLou
モルー・プレイ	MeLou-prey
モルン	Moroung
モンコル・ボレイ	Mongkol-borey
モンコル・ボレイ(ストウン・)	Mongkol-borey
ラプティ	Rapti
ラムセット	Ramset
ラムトー	Lamtau
ラン・クヴァオ(プノム・)	Rang-Kvao
リア	Ria
リエト(ストウン・)	Leat
リエブ	Leap
リエブ	Réap
リンクイン	Linhquinh
ルーク	Rouk
ルー(プノム・)	Roang(Phom-)
ルセイ	Russey
ルセイ(ストウン・)	Russey(stung)
ルバット	Lebath
ルプウ(オー・)	Repou(au)
ルミエ	Lemea
ルレイ・カーン・チューン(ストウン・)	Relay-Cang-Choeng
ルレイ・カーン・チューン(プノム・)	Relay-Cang-Choeng
ルン・スヴァイ(オー・)	Roun-Swai(au)
レアン・ヴェアン	Reang-véang
レアンルチ	Réangluch
レーム(スロック・)	Réem
レラット(プレーク・)	Relat
ロヴィエ	Lovéa
ロヴィエ(オー・)	Lovea
ロヴィエ(プノム・)	Lovéa
ロヴィエ(プノム・)	Lovéa
ロヴィエ・チュロム	Lovéa-cheroum
ロヴェーク	Lovec
ロムガ・スイ(オー・)	Lomnga-Soui
ロムドゥオル(プレーク・)	Romduol
ロムナチ(オー・)	Lomnach
ロムピエ	Rompéa

ロムロット(スロツク・)
ロリエブ・イエ
ロールオス
ロールオス(ストウン・)
ロールオス(ブレーク・)
ロローク(ブレーク・)
ロローク・カーン・チューン(ストウン・)
ロローク・カーン・チューン(プノム・)
ロロム(プノム・)
ロンペイ
ワット・アエク
ワット・アン
ワット・ポー
ワット・ルオン

人名 (カナ)

アー・トン
アルマン
アン・エム
アン・チャン
アン・ドゥオン
アン・メイ
ヴェイ・ヴォンサー
ヴォンサー・サンクリエム
エモニエ
オクニャ・カンキリ
オクニャ・スオキエローク
オクニャ・スレス・ピ・プネット
ガルスリー
玉雲
クルジェアン
コル
コロネリ
サイ・ソック
サントミエ
シー・ヴァッター
シン
セ・リム・チュオ
ター・クライ
ター・ムン
チャウ・クン
チャオ・クン・ボディン
張明講
トムソン
ドムボーン・クロニューン
ニエン・カンレイ
ニエン・プウ
ニエン・ミカ

Romlot
Roléa-Pir
Roluos
Roluos
Roluos
Relach
Relach-Câng-Choeng
Relach-cang-choeung
Relom(Phom-)
Longphei
Vat-ek
Watt-ang
Vat-Pou
Vat-luong

(ローマ字)

Atonn
Harmand
Ang-em
Ang-Chan
Ang-Duong
Ang-Mey
Vei-Vongsa
vongsa-sanghréam
Aymonier
Ocnha Khankiri
Ocnha-Sórkéoloc
Ocnha-srez-pi-phnet
Garcerie
Ngoc-Van
Coulgeans
Corre
Coronelli
Say-sack
Santhoméa
Si Votha
Sinh
Sê Lim Chuor
Tha-kray
Tha-moeun
Chhau-kun, Chaokun
Chao-kun-bodyn
Truong-minh-giang
Thomson
Dombang-kramhum
Néang Kang-rey
Néang-pou
Néang Mika

ニエン・ロムサイ・ソック
ノロドム
ピヤ・キエロン
ブオイ
ブーランジェ
フランシス・ガルニエ
ブレア・アン・チャン
プロソー・ソーリヴオン
ブロム・ケル
ボディン
ボノー
マビーユ
ムオ
ムン・スイ
モンティエ
ラグレ
リエチコル
ルソー
ルフオシュール
ルムスル
ロッティ・サエン

事項 (カナ)

アルボン号
アンロン
ヴィエル
ヴォワ・アンコット
エクスキュルシオン・エ・ルコネッサンス
オー
オクニャ
親指太郎
オン
オン・カイ
オン・ドイ
カサン
カダック
カダン
カンドル
カンボジアの牛
キー
クイ
クイ
クチョール・カダック
クチョーン
クチョーン・ピー
クティーン
クティーン・ポー
クドゥオチ

Néang Roum-say-sack
Norodom
Phya-kiéron, Phya-kiéromn
Buoy
Boulangier
Francis Garnier
Prea-Ang-Chan
Prosor Saurivong
Prom-kel
Bodyn
Bonnaud
Mabille
Mouhot
Mun-suy
Montea
Lagrée
Réachkol
Rousseau
Lefaucheur
Lemesle, Le mesle
Rot-thi-sen

(ローマ字)

le Harpon
Anlong
véal
vahrr-ang-kot
Excursion s et Reconnaissances
au
ochna
Petit Poucet
Ong
ong cai
ong doi
kassan
kadok
Kadan
Kandol
boefs cambodgiens
ki
kui
Kouyes
khiâl-kadok
Khchang
kchang pir
khting
khting-pô
keduoch

クトム	Ketom
クノル・ソムロー	knor-sômla
クノーン	khnong
クノーン	kenong
クメール	khmer、kmer
クラ・ゴム	kra-ngum
クルオン	cruon、cruonh
クルール	kreul
クレー	kré
クローン	khlong
クロニューン	kranhun、kranhum
クロムオン・チャムバック	kremuon-chambak
コーキー	coki
国立工芸院	Conservatoire des arts et métiers
コムニアン	comnian
コン・カー・ロック	konkaloc
コントゥオト・プレイ	kontuot prey
サオム	Som
砂糖ヤシ	palmier à sucre
サペック	sapèque
サライ	sarai
サラッコ	salacco
サンパン	sanpan
シヤムの牛	boefs siamois
スイ	Sui
スデイ	Sedey
ストウン	stung
スヌオル	snail
スバウ	sebau
スマイ、スメイ	smé
スマチ	smach
スラウ・ヴィエ	srau-véar
スラウ・ブラン	srau prang
スラエン	slêng、sleng
スロック	sroc
セペック	sapèque
セラット	selat
セラニエー	serannhé
セン	sen
セン	sen
ソークロム	sok-kram、sakrom
ソムラエ	Samré
ソムラオン	somrong
ター・アオン	taonn、taon
ダイ・クラー	dai-khla
タサイ	Tasay
ター・トラウ	tatrau
チオン	Tchiong

チャーク椰子	palmier chak
チャック	trac
チャム	tram
チャン	chanh
チュー・ブルー	chhu phloeung
チュリーク	chhlik
チュルオツ	cherro
チュルーン・サモット	chloeung sremot
チュレイ	cherei
チュローイ	Cheroui
チューン	Chhung
チョン	Xong
チレー	chré
デイ	dey
ティエル	Téal、teal
ティエル・クローン	téal-Khlong
ティカル	tical
テク	tek
テト	Têt
トゥーレーン	thu-reen
トゥケー	toquet、tocquet
トバエン	thbeng、thebêng、thebeng、trebeng
ドムナック	Domnacs、domnac
ドムローン・キア	tomlong-kia
ドムローン・チュルーク	tomlong-cherouc
ドムローン・ティエン	tomlong-tien
トモー・クロベイ	Thma-Crobei
トラーチ	trach
トラム	tram
トラメアク	traméac
トリエク	triek
トレイ・ラス	trey-rass
トロバエク・プレイ	trebec prey
トンレー	tonlé
ニエン・ピードンドップ	Néang-pitondop
ネアク・ター	Néactha、Néac-tha
ネアク・ター・ヴィエル	Néactha-véal
ネアク・ター・プレイ	Neactha prey、Neac-Thas-Prey
ネアク・トラン	Neac-Trang
ネアク・ンギエ	néac ngéa
ハイソム	hai som
パホー	pahau
ピサーク	pisak
プオス・トッカエ	po-také
プチェック	phchôc、phchoc
プディエク	phdiec、pedierck
ブラー	Pra
ブラウ・カンダール	Phlau-Ékandal

ブラウ・クラオム	Phlau-Ekrom
ブラウ・ユオン	Phlau iuon, Phlau-Iuon
ブラウ・ルー	Phlau-Éleu
ブラウ・ルオン	Phlau-Luong
ブラ・クブー	Pra-kepou
ブラブーク	Prabouq
ブリー	pli
ブレーク	prec
ブン	bung
ベン	penh
ポー	pôu
ポペル	popel
マック・ブラン	mac-prang
ムオーム	moâm
ムサン年	an Messanh, an Mesanh
ムレアク	méréac
ムレチ・トンサーイ	morech ansay
メー・スロック	mesroc
モーン	mong
ヤック	Yack
ヨマリエチ	iomreach
ラピスヤシ	palmier Rhaps
ラン	Rang
ラン・プノム	Rang-pnom
ラン・モアト・トンレー	Rang-mot-tonlé
リエス	Liès
リエチコル	REÁCHKOL
ロー	rau
ロヴィエン	rovéan
ロヴェューン	loveng
ロマン	Roman
ローン	rong

あとがき

この冊子の翻訳にあたっては、科学研究費補助金(特別研究員奨励費)を使用した。さらに東京大学大学院の神田真紀子さんに、文中に挿入されているベトナム語の単語の読解をお手伝いいただいた。天野瑞枝さんには、フランス語の読解に悩んだ部分について、様々な助言をいただいた。上智大学大学院の松浦史明さんからは、バンティエイ・ニエン碑文(第10章)に関する詳細な解題をいただくことができた(松浦さんと北川とでは、カンボジア語のカナ表記法に若干の違いがあるが、北川が担当した部分は北川の、松浦さんが担当した部分は松浦さんの方式通りとし、敢えて統一しないことにした)。総合地球環境学研究所の阿部健一先生、京都大学の柳澤雅之先生には、動植物に関する記述についてご相談させていただいた。最後に、この冊子の発行にあたってご尽力いただいた、京都大学の小林知先生に感謝を申し上げます。